

---

# 真剣で俺が愛するもの！

忍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真剣で俺が愛するもの！

### 【Nコード】

N4828R

### 【作者名】

忍

### 【あらすじ】

川神学園に通う主人公は毎日必死に逃走劇を繰り返していた。そんな日々慣れを感じ始めた頃、些細なことから危機に陥ってしまう。「俺は先輩とは違う」もう二度と振るわないと誓った拳を勘違いから再び握ることに……！

9 / 28 第三話まで加筆及び修正いたしました

## 読む前に

はじめまして作者の忍しのぶと申します。この度は【真剣で私に恋しなさい！】の二次創作である、【真剣で俺が愛するもの！】を見ていただきありがとうございます。

## 注意

この作品はネタばれを含まれています。ネタばれを好まれない原作を未プレイの方や現在プレイ中の方は終了後に読まれることをおススメします。それでもよいと言う方は本編へお進みください。

ご感想、ご意見、ご指摘、誤字脱字報告などをくださると嬉しいです。

作者への世間話などでも歓迎いたします。色々な方々と触れ合うことができるのがこのサイトの良い所だと私は思っていますので、気軽に書いてください。

最後までお付き合いいただきありがとうございます。では【真剣で俺が恋するもの！】の本編をどうぞ。



第1話・偽りの平和（前書き）

8 / 18 加筆及び修正いたしました

## 第1話：偽りの平和

嘗てサムライが数多くいた日本。そんな日本の川神の地で毎日のように追いかけてこする男女の姿があった。

「諦めて私と戦え」

そう発するのは追いかける側の人物。

同年代の同姓と比べると身長も高く、発育が良い体つき。長く伸ばした黒髪を風に靡なびかせる少女“川神百代”かわかみもよは、行き止まりとなっている袋小路まで相手を追い詰めると、いい加減数えるのも面倒になったセリフを目の前にいる少年に投げかけた。

「いや『諦めて』って言われても……」

絶体絶命と言っても可笑しくない追い詰められた状況でありながらも、どこか余裕の感じられる態度で百代に返答する。少年も慣れているのだろう。向こう側に見える平和という世界とこちら側の危険な世界を分かちように仁王立ちしている百代との関係に。

「というより勘違いですよ先輩。俺はどこにでもいる学生で、先輩みたいなバケ……超人じゃないんだ。それこそ戦えなんてお門違

」

「いや誤魔化されんぞ！ この私が追いかけてなかなか捕まらない奴なんて、そうはいない」

逃れようとする少年の言葉を遮るように百代は口を挟んだ。百代の言った『この私に』という発言には決して思い上がりで出た言葉ではなく、自信が現れていた。

なぜなら川神百代は、綺麗やカッコいいと言われるモデルのような容姿からは想像することはできないが、武道を嗜む者なら一度は聞いたことのある存在“ 武道四天王 ”と呼ばれる人間の一人だったからだ。

ようするに半端なく強いのだ。

百代の言葉がどこから来るものなのか、そんなこと百も承知な少年。苦い表情をしながら『何を言っても無駄なんだろうなあ……』と諦めつつも、どうにかしてこの場を乗り切ろうと口を動かした。

「それだけの理由で決めないでくれよ。たまたま足が速いだけだつて」

「フッフ、理由はもう一つある」

含みを持たせ笑いながら話す百代の言葉に驚いてしまったのか、一瞬だけではあるが少年の思考速度が停滞してしまう。

百代は少年が何の反応を見せないのを気にした様子もなく、その発育の良い胸をドンと前に突き出すように張りながら自信満々にこう告げた。

「私にある女の勘が“お前は強い”と言っている」

決まったと言わんばかりに、得意げな表情を浮かべる百代。

「……………」

今度こそ完全に頭の回転がストップし、棒立ちになってしまいう少年。

(よくわからんがチャンス！)

放心状態になり、地に足が縫いつけられたかのように動かない少年に対し、百代はジリジリと距離を詰めていく。

先程まで……いや、これまで戦闘を拒み逃げ続けていた少年は、今や格好の獲物に慣れ果ててしまっていた。

尚も接近が続く。

慎重にゆっくりと少年に近付いて行っていた百代だったが、最後



の最後、ツメのところまでミスを犯してしまう。

「もう無理だ」

あと一息のところまで少年に近付いていた百代は、我慢できず飛びかかるうとしてしまい、少量であるが気を漏らしてしまったのだ。そんな極僅かな気を無意識なのか、はたまた動物的な本能なのかはわからないが感じ取った少年は、愚かにも手放してしまっていた意識を取り戻し我に返った。

「……うわっ！」

手を伸ばせば簡単に触れる距離まで接近を許してしまっていたことに気付くと、自分を望まない戦いに誘おうとしている伸ばされた百代の腕を外側から受け流すように力の方向をコントロールし変える。

「なにっ!？」

突如火がついたように動き出した少年に百代は驚いてさまい、一秒ほどだったが動きが止まる。その一秒とコンマ数秒、それで十分だった。

少年の起こした行動は功を演し、結果、絶望的状况だった壁に背を向けていた少年と、圧倒的有利に立っていた百代の位置は入れ替

わることになった。

「いやあ、よくわからないけど運がよかった」

内心「しまった」と後悔の念に苛まれていた少年だったが、作爲的にも思える態わざとらしい声を上げると、百代に背を向け自分を阻むものなど何もない自由な空間へと一目散に走り出した。

「……ま、待て！」

百代が静止を求める言葉を言い終わる頃には少年の姿は遙か遠くにあった。

「逃がすか！ と、いつもなら言うところだが今日はこれでおしまいにしよう」

追いつこうと思えば追いつけるのだが諦めることにしたようだ。

袋小路に一人残された百代は、どんどん小さくなっていく少年の背を見ながら不気味な笑みを浮かべていた。

「危なかったあ。つたく、あの脳き……先輩には困った」

目を付けられてからというもの、ほぼ毎日追い回されている学園の先輩、川神百代の魔手から今日も逃げ延びた少年は、一人愚痴っていた。心なしか元気がないように感じる。

「失敗したなあ。逃げるのに必死で……………ああ」

言い掛けていた言葉は後半で溜め息に変わる。後ろを気にしてか早歩き気味だった足取りは重くなり、顔は後悔の念で染まっている。ここまで少年が落ち込んでいる原因は、先程の自分が起こした行動のことだった。

油断大敵とはいうが相手が“武の天才”とまで謳われている川上百代の手を受け流し、囚われることなく逃げるどころか背後にまで回り込んだ動きは、少年の言っていた“どこにでもいる学生”のものではなく、素人目に見ても武に心得のある者の体捌きだった。

「これ以上誤魔化すの無理っばいし、これからどうすっかなあ」

武の心得があるからといって、戦闘を好む好まないは別の話。平和を望む少年は後者であり、様々な噂の絶えない川神百代との戦闘などもつての他だった。

少年の頭の中では、ありとあらゆる逃げの口実や言い訳が飛び交っていたが、どれもイマイチで、戦闘を好む百代が納得のいくであろう言葉は見つかることはなかった。

気分が落ちている時は、どれだけ考えてもマイナス思考なため、良いアイディアなど浮かぶはずもない。

「憂鬱だ……」

こうして一人ボヤキながら、一秒毎に表情を変えながら歩いている少年のもとに近づいてくる影があった。

「ん？ おう、迎えに来てくれたのか」

少年は影に気付くと、解決策を探していた思考を手放し、しゃがみ込み寄り添ってくるものを両手で抱き上げた。

ニヤー。

「そうかそうか。ありがとな」

少年の腕に抱かれているのは茶色い毛並みをした猫だった。話し

てはいるがモチロン猫の言葉がわかるわけではなく、少年自身が勝手に思い込んでいるだけで、本当に猫が少年を迎えに来たのかはわからない。

ただ散歩していたところに、たまたま少年が歩いていただけかもしれない。それでも少年はよかった。

自分が落ち込んでいる時に誰かが傍らに居てくれるのは心強い。たとえそれが人ではなく猫だとしても同じだった。

「そつえば最近見なかったけど、何してたんだ？」

問いかける少年の言葉に答えるようにで猫は腕の中からスルリと抜け地面に降り立つと、まるで案内すると言わんばかりに歩き出す。

「どこに行く」と言いかけた少年だったが、腕に巻いている時計に目をやると、頷き猫の後を追いかけた。

十数分後、先導していた猫と後をついて歩いていた少年が着いた場所は多馬川の土手だった。

「なにがあるんだよ」

ニヤー、ニヤー。

「ここで待ってる、ってか？」

ニヤー。

「わかったよ。でも、あんまり待たせるんじゃないぞ」

少年との会話？を終えた猫は、草の生え揃う茂みの方へと入っていく。しばらくして戻ってきた猫の後ろには小さな猫が二匹連れられていた。

一匹は剣正をここまで案内してきた猫と同じ毛色の子猫で、もう一匹は白と茶色が入り混ざった毛並みだった。二匹の子猫は前を行く猫に寄り添うように歩いており、少年の目には、その姿が親子に映った。

「おお、言いかけたお前に家族が出来たのか！ そうかそうか！」

猫に家族が出来たことを自分の事に喜び笑顔になる少年。

その場に座り込み胡座を掻くとトントンと足を叩き猫たちを呼ぶ。初めは寄ってこなかった子猫たちも親猫が少年の足の上に飛び乗るのを見ると、恐る恐るといった様子で歩み出した。

「怖がらなくてもいいぞー。俺はお前らの味方だ」

そう言いながら優しい笑みを浮かべ手を差し伸べてくる少年の姿に、恐怖を感じなくなったのか子猫たちも足の上へと飛び乗った。

猫たちを撫でていた少年はいつの間にか寝てしまっていたらしく、猫に顔を舐められてようやく目を覚ました。

「んあ？ …… あっ！ やっべ、完全に遅刻だぜ」

眠気眼で見た腕時計の針は少年の用があつた時間を三十分ほど過ぎており、今なお時間は進んでいる。

少年は急いで立ち上がると親猫に話しかけた。

「起こしてくれてありがとな。あと、これからはお前がそいつらを守るんだぞ？ じゃあな、お前も元気でな」

少年の言葉に答えるように三匹の猫は「にゃー」と鳴き、それを聞いた少年は全速力で、この場から走り去って行った

## 第1話：偽りの平和（後書き）

記念すべき第一話どうだったでしょうか？  
不安いっぱい作者のシノブです。

二つのミスと言うのかなんと言いますが  
書いていたら主人公の名前を言うタイミングを失った！？という事  
件発生……

次回の二話で名前は明かされるはず！  
あと1つは『少年』という名詞？単語？を使いすぎた。ツッコまれ  
る前に自分で言うっておこうかなと……w

あとがきではその時のノリでやっていこうと思いますので、見てや  
ろうと思う方はどうぞ！そんなの興味ねーよと思う方は次の話数へ  
どうぞ！

ご感想、ご意見、ご指摘など随時お待ちしております。  
誤字脱字があれば報告お願いします。



## 第2話：変わらないために

川神学園に通う生徒の多くが通る多馬川に掛かる多馬大橋。年端もいかない少女に興奮する者や、突如謎の歌？を口ずさみながら車道へ飛び出す者、人力車に乗る金色に光る服を纏った者などの奇抜な人々が通行することから別名『変態の橋』とも呼ばれている。

そんな多馬大橋の中間に位置する所に少年は鞆を地面に置き立ち止まっていた。

「今日もやってるねえ」

そう呟く少年の視線の先には、ガラの悪い男たち十数人が“たった一人の少女”を取り囲んでいる光景があった。それを見ているのは少年以外にも数多くいたが少年同様、誰一人として焦っている者や心配している者はいない。まるで見世物を今か今かと楽しみにする観客のようだった。

「ホントにご苦労さん」

少年が見つめる先にいる男たちに囲まれている少女は、ここ1ヶ月ほど追いかけて回し自分を悩ませる張本人である川神百代だった。視線は百代に向けられているが、先ほど零した言葉は百代を取り囲む男たちへと掛けられていた。もちろん距離が離れているため相手には聞こえていない。

時間が経過するにつれ結構な数の見物人が集まり出す。ほとんどの人間が川神学園指定の制服を着ており登校途中だったことがわかる。

少年を含めた見物客たちからの多くの視線が送られるなか、百代が男たちに話しかた。なにやら一人の男が持つ携帯ストラップに興味を示したようだった。

大勢の男に囲まれている状況の中、落ち着いた様子の百代。そんな百代の余裕の感じられるナメた態度が癪かんに触れたらしく男たちのイライラが募り出す。男たちの様子を気にするでもなく百代は話し続けた。そんな百代に対し、ついに男たちの中の一人が怒りのピークに達しブチ切れていまう。怒声を上げ、腕を振りかぶりながら百代へと接近していく。

結果から言えば、男の行動は無意味に終わった。なぜなら男の腕がありえない方向へと向いていたからだ。辺り一帯に響き渡る男の悲鳴。

百代に腕の関節をねじ曲げられた痛みにも声を上げながら地面を転げ回る男の姿を見て、周囲にいた仲間たちが怒りの表情を浮かべ次々へと襲いかかる。

百代は1人、対して男たちは十数人。

世の中には『数の暴力には勝てない』という言葉がある。だが、百代には当てはまらない。

たとえ数が多くとも男たちは所詮素人。そんな素人軍団に、武道四天王である川神百代が負けるはずがない。百代からすれば数だけの男たちなど、赤子の手を捻るように容易いことだった。

一瞬で男たちは吹っ飛ばされ、瞬間に積み上げられていく。重ねられた男たちの上に仁王立ちしている百代。

そんな姿を見て、周囲の観客から歓声が巻き起こる。男女問わずキヤーキヤーと騒いでいた。若干、女性の声の方が多く同姓からも人気があることがわかる。

まだこれで終わってはいなかった。すでに醜態を晒している男たちに待ち受けるのは、さらなる地獄。

百代は倒れている男を一人、また一人と持ち上げ関節を外していったのだ。一分もしないうちに再度積み上げられる男たち。先ほど興味を示した、携帯ストラップのテトリスに見立てているらしい。今、最後の一人が積みまれ終わった。

異様な光景。

人間で出来た塔が完成する。

残念ながらこれで終わりではなかった。本来テトリスというものは様々な形のブロックを綺麗に並べ消していくゲーム。百代はテトリスに見立て男たちを積み上げた。そのため並べ積み上げられた男たちは消えないといけない。そうでなければゲームとして成立しないのだ。

だが、人間がひとりでに消えるわけもなく、百代が破壊力抜群の  
回し蹴りで吹っ飛ばす。

「」愁傷さまあー。さあて「

紙くずのように一斉に吹き飛ばされ宙を舞う哀れな男たちに向け  
言葉を送る少年。地面に置いてあった鞆に手を伸ばし学園へと向か  
おとしたその時、一連の出来事を見ていた百代ファンの女子生徒  
がぶつかってきた。

「うおっ!？」

衝撃で少しぐらついた少年に目を向けることなく、女子生徒は百  
代へと声援を送り続けている。文句の一つでも言ってやろうと思っ  
た少年だったが、ふと視界の端にあるものが入ってきた。百代に吹  
き飛ばされた男が空中で仲間同士ぶつかり合い、女子生徒のいる場  
所へと飛んできたのだ。

少年に次いで女子生徒も気付くが時既に遅し。これから来るであ  
ろう衝撃への恐怖に体が強張り目を瞑ることしかできなかつた。

「……………あれ?」

いつまでたっても衝撃を感じないことをおかしく思い恐る恐る目

を見開く女子生徒。目に映ったのは少年の背中だった。

「ふう。大丈夫か？」

「え、ええ……ありがとう……」

誰よりも早く男が飛来してくるのに気付いた少年は、男が降って来るであろう場所と女子生徒の間に立ち塞がっていたのだ。少年の足元には気を失っている男が一人転がっていた。

「どういたしました。怪我はないか？」

「大丈夫だけど」

「よかった。う……じゃ、じゃあ俺は先に行くわ」

無事を確認したのもつかの間、少年は取り乱した様子で、この場から立ち去ろうとする。明らかに何かに怯えている少年。

「どうしたの？」

「怖い人が見てる。だから逃げる」

少年の言う【怖い人】というのは百代のこと、生徒を助けた

めに動いた少年の姿を百代は一部始終すっかりと見ていたのだった。自分が見られていることに気付いた少年は、望まない事態に陥る前にエスケープしたいのだ。

(やはりアイツは……これで、また1つ楽しみが増えた)

百代はファンに囲まれながら、逃げるように走り去っていく少年の背を見えなくなるまで見つめていた。

川神学園の生徒の中から問題児ばかりが集められるクラスF組。その教室内に少年の姿はあった。一年生の頃は違う組に在籍していた少年だったが、進級すると同時にF組入りを果たしていた。

教室に着くなり自分の席に突っ伏する少年。

(あー……何も起きませんように何も起きませんように何も起きま

せんように何も起きませんように)

呪文のように何度も繰り返し心の中で唱える小さな願い。

「おはよう浅井くん」

「何も起きませんように……ああ、おはよう師岡」

そんな少年に話しかけてきた人物の名前は師岡卓也。一年を終えてすぐにある春休みの間に行われるオリエンテーション箱根旅行で話すよになったクラスメイトの一人だった。仲の良い友人たちからは『モロ』の愛称で呼ばれるオタク系の男子生徒。

「どづかしたの？」

「俺が川神先輩に目を付けられているのは知ってるだろ？」

「うん、まあね。いつも放課後追い掛け回されてるって聞いたことがあるよ」

「それだけだ……」

「って、しっかり説明してよ！」

話し半ばで止められた卓也はもう一度聞こうとしたが、すでに昼

寝の相棒である机と顔を擦り合わせるようにして倒れている浅井の様子を見ると諦めることにした。

浅井は静かに眠っていたが、今日は休み明けということもあり、ワイワイと話す生徒が多く教室内は活気に溢れていた。

「皆さん先生が！」

が、F組の委員長を務めている甘粕真予の一声で私語はピタッと止み静かになる。静まり返るのとほぼ同時に教室の前のドアが音を立てて開かれた。

「朝のHRを始める」

入ってきたのは、黒を基調としたスーツに身を包んだ女性の教師。何故か手には教師に似つかわしくない鞭が携帯されている。

「起立！ れ」

「待て甘粕」

委員長である甘粕の号令を止めた教師は、手に持っている鞭を一人の生徒へ向け容赦なく振るった。直後、乾いた音が静かな教室内に響き渡り、それと同時に悲鳴が上がる。



「ぎゃー……！！！！！！！！！！」

突如襲った痛みにはビククリした生徒は勢いよく立ちあがった。だがそれは結果として机に脛すねをぶつけさらなる痛みを生んだのだった。二つの痛みに耐えかねた生徒は床を転げ回っていた。

自業自得とは間抜けな姿で地をのたうち回る姿は可哀そうな人に見える。

「立たんか浅井！」

鞭で叩かれた生徒は浅井だった。担任の女性は一切容赦をせず、鞭を器用に扱い未だに転がっている浅井の動きを封じ立たせようとしている。

「痛たいつて梅先生。わかった！今立つからキツく縛るの止めてくれ」

「ならば早く立たんか」

「わかってますよお……」

浅井が立つのを確認した後、教室を見渡した。少々だらけ気味だった生徒たちの背筋はピシッと正される。

「では甘粕、号令を」

「起立！ 礼！」

「おはよう！ 着席して良し。出欠を確認する。浅井剣正あざいけんせい」

「はい」

「ム、朝から気の抜けた声を出すな」

「勘弁してくれ……」

その後は何事もなく出席を取られ、最後に担任である小島梅が伝達事項を告げると教室から出て行った。

……ふーっ

誰となく教室内全体が溜息をついたかのように緊張が緩んだ。

「大丈夫か浅井？ 結構強めに叩かれてたけど」

「あ、ああ大丈夫だ直江。というか福本デメエ！ 俺が梅先生にやられている間に、こっそりと教室入ったろ？」

剣正の言葉にビクツと体を揺らすカメラを手に持っている生徒。

「助かったぜ。お礼にコレをやる」

「ん？ なんだ……」

手にあるもの確認した剣正は顔を歪ませた。福本と呼ばれた生徒が手渡したのは写真だった。それも体育の授業中に被写体に許可なく撮ったであろう盗撮写真。

「この前の授業で撮った」

「おーい小笠原コレやるよ」

「お、おい！」

福本の制止も聞かず女子生徒を呼ぶ剣正。何も知らない女子生徒はいい物を貰えると思いウキウキした様子で近づいてくる。

「ちょっと！ 何よこれー」

「福本が撮った。ネガもあいつが持ってる」

「おいエロザル！」

写真を勝手に撮られたことへの怒りを露わにする女子生徒は盗撮した張本人である福本を問い詰め出していた。

「平和だねえ」

ドタバタと騒ぐ二人をよそにもう一度眠ろうとする剣正がいた。

## 第2話：変わらないために（後書き）

お待たせしましたあゝ

この回は原作沿いで書いたのであまり面白くなかったと思いますが  
ご勘弁を…orz

前回書けなかった名前と所属クラスを出したかったのです。

次回からはオリジナルの話の戻りますのでどうかお楽しみに！

没にした名前 絆きずな

特に理由はなかったけどなんとなく剣正を選んだ。

ご感想、ご意見、ご指摘など随時お待ちしております。

誤字脱字があれば報告お願いします。

### 第3話：暴かれたす真実

川神百代は悩みを信頼の置ける人物に相談していた。相談内容というのは百代が、なかなか戦うことのできない少年 浅井剣正 について。

剣正に興味を持ち出してから数ヶ月、二日に一度と言っても大袈裟ではない頻度で勝負を持ちかけていたのだが、ただの一度も良い返事を貰ったことがない。

「なあ大和、どうすればいいと思う？」

「キャップにしてもそうだけど、姉さんもしっかりと説明してほしい」

大和と呼ばれた人物は、体に纏わりつくようなスキンシップを行ってくる百代に、あくまで冷静な態度で聞き返した。性格は多少荒々しいが本来美少女である百代のスキンシップに対し、テンパったりしないのは、こうしたこと少年が慣れているのだろう。

「あー、名前なんだっけ……ほら、お前のクラスに居るだろう？」

顔は分かるが相手の名前が出てこない百代は頭を抱える。その状態のまま一分が過ぎようとした時、少しだけ思い出したのか声を漏らした。

「あ、あさ……浅井ナントカ」

「浅井剣正？」

「そう！ そいつだ！」

「で、彼がどうかしたの？」

「お前、アイツと同じクラスだろ？」

「そうだけど」

百代が大和に相談を持ちかけた理由はここだった。戦いたい相手である剣正と同じクラスに居て、尚且つ人当たりが良く顔の広い大和なら、どうにかしてくれるだろうというもの。それでなくとも大和は百代を含めた7人で構成された仲良し集団である【風間ファミリー】の軍師として、培った知識や柔軟な思考を上手く使い様々な案を出す。こういった相談事は毎回、大和が担当しているのだ。今、百代と大和が居る場所も風間ファミリーの秘密基地で放課後や休日よくここで集まっている。

「私がアイツを追い掛け回しているのは知ってるだろ？」

「最近、特にね」

「強いはずなんだが何故か戦ってくれないんだ。どうしてかわかるか？」

強者は戦いを求める。

自分がそうであるように、実力のあるものは戦いを求めるのは当たり前だと思っっている百代。

「うーん……………」

理由を聞かれ考え出す大和。答えなどわかるはずもないが、真剣に悩んでいる百代の力になるうとしているのだろう。大和は情報元に作戦を立て狡猾に動くタイプの人間なのだが、剣正とは二年に進級してから初めて交流を持ったこともあり、あまり知らなかった。

「ちょっと待ってて」

2分ほど思慮の海に潜っていた大和だったが、何かを閃いたらしく、上着のポケットの中に入ってある携帯電話を取り出すとポチポチと触りだした。どうやら誰か宛にメールを打っているらしい。

「これでよし」

「よくわからんが、でかしたぞ弟！」

メールを送るといふ作業を終えた大和の頭を百代がわしゃわしゃと撫で回す。ここで百代の言った『弟』というのは世間一般でいう



『弟』ではない。これは、まだ2人が小学生だった頃に大和が百代の舎弟になるという約束をしたことがあり、それ以降、大和は百代の事を『姉さん』と、百代は大和の事を『弟』と呼ぶようになっていた。

ただ、こうしてスキンシップを取り仲良くしている2人の姿を見ると、本当の姉弟のように見える。

ピリリリリ！

しばらく百代と大和がジャレていると、先ほど送ったメールの返信が届いたのを知らせる音が鳴る。

「ほんとにお前は友達が多いな」

「友達じゃなくて、知人だよ。それと少しだけ分かったよ」

「ほんとか！？ 早く聞かせろ」

ジャレていた時の雰囲気は消え去っていた。真剣な表情で急かすように話に喰い付いてくる百代。大和は送られてきたメールの文面を見ながら、整理し話す。

「このメール相手も直接は知らないらしいけど、噂では去年に川神学園で起きたことが原因っぽいよ。あと猫を可愛がっているって」

「猫はいいが、去年起きたことってなんだ？」

「あー、そうか。姉さんはその時、修学旅行でいなかったから知らないんだね」

「ム、なんだか私の知らない間に何かあったのか」

「簡単に説明すると、生徒が三人学園を辞めたんだ」

「生徒が辞めるのなんてどこにでもある話だろ。それにアイツとどう関係がある？」

「ここからが大事で、その三人は大怪我をしていたらしい」

「ほう……それをアイツがやったと？」

僅かだが百代の目が怪しく光る。そんな百代の様子に気付かない大和は携帯に映し出されている文面を見ながら続けて話した。

「証拠はないけど、目撃した人が居たらしい。怪我をした連中と只ならぬ雰囲気の中、歩いている浅井の姿を」

「確かな情報なのか？」

「これだけじゃわからないから、明日にでも聞いて回ってみるよ。それに」

大和が全てを言いきる前に、パンツと音を立て扉が開いた。開けられた扉から入ってきたのは川神学園の制服を着て、頭にバンダナを巻いた少年、風間翔一だった。大和や百代の属する風間ファミリーのリーダーでキャップの愛称で呼ばれている。

「おい二人とも行くぞ！」

「姉さんにも言ったけど、しっかりと説明してほしい」

「バスケのゴールがあるところ見つけた。やりたくなった。それだけだ！」

「キャップらしいね。他の皆は？」

「先に行ってるって。さあ行くぞ風の如く！」

そう言い放った翔一は、凄まじい速度で今いる場所から遠ざかって行った。

「俺たちも行くのか姉さん」

「……………」

「姉さん？」

「あ、ああ行こうか」

何かを考えていた百代は大和の二度目の呼びかけでようやく気付くと、立ち上がり大和を連れて屋上からファミリーの待つ場所へと文字通り跳んで行った。

### 第3話：暴かれたす真実（後書き）

短い！そして主人公不在！

書いていたらここが一番キリの良いところだったので終わらせてしまいました。次回は同時刻の剣正のお話ですのでお楽しみに！……  
していただけると嬉しい作者ですw

毎度のことですが、感想・ご意見・ご指摘など随時お待ちしております。

誤字脱字があれば報告お願いします。

#### 第4話：優しさと怒りの一面

放課後になり浅井剣正は家が並ぶ住宅街の一軒で草耚りに勤しんでいた。今は終わりに差しかかっているようで、庭の端には抜かれた草が摘まれ結構な大きさの山が出来上がっている。

「これで……終わりっつと」

「御苦労さま。いつもすまないねえ」

作業を終えた剣正のもとに、家の主である老人がやってきた。手にはおぼんを持っており、おぼんの上にはお茶の入ったコップと御茶請けとして川神名物の久寿餅が乗せられていた。

「ありがとばあちゃん。これだけでお金貰うの悪いし、他に何かしてほしいことあるか？」

剣正は川神学園の教師である宇佐美巨人（ひつじ）が経営している代行業にバイトとして雇われていて、今回のような草耚りなど比較的安全なものを担当している。

「そういえば孫がコンピュータの調子が悪いって言ってたねえ。頼めるかい？」

「パソコンかぁ……俺にはちょっとわからないから、今度詳しいヤツ連れてくるわ」

「いいのかい？」

「孫の為だろ？ それくらいならお安い御用だよ」

出されたお茶と久寿餅を全て平らげるころには日が落ちており春とはいえ肌寒い気温になっていた。

「ご馳走さん。じゃあ俺は帰るわ。あと明日にでもさっき言ってたヤツ連れてくるけど、大丈夫か？」

「大丈夫だよ。本当にありがとうねえ」

「いってことね」

会話を終えた剣正は宇佐美のところへと報告をするために家を出て行った。

翌日の放課後、住宅街にて剣正ともう一人の少年が歩いていた。

「今日はありがとな師岡。報酬は俺が出すから、給料日まで待つてくれ」

「報酬なんていいよ。おばあちゃんとお孫さんの笑顔見れたしね」

パソコンなどの電子機器に疎い剣正は川神学園のクラスメイトである師岡卓也に依頼をしていた。師岡は超がつくほどのパソコンオタクで、剣正が話しを持ちかけると心良く了承してくれたのだった。

「それじゃ俺の気が収まねえから、今度何か奢らしてくれ」

「そうだねー、じゃあ個数限定の学食をお願いしようかな。アレっで競争率高くて、今まで食べたことなくて」

「任せとけ！ 必ず食わしてやるよ」



「楽しみにしてるよ」

こうして話している二人のもとへと先日、剣正が可愛がっていた猫の子供である子猫が現われた。

「おっ、どうしたんだ？今日はお前だけか？」

「この子は？」

「ちよつとした知り合いだよ。……いてっ」

子猫は抱えられていた手を噛むと、腕の中から抜け出し剣正の方を何かを訴えるように一度見ると走りだして行った。

「なんだ？ とりあえず行ってみよう」

「ちよつと浅井くん!？」

子猫を追うように剣正駆け出した。それを少々遅れ師岡も追った。

剣正が付いた場所は多馬川の河川敷だった。何故かその場所には剣正が会いたくない人物ともう一人いたが、気にせず子猫のもとへと急いだ。

「おいおい。なんでこんなところ………！？」

剣正の言葉は続かなかった。話しながら子猫のもとへと近づいた剣正が目にしたのは、ここまで追いかけてきた子猫の母。つまり剣正が可愛がっていた猫だった。だが先日までの元気な姿ではなく、全身ボロボロで所々から血も出ている。

「大丈夫か？」

剣正に抱きかかえられた猫は辛うじて生きている状態で呼吸も怪しい。そこに遅れて師岡がやってきた。

「浅井くん……ってこれは？」

「俺もわかんねえよ。師岡コイツを連れてゲンちゃんのとこ行ってくれ。今日は仕事ないって言ってたはずだから島津寮にいるはずだから」

「わかった」

剣正から猫を任された師岡は、あまりない体力を振り絞って島津寮へと走って行った。

「頼むぞ師岡……助けてやってくれ」

師岡の背を見ながらそう呟くと剣正は振り返り、その場に居合わせた人物へと話しかけた。

「アレやったの先輩たちか？」

その人物とは綺麗な黒髪をした少女・川神百代とクラスメイトである直江大和だった。

「答えるよ先輩」

「ちがーあー、やったのは私だ」姉さん!？」

大和の言葉を遮って百代は自分が猫を傷つけたのだと証言した。

「何でやった？」

「お前が中々戦ってくれないからなあ」

「そんな理由で……ごめんな俺のせいで……ごめんな痛かっただろ」

猫が倒れていた場所を見ながら小さく呟いた。

「大和下がつてる。離れとかないと怪我するぞ」

「姉さん!？」

剣正が俯いている間に、離れた場所へと大和を投げた百代。

「アイツらは家族なんだ……それをお前は傷つけた……許せるわけ、ねえよなアアアア!!」

顔を上げた剣正は目の前に立っている百代へと、怒りの形相を浮かべながら突っ込む……。



#### 第4話：優しさと怒りの一面（後書き）

お待たせしました……活動報告にも書かせてもらいましたが、HD  
Dが天に召され書いていたモノ全部が消滅しました。まー、書きな  
直せば済むんですが、やる気が……orz

と、まあ身の上話しはこの辺りで終わりにして、今回の話しはどう  
だったでしょうか？

不安な気持ちでいっぱいです。猫傷つけちゃってすみません……

ご感想・ご意見・ご指摘など随時お待ちしております。  
誤字脱字があれば報告していただけると嬉しいです。

## 第5話：虚言

片足に力を含め大地を強く蹴り飛び出した浅井剣正は勢いそのままに川神百代へと突っ込んだ。だが百代はまるで予見していたかのように身を翻して剣正のソレを避けた。当てるべき標的を失った剣正は、土埃を上げながら地面を滑るようにして停止する。

今の攻防を見て直江大和は驚いていた。彼の知っている“浅井剣正”と言う男は学園内・寮内問わず比較的穏やかに過ごしていて、たまにふざけたりはしているものの、目の前で自分が姉さんと慕う百代と戦っている“浅井剣正”とはかけ離れたイメージだったからだ。

驚きのあまり声も出さずその場に立ち尽くす大和に目もくれず、未だ興奮状態のままの剣正は百代をキッと睨むと再び飛びかかって行く。

「うおおおおおおお！！！！！！」

雄叫びを上げながら百代へと接近した剣正は大きく左腕を引き狙いを定め真っすぐに撃ち出した。

「そんな……ものかつ！！」

先程の初撃は難なく避けた百代だったが、今回はあえて回避せずしつかりと地に足を付け向かってくる剣正の拳を真正面から受け止めた。

ここ数カ月の間、幾度も対戦を申し込んだ相手と戦っている百代は満足していると思われたが、そうではなかった。

（私が怒らせたとはいえ……つまらん）

攻撃を簡単に受け止められた剣正は後方へと下がろうとしたが、そこを百代は許さず素早く剣正の腕を取ると鋭角に投げた。いや、投げたというより“落とす”という言葉の方が似合う程の速度と角度で地面へと叩きつけた。

「がはッ　　！！」

硬い地面と衝突した衝撃は計り知れず肺から空気が一気に抜け、そのままぐったりと倒れ伏せる剣正。

終わった。

普段から一緒に居ることの多い百代とジャレている時にかなり手



加減をして投げられたことのある経験のある大和には、今倒れている剣正が立てるはずがない。と、少なくとも大和はそう思った。

それは投げた張本人である百代も例外ではなく、大和を遠ざける時に一緒に放った鞆に入っておりある携帯電話を取りに向かおうとしていた。

「まだだ……」

「ッ!？」

百代が振り返った先には、全身に走る痛みと痺れに襲われながらも歯を食いしばり立っている剣正の姿があった。投げられ地面と衝突した際に口内を切ったのか、口元には血が垂れていた。

「アイツの為にも、倒れるわけにはいかねんだよ！」

ただ自分が仲良くしていたという理由だけで傷つけられた猫の敵討ちもあったが、半分は自分に対する後悔と怒りもあった。

(こんなことになるなら戦いたくない理由を相手が納得してくれ  
まで説明しとけばよかった。相手が満足するまで戦えばよかった…  
…)

様々な思いが剣正の中を駆け巡っていた。

「……でもお前だけは許さねえ。川神百代!!」

大切なものを傷つけられた怒りはボロボロな剣正をムリヤリ動かす。未だ痛む身体を引きずるようにして一歩、また一歩と百代へと近づいて行く。

ここでいち早く我に返った大和が剣正に向かって走り出し、百代との間に割って入った。

「なんだ直江……そこにいるとお前も巻き込むぜ」

突然乱入してきた大和を鬱陶しそうに睨む剣正。その視線を真っ向から受け止める大和は背後にいる百代へと話しかける。

「もういいだろ姉さん」

大和の言葉のあと、一拍置いて百代から短く「ああ」とだけ返ってきた。

何を話しているかわからない剣正は声を荒げ大和に掴みかかった。

「邪魔だ。どけッ！」

「浅井落ちつけ。さっきの猫は姉さんがやったものじゃないんだ」

剣正は驚きを隠せなかった。大和へと伸びていた腕はダランろ下がり顔には困惑がまわりついている。

「……ど、どついうことだ？」

「あの猫は俺たちがココに来た時には、もう怪我をしていた。それで治療する為に近づいたところに浅井が来たんだよ」

戦っていた相手が無実だったことを告げられた剣正は一瞬戸惑ったが、本人に確かめずにはいられなかった。

「ほんとか先輩？」

「あ、ああ」

「なんで嘘を吐いた？」

「最初に言っただろ。戦いたかったって」

「ふざけんなッッ!!」

剣正、百代、大和の周囲の空気が震える。それほどまでに大きく響く声だった。先程とは別の怒りが剣正の中に生れていたのだ。

「とりあえずぶっ……飛ばす」

だが、剣正はこの台詞を言いきると同時に意識を失い再び地面へと倒れ込んだ。百代に投げられた時のダメージが思った以上にあつたようだ。怒りに染まっていた顔は消え、今はどこか悲しそうな顔がそこにはあった。

「姉さん、どうするの?」

「川神院で手当です。お前は麗子さんにそう伝えてくれ」

百代と戦闘を行い負傷した者たちは川神院が責任を持って治療するということになっている。例外はあるがこの場合はそれに当たらない。

「わかった。それじゃあ俺は先に帰るね」

「頼んだ。あッ、あとお前に1つ頼みたいことが」

翌日、通学路にて眠たそうにする百代と大和の姿があった。互いに目の下に隈ができていて寝不足ということがわかる。

「どうだった大和？」

「わかったよ。少し苦労したけど目撃者の証言も録れた」

「流石だ大和。よくやった。ご褒美に美少女を負ぶって登校する権利を与えよう」

「遠慮しておくよ。というより浅井は？ 川神院で預かるって言うだけ」

未だボーっとする頭を左右に振り周囲を確認する大和だったが剣正の姿は見つからず、百代に尋ねたのだった。

「もしかしてまだ寝たきりだったり……」

「いや、アイツは夜起きてどこか行ってしまった。気を探ったが見つからん」

百代は個人を気で感じ取ることができるのだが、剣正を見つけることはできなかった。昨日の戦闘中は興奮状態であったとはいえ、感じ取るには十分すぎる程の気量と気質だったのだが、いざ戦闘が終わると一気に小さくなってしまい川神市に居るということ以外はわからなかった。

「自分で外に出るほど元気なら安心した」

「心配してたのか？」

面白いものを見たというような顔をしながら百代は大和に視線を向ける。

「今回は姉さんが全部悪いしね。傍にいた俺も責任を感じてるんだよ」

「……」

大和の言葉にバツの悪そうな顔をした百代は前を向くと全速力で川神学園へと駆けて行った。

「じゃあ頼んでたやつ伝えといてくれよ」

「逃げたな」

2 - Fの教室内に剣正はいた。中途半端に伸びた黒髪は無造作に跳ねていて、身に着けている制服はシワだらけで所々土などで汚れていた。いつも以上にだらしない姿の剣正が机に頭を乗せ突っ伏していたのだった。

教室に入ってくる者たちは一度剣正へと視線を向けるが、話しかけずソツとしておくという選択をしていた。

だが、大和は剣正を発見するなり近寄り話しかけた。

「おはよう浅井」

「ン、おはよー」

「なんか疲れているみたいだけど」

「そんな、ことねー……よ」

一度上げた顔だったが机に吸い込まれるようにして前のめりに倒れて行く。それも大和の次の言葉で剣正の意識は完全に覚醒することになる。

「先に結果から言う。昨日の犯人がわかった。……!？」

「「「「!？」」「」」」

一瞬、教室内が異様な空気に包まれた。

「直江。その話、詳しく教えろ」

「わかった」

大和は昨日、百代と別れたあと自身の交友の広さを生かし『剣正が可愛がっていた猫に怪我をさせた』犯人を探してしたのだった。時間をかけ何人にも電話を掛け、メールを打ってわかったことは次の通り



川神学園の生徒が帰宅していたところ目の前を子猫が通った。だが、通った際水溜りに入った子猫の衝撃で水が跳ね、その生徒のズボンに掛かったのだった。

「確認……その生徒ってのがS組のヤツなんだな？」

「間違いない」

「わかった。礼は言わねえぜ直江」

「いいさ。お詫びのつもりだしね」

「そうか」

話しを終わった剣正は、グツと力を入れ立ち上がり教室のドアへと歩いて行く。

「浅井ちゃん。もうすぐ先生来ます、ヒッ！」

剣正に注意をしようとしたF組委員長の甘粕真与だったが、剣正の顔を見て驚きその場へタリ込んだ。

「悪いな委員長……先生来たら適当に言っといてくれ」

## 第5話：虚言（後書き）

初の戦闘（笑）にお付き合い頂きありがとうございましたー！w  
んー……難しい！自分の言葉のレパートリーの少なさに絶望を隠し  
きれません orz

次回も戦闘（笑）があるので、ほんの少しでも期待を寄せて貰える  
と嬉しかったりしますw

よければ評価を付けていってくださいね！  
少しでも気に入ってくださった時は迷わずお気に入り登録を！……  
してくださいさると喜ぶ作者ですw

それではいつものことですが、  
ご感想・ご意見・ご指摘など随時お待ちしております。  
誤字脱字があれば報告していただけると嬉しいですよ。

## 第6話：嵐の前に

朝のHRが始まる直前に突如現れた生徒によってSクラスの教室ホームルーム内は異様な空気に包まれていた。Sクラスの生徒達の視線は前のドア付近に立っている生徒に向けられていて、好意的な印象を持っている者は少なかった。

自分のクラスを飛び出した剣正は乗り込んだ教室の中を端から端へとグルリと見渡す。と、そこにSクラス担任である宇佐美巨人がやってきたのだが、入口のど真ん中に居座るように立っている剣正の後ろ姿を見ると話しかけた。

「おい、そこに立っていると入れんだろ。教室に入れ」

だが宇佐美は剣正だと気付いていないらしく、自分の受け持つ生徒だと思い教室の中に押し込む。前方にしか気の行っていなかった剣正は押された勢いで二・三步前進すると後ろを振り返った。

「ん？ 浅井だったか。早く教室に戻れ」

ここでようやく気付いた宇佐美は剣正を自身の教室に戻るよう促したのだが、剣正はそれに応じようとはせず無言で再び教室内を見渡し始めた。

少なからず剣正のことを知っている宇佐美は剣正の行動を不思議

に思いながらも、面倒なことになる前に戻らせるため注意をしようとしたが、それよりも早く言葉を発した人物がいた。

「何用か、庶民。言っておくがここは貴様の教室ではないぞ」

声の主は川神学園指定の制服ではなく特注だと思われる金のスーツを身に纏っている九鬼英雄だった。九鬼財閥の御曹司ということもあるが、良くも悪くも目立つことから川神学園で英雄を知らない者はいない。

その英雄に傍に居る、これまた指定の制服ではなくメイド服に身を包んだ女子生徒である忍足あずみが続いて話す。

「英雄様のご質問に答えないとお仕置きですよ」

英雄に仕えるあずみは『メイドモード』なるものと『通常モード』を使い分けるが、今回は傍に英雄が居るためメイドモードで話しかけてはいたが、剣正を見るその目は言葉とは裏腹に鋭かった。

「お前には用はない」

あずみの視線を受けているのを気にすることなく剣正は言い放つ。直後、教室内の雰囲気 pins と張りつめたものになる。

「デメエ……」

ジャキ。と音を立てどこから取り出したのか2本の小太刀を構えているあずみが居た。小太刀の切っ先は剣正へと向けられていて、いつでも飛び出せるような体制になっている。

「やんのかメイド。俺は今、機嫌が悪いんだ」

あずみの殺気を真正面から受けているなか怯むことなく剣正は睨むと、スツと腕を上げ構えた。

「はいストップ」

一色即発の状況を打開したのは、剣正の後ろに立っていた宇佐美だった。今にも飛び出しそうな二人の間に割って入った宇佐美は両手を広げ待ったをかける。

「どきなヒゲ」

「邪魔すんなよ宇佐美さん」

だが、剣正とあずみは口を揃えて宇佐美に対し言葉を発した。そ

の間も両者の視線は相手へと向けられていて、一步も引かない様子だった。

「オジサンを困らせないでくれよ。これでも教師だから一応は務めを果たさなきゃいかんの」

溜息を吐きながら片手で頭を抱えるようにする宇佐美。そもそも面倒なことが嫌いな宇佐美はどうにかしよつと思いを巡らせる。

「やっぱりこうなってたか」

そこに響いたのは剣正でもあずみでも宇佐美でもない者の声だった。

「落ちつけ浅井。今、やってもお前の立場が悪くなるだけだ」

「ゲンちゃん」

剣正へと話しかけたのは源忠勝。Sクラスで起きているこの騒動の発端である剣正のクラスメイトでもあり、数少ない友達と呼べるうちの一人だ。

剣正が乗り込んだ事情を大和から聞き知っている忠勝は、宇佐美に近づき説明をする。

「そういうことだったか……浅井、この場はオジサンが預かせてもらう。いいな？」

面倒事などあまり関与したくない宇佐美ではあったが、自分の代  
行会社で働く剣正の力になってやろうと無償であるとある提案を持ちか  
けた。

「決闘だ？」

そう決闘だった。川神学園には決闘システムという他の学校には  
ない変わったものがあり、宇佐美はそれを使って戦えと言ったのだ  
った。そうすれば普通は暴力事件沙汰になるものでも、この川神学  
園内においては合法的にできるのだ。

「これなら何の問題もなく暴れられるだろ？」

「……仕方ない」

宇佐美の気持ちを汲み取ったのか渋々といった様子ではあったが  
提案に乗る剣正。それを受け宇佐美はあずみの方を向き話しかけた。

「理解がよくて助かる。忍足、そういうことだ。悪いが今回は引い

てくれ」

「あ？」

「よい、あずみ。ここは引け」

「ですが」

「私の言葉が聞こえなかったか？ ここは引けと言っている」

「！？ 申し訳ございません英雄様！」

先程の忠勝による事情の説明を聞いていた英雄は剣正の態度を許すことにしたらしく、あずみへと命令という形でこの場を引かせる。

「主に対する忠義、それでこそ私の従者よ。誇ってよい」

「ありがたき御言葉」

「して庶民よ。その猫とやらは今はどうしておる？」

「島津寮で寮母さんに診てもらってるよ」

「そうか。あずみ分かっているな」

「はっ！ ただちに高名な獣医を用意いたします」



突然の出来事に剣正は驚きの表情を浮かべてしまう。何の気まぐれなのか英雄は怪我をした猫を九鬼の力を使い獣医を呼び出したのだ。

「九鬼……お前」

「猫の為とはいえ、これほどまでに真剣になる姿を見ては……ほんの気まぐれよ」

そう言うと英雄はどこか遠くを見るような瞳になった。英雄自身過去に大きな事故に遭い利き腕に怪我を負ってしまい、続けていた野球を断念した経験があった。

「そうかい。今度猫を連れて礼を言いに来させてもらう」

「うむ」

剣正は純粹に英雄に感謝をし、それに対し英雄は短くはあったが返事をした。そこには先程までの遠くを見つめる目ではなく、しっかりと剣正を見る英雄が居た。

「お二人さん青春している時に悪いが、授業が始まる。廊下で綾小路先生がご立腹だ。忠勝、浅井を連れて早く教室に戻れ」

宇佐美は面倒くさそうな表情をしながら廊下を見ると剣正たちに話しかけた。それを聞いた忠勝は剣正を連れてSクラスから出て行く。

その日の昼休み、単身乗り込んだ剣正とそれに巻き込まれた形で忠勝が綾小路麻呂にネチネチと説教をされる姿が職員室で目撃された。

## 第6話・嵐の前に（後書き）

書いているうちにグダグダに……次回は思い通りの話を書きたい！

ご感想・ご意見・ご指摘など随時お待ちしております。

誤字脱字があれば報告していただけると嬉しいです。

## 第7話：剣正と猫、そして決闘

放課後になり川神学園のグラウンドには、今日一日、学生としての勤めを果たした生徒たちでこった返していた。数多くの生徒の中には野球のユニフォームや袴などの制服以外の物を着用している生徒も少なからず見ることができる。

「それではこれより川神学園の伝統、決闘の義を執り行う。審判はワシ、川神鉄心が責任を持って勤める。両者前へ出て名乗りを上げい」

生徒たちが集まっている理由はコレだった。決闘には知力を競うものから身体を使うものまで様々なものがあるが、今回は素手による殴り合い。こういった内容のものは、放っておいたとしても面白いもの見たさで集まってくるのだ。さらに今朝剣正が起こしたスクラスへの乗り込み騒動も噂となり広がっていたこともあり集まる人数に拍車を掛けていた。

ただ観戦する者から、決闘に便乗して商売をする者、胴元となり賭けを成立させる者まで多々居る。

「二年F組、浅井剣正」

「二年S組、本田智也」

観客たちが見つめる先には、これから戦う相手を射殺すような目で見る剣正と、それを嘲笑うかのように余裕綽々な態度を取る生徒が居た。彼こそ剣正が可愛がっている猫を傷つけた真犯人だった。

「決闘中は勝負がつくまでは何があっても止めぬ。が、勝負がついたにも関わらず相手に攻撃を行おうとしたらワシが介入させてもらう。良いな？」

普段は寒いジョークを飛ばしたり、無理に若者の言葉を使おうとする鉄心だったが、今の鉄心からはそのようなふざけた雰囲気は感じられない。流星は年老えてなお世界から武神と恐れられる『川神鉄心』と言える。

「ああ」

「わかりました」

注意事項を受けた二人はそれぞれ返事をする。

それを見て鉄心は一步下がった位置へと移動すると大きく息を吸い込み

「いざ尋常にはじめいっ！……！！」

空気を震わせながら、決闘の開始を告げる言葉を言い放った。

多くのギャラリーが見つめるなか、先に動いたのは剣正ではなく本田という生徒だった。サッカー部ということもあり脚力が長けている本田は先手必勝を体現するかの如く、自慢の脚を生かして飛び出したのだ。

「さっきから気に食わない目で見やがって！」

そう言い放ちながら剣正へと肉薄した本田は、接近した勢いを拳に乗せて剣正の顔へと打ちだした。

直後、『ゲシッ』と、鈍い音が辺りに響く。

決闘と見守るギャラリーの最前列に百代と大和の姿があった。

「驚いた……」

「あの本田って生徒に？」

二人の目の前には握られた拳が顔のど真ん中に直撃し血が滴り落ちていた。剣正と、それを放った本田という光景が広がっていた。

「無防備に攻撃を受けたあの男に……だ」

百代の言うとおり剣正は迫り来る拳を何の抵抗もせず攻撃を受けていたのだ。

「それはいきなりだったからじゃ」

「違うぞ大和、浅井ならあの程度の攻撃は簡単に避けられるはずだ」

「それだったら何で避けなかったの？」

「私を知るか。後であの男にでも聞け」

大和の問いに百代は多少キツイ口調で言葉を返す。これは百代自身、『剣正の真の実力が見られるかもしれない』といった願望が叶わないと思ったからだだった。

(なんでだ浅井……お前はその程度なのか……)

本田の初撃撃を受けた剣正は再び無防備な状態で殴られ後方へと吹っ飛び地面を転がり、追い打ちを掛けるように本田が距離を詰め剣正の体をメチャクチャに蹴りだす。

それを見てギャラリィから落胆する声や剣正を心配する声などがちらほらと上がりだした。

(いてえよ……なんで、こんな目に遭わなくちゃならねーんだ……)

「早く負けを認めろよ。この屑がッ!!」

(いてえよ……でも、お前はこんな痛い目に遭いながら自分の家族を護ったんだよな……)

「オイ！ 何とか言ったらどうだ!!」

(偉いぞ……お前は家族を護った。今度は俺がお前の護ってやる



からな……)

「俺は……」

「ん？ 何か言ったか」

「俺はお前を許さねえええッッッ！！！！！！」

吠えた。突如として剣正は吠えたのだ。

突然の出来事に驚いた本田は一步、二歩と下がってしまった。

それは仕方のないことだった。至近距離で決闘の行く末を見守る鉄心でさえ、今の剣正による叫びには少々驚いていたのだから。

(この男子生徒……最近モモがちよっかいを出している者じゃったが、まさかコレほどとはのう)

さきほどまでざわざわと声が上がっていたギャラリーは静まり返っていた。その中、剣正はゆっくりと立ちあがる。

(あいつを傷つけたお前を……)

(あいつら家族を離れ離れになりそうにしたお前を……)

「絶対に許せねえんだ。許すわけにはいかねえんだよ」

そう言つと剣正は口元に垂れている血を袖で拭つと決闘が開始されてから初めて構えを取つた。

右手は胸の位置、左手は腹の前辺りで構えられており、拳は握ることなく指は開かれている。

「ほう、あの構えは」

相手に対し一直線上に肩幅程度の広げられた両足は前足と後足の踵の角度が直角になるように置かれている。

先日の百代との戦闘では見せなかつた構えだった。あの時の剣正は怒りの感情に任せ、ただ力のままに拳を振るっていた。今回の剣正は叫んだ事によって無駄な力が発散され、思考がクリアな状態になっていることもあったが、仕返しではなく猫を護るための戦いをするということが大きかった。

「やはりのう」

「劍正の構えを見た鉄心はどこか納得したかのような顔つきになる。

百代はというと、先日の戦闘で感じた違和感の正体がわかったこととでスッキリした表情で劍正を見ていた。

「大層な構えを取ったわりに来ないのか。とんだ臆病者チキンだな」

「……………」

構えた劍正を見て本田は挑発の言葉を吐きかけたが、劍正は動じることなくピタッと静止した状態で構え続けていた。

「こんな臆病者に無駄な時間はかけていらねえ。次で終わらせてやる」

動くことのない劍正を臆病者呼ばわりした本田は、離れてしまった距離を詰めていく。

彼、本田は勘違いをしていた。劍正は何もビビって動けずにいたのではないのだ。

初撃の時と同様に本田は勢いを乗せた拳を劍正へと放つ。

「破ッ！」

「なに……!?!?」

本田の伸びていた拳は剣正による手刀で切り落とされ、下方に流された手首を掴まれ関節を極められてしまう。ここまでの剣正の動きに乱れはなく、流れるような体捌きと鮮やかさだった。

剣正はその様態のまま体重をかけていき、本田は反抗するにも関節を極められて自由に動けずされるがまま、地面へと抑え込まれてしまった。

「この野郎！」

どうにかして抜け出そうとした本田だったが、反撃を許すことのない剣正によって残念な結果となる。

「謝れ……」

「はっ?」

「猫に……あいつら家族に謝れよ。そしてもう二度としないと誓え」

「ケッ、誰が謝るかよ。それにアレはあのクソ猫が悪いんだろーが」

「そうか……」

本田の反省など全くしていない様子を見て剣正の目、口と言った顔を形成するもの全てがガラリと変わる。

次の瞬間、バキツと鈍い音が響いた。

「折れたあああ！ 俺の、腕が……！！！」

そう響いたのは本田の腕が折れた音。剣正は手首を極めている方ではない手で本田の肘を叩き折っていたのだ。

無様にも痛みにも耐えきれず地面を転げ回る本田を見て、鉄心はこれ以上の戦いは無理だと判断した。

「それまで！！ 勝者、浅井剣正！！！」

鉄心の声がグラウンドに響き渡った。

決闘を見届けていたギャラリィから大きな歓声が沸く。

容赦なく相手の骨を折った剣正への批難や恐怖といった声もちらほら聞こえていたが、剣正の実力を目の当たりにして興奮している生徒も数人いた。その中の一人はもちろん百代。

(本気ではなかったようだが、私が出させてやる。あの目も……)

狙っていた獲物が本物だったということがわかり百代は喜んでいった。すぐにでも襲いかかりたいという気持ちをどうにか抑えチャンスが来るのを待つようにする。

決闘が終わりギャラリーはゾロゾロと帰り出したが、その時、事は起こった……。

「まだまだ……まだお前は反省してない。こんな腕の一本や二本なんかいらねえだろ？」

終わったにも関わらず剣正は本田に対し追い打ちを掛けようとしていたのだ。

「あのバカッ!!!」

## 第7話：剣正と猫、そして決闘（後書き）

ここで一度切らせていただきましたー！

本田という生徒は適当に考えましたので悪しからず……もし原作にいたらゴメンナサイ。

久しく原作をしていないので記憶が曖昧に、という言い訳……

ここで悩みを一つぶつちやけさせていただきます………クリスの転入話どうしよお orz

何も考えてなかったよー（涙

毎度のことですウンザリかもですが

ご感想・ご意見・ご指摘など随時お待ちしております。

誤字脱字があれば報告していただけると嬉しいですよ。

## 第8話：決闘の結末

「あのバカッ！！」

決闘が終わったにも関わらず、相手に追い打ちをかけようとしている剣正を止めるために百代はその場から飛び出す。

かなり焦っている様子だったが、それには理由があった。

決闘直前に鉄心が剣正らに伝えていた「勝敗がついたにも関わらず相手に攻撃を行なおうとしたら『ワシ』が介入させてもらう」という注意事項。

鉄心は老いたとしても武神の名を我がものとするほどの超人。全盛期に比べて衰えていても未だ現役バリバリの武道家なのだ。

武を興じる者としてルールは絶対。

実際これまでは、百代の知る限り決闘でこのルールを破った者はいなかった。

決闘を行なう者たちに多かれ少なかれ良識などがあつたかもしれないが、それは『川神鉄心』という存在が主な理由だったのだろう。

それを今日の前でルール破りと言う名の禁忌を犯そうとしている剣正が、鉄心によってどのように処分されるのが想像できなかった為に百代は焦っていたのだ。それどころか想像すらしたくない。

最悪、これから先闘うことのできない体になるかもしれない。こ



れで興味があつた人物が終わるなどと思いたくなかつたのだ。

「やめる浅井……やめるんだ剣正いいっ!!」

決闘を観戦していた百代が珍しく叫んだため周囲にいた者たちのほとんども驚きで体をビクツと跳ねさせた。

が、肝心の剣正には届いていなかった。

もし剣正の耳に百代の声が入っていたとしても、やめてはいないだろう。

剣正にも良識というものは存在するが今回の出来事は剣正の良識言い換えれば『相手を許せる範囲』の枠を超えた出来事だったからだ。

。百代の叫びも虚しく、本田の腕に込められていく剣正の力（体重）徐々にミシミシと骨が悲鳴を上げだしていた。

本田はというと、痛みと恐怖によって動けず、その場で尻込みをしている。

と、そこに恐らく川神学園……いや、日本や世界の中で最も恐ろしい存在である鉄心が人外としか思えないほどの凄まじい速度で剣正たちのもとへと接近する。

剣正と本田の間に割って入ると思われたが違っていた。鉄心は接近する速度を緩めずに剣正の頭部目掛け蹴りを飛ばしていたのだ。

これには、この状況を見ていたギャラリーである生徒たちも驚いた。中には目を大きく開く者から、眼を閉じる者まで様々な生徒がいたが皆思っていることは一つ「危ない」ということ。

だが、ルールを破ろうと暴走する剣正の意識を刈り取るうとするために放たれた脚は直撃することはなかった。

頭部を横から薙ぐようにして向かっていた鉄心の脚は上方へと弾かれていた。

これには流石の百代でも驚いていた。鉄心の實力からして本気で蹴ったわけではないことはわかっていたが、間違いなく剣正の意識を失わそうと放ったはずだったものが外れたのだから。

生きてきた年数、武道に捧げた時間、闘いの場数、どれをとっても超が付くほどの一流である鉄心が失敗するはずがないのだ。

「何するんだじじい……邪魔すんならアンタでも俺はやるぜ」

本田の腕から手を離して距離を取っていた剣正が、強襲を仕掛けてきた鉄心に向かい怒りを露わにしながら言い放った。

「ほう、アレを受け流すとはのう。それはその目が関係しておるのかの？」

鉄心は剣正の怒りを全く気にしていない様子で「ほっほっほ」と笑うように先程まで開いていなかった剣正の目を見ながら言葉を返した。

「……答えになつてねえだろ」

僅かだが剣正に変化が見受けられたが、それも一瞬だった。

「そこに居る情けない者のために、お前さんのような男の手を汚させたくはないのじゃが」

鉄心がチラリと視線を向けた先には、恐怖のあまり意識を失っている本田が地面に転がっていた。鉄心が言った通り情けない姿だった。

「ほれ、これだけの生徒の前で情けない姿をさらしたのだ。お前さんも許してやることはできないものかの？」

「許す？ なんの冗談だよ。わかった……邪魔するってんなら、アタをハッ倒してから、その男にトドメをさす」

「なかなか心地良い殺気じゃのう。可哀想じゃが、ちとワシも本気を出させてもらっぞ」

鉄心はそう言うと、他の教師の面々に生徒たちを下がらせるように告げる。

「ハイ、もうちょっと下がるように。巻き込まれても知らないヨ」

数十秒後、生徒たちが十分な距離を取ったことを確認した鉄心は頷くと再び剣正へと視線を動かした。

剣正は先程と同じ構えを取った状態で静止。鉄が仕掛けてくるのを待っていた。剣正が使う武術は待つてこそ力を発揮できるものなのだ。

そんなことは重々承知している鉄心だったが仕掛けていく。

「毘沙門天ツツ！」

次の瞬間、剣正の身に襲いかかる痛みと衝撃。

「なっ…………反則だろ…………」

バタリと倒れる剣正。勝敗は決したのだ。流石は百戦錬磨である鉄心。まだ十年と少ししか生きていない剣正とでは比べるにも違いが大きすぎた。

「これで終わりじゃの。先生方、この2人を医務室に運んであげなさい」

倒れる剣正と本田を見て鉄心が声を出した。

それを聞いて生徒たちは帰る者や部活に向かう者にわかれゾロゾロと移動を始める。

「まだ、だ……」

剣正は立っていた。

いや辛うじて立とうとしている剣正の姿がそこにはあった。

「……まだアイツ……ため、に……たおれるわけに……は……」

それ以上の言葉は聞こえてこなかった。自分の譲れないものため満身創痍の状態で最高の力を振り絞った剣正は、ピンと張られた糸が切れたのようにその場に倒れ込んだ。

こうして今度こそ勝敗は決し、本日の決闘、並びに剣正の暴走事件は幕を閉じた。

「剣正ツツ……」

地に伏せている剣正に近付くのは百代だった。百代自身この事件を見て何か思うところがあつたのか、その表情には迷いが浮かんでいる。

「じじい、やりすぎだろ」

「ほっほっほ、年甲斐もなく少々熱くなつてもたわい」

百代の言葉に鉄心は笑いながら答え、この場を後にした。実際、鉄心は少しではあるが熱くなつていた。だがそれは頭ではなく心。

何かのために力を使う剣正を見て、手を汚させたくはなかったのだ。

だからこそ一撃のもと意識を失わせるため『毘沙門天』という奥義まで出した。これは鉄心なりの剣正への思いやりだった。

「……ここは」

剣正が目を覚めたのはあれから数時間後。傾いていた日は完全に落ち、今は月が昇っている頃だった。

「学園の医務室だよ」

起きたばかりの剣正に話しかけたのは百代。

「先輩か……俺は……」

「見た目以上に症状は悪くない。軽い全身打撲に擦り傷だけだ。あのじじい上手いこと手加減しやがった」

「俺は負けたのか……」

「あと本田っていう生徒は停学処分になった。『これで我慢してくれ』だそうだ」

剣正が寝ている間に決まったことを伝える百代。

だがその表情は何故か釈然としていない。

「どうしたんだよ先輩」

「私がやっておけばよかったんだ。元はと言えば私が昨日仕掛けなかったら、万全の状態で戦えたはずだ。それに私がやればよかった」

そう、百代は悔やんでいた。己の戦いたいがため昨日剣正に仕掛けた一戦のことを。大和から聞いた時点で本田という生徒を完膚なきまでに叩き潰せばよかったと。

「そんなことはない。それに万全の状態で鉄心のじいさんと戦っても負けるさ。あと本田の野郎には俺が制裁を加えたかったから、先輩が気にすることはない」



ベッドに横たわりながら、百代の顔を確認し話しかける。そこにはどこか悲しい表情をする剣正がいた。

「でもよ……悔しいぜ先輩……最後は鉄心のじいさんに助けられた」

剣正の目からは涙がこぼれ落ちていた。

「俺じゃなくてアイツらがだ」

力のない自分を責める

「俺が護ってやるって言ったのに……」

護り通せなかった自分を責める

「ホントに、悔しいぜ……」

そんな思いを象徴するように、目から大粒の涙が流れ続けてた。

百代はそれを見て何を思ったのだろうか。

何も言わず、ただ剣正の涙が枯れるまで側で立ち尽くしていた。

## 第8話：決闘の結末（後書き）

これにて決闘は終わりです。

鉄心の「毘沙門天」は少々やり過ぎた感がありますが、どうかご容赦を orz

原作キャラの話し方って書くと難しいことに気付きましたw  
あれでよかったのか不安です……

クリスどうしようか……転入させとけばよかったと絶賛後悔中

ご感想・ご意見・ご指摘など随時お待ちしております。  
誤字脱字があれば報告していただけると嬉しいです。

## 第9話：とある男の思惑

「悪いな先輩。寮まで送らせて」

一頻り泣いたあと剣正は自分が住んでいる寮へと百代の助けを借り帰っていた。

「お前がワガママを言わなかったらもつと早く着いてるんだぞ」

「勘弁してくれ」

百代の言ったワガママとは何かと言うと。遡ること数分前。

医務室のベッドから出ようとした剣正は少し困った状況に陥っていた。

「なあ先輩、さっきは気にすんなって言ったけど、緊急事態だ。助けてくれ」

下半身を指差しながら何かを訴えようとする剣正を見て百代は何やらニヤニヤとした表情を浮かべる。

「あのなあ……こんな時に下の話はやめろよな」

盛大に勘違いをしていた。

「違っつて！ ついて……足首が痛くてまともに歩けそうにないんだ」

剣正がそこまで言うのと百代はギラツと目を光らせ剣正を両手で持ち上げた。

持ち上げられた剣正の顔が赤く染まる。

所謂、男性が女性を抱き上げる時にする『お姫様抱っこ』というものだった。

「ちよっ！？ 止めろ、止めてくれ！ 止めなかったらぶっ飛ばすぞ！ いや、ホント何でもするから下ろしてください」

あまりの恥ずかしさに強かった口調は弱くなっている。剣正はこれまで女性と付き合った事もなければ、お姫様抱っこというものを経験したことがない。それなのに抱き上げる側ならまだしも、抱き

かかえられる側になったのだから仕方ない。

「何でもするんだな？」

コクコクと百代の腕の中で顔を上下に振る剣正。それを見て「そんなに恥ずかしいか」と言いながら百代は剣正をベッドの上へと下ろした。

これが逆の立場であつたなら男としてカツコつくかもしれないが、如何せん剣正にそんな余裕はなかった。

「戻ってアイツの様子見たいしな」

その言葉を聞いて百代は、剣正に言おうとしていた事を心の中に留めた。

(ここで私が戦えと言つたら、空気読めてないよなあ)

そんな百代に気付く様子のない剣正はカバンを肩にかけると、怪我をしていない方の足で体を支え立ち上がると百代に話しかけた。

「肩貸してくれ」

こうして川神学園から出てきたのだった。

「無理無理無理ッ！ あんなの恥ずかしすぎだろ」

剣正はさきほどのお姫様抱っこされたことを思い出しながら百代に話す。

「今後のための予行練習と思ったらいいじゃないか？」

「いや、何で俺がされる側なんだよ。だいたいする相手も」

「なんだお前。付き合うような相手いないのか」

百代は少し驚いたような顔をしながら剣正を見た。

「可笑しいかよ。これまで誰ともそんな関係になったことねーよ」

「いや可笑しくはないが、私の友達の中ではお前って結構人気あるんだぞ」

「は？」

今度は剣正が驚きの表情で百代を見る。

「なんかお前が猫を可愛がっている姿を見て優しいやつなんだなあとか思っているらしい。それに顔も悪くはない」

百代が言うように剣正の顔は悪くはない。だからと言って良いとまでは言わないが、十人いれば一人二人くらいは好みかもと言うくらい顔をしている。

特に猫とジャレている時の剣正は、普段人に見せることない笑顔をしているため好印象を与えているのだった。

「へえ……」

「なんだ嬉しくないのか？」

「いや、今までそんなこと考えたことなかったなあって。ぶつちやけると俺は自分の事あまり冴えないやつと思ってた。唯一幼い頃からやっていたアレも先輩や鉄心のじいさんには適わないし」

剣正の言っている『アレ』とは、数時間前に見せた構えに関する事だ。



「私たちはな……それでも私はお前を評価してるぞ？」

「買いかぶりすぎだとは思うけど」

「なあ剣正、あの構えって」

百代がそこまで言ったところで、剣正が被せるように話しかけた。

「ここまで来たら大丈夫だ。先輩、ありがとな。また礼はするから」

話しているうちにいつの間にか島津寮の目と鼻の先まで来ていたのだ。

「ああ、あまり無理をするなよ」

「大丈夫だって。もし何かあれば助けを求めろさ」

互いに手を上げ別れると剣正は猫が居るはずの自分の部屋へ急ぐうとする気持ちを抑え、腕時計の短針が十二時を過ぎていたため静かに戸を開けた。

「おかえりー！」

戸を開けた瞬間、大きな声と共に剣正に飛びかかってくる者がいた。

寮に居る者は寝ていると思っていた剣正は突然の出来事と、怪我をしていた事もあり避けることができず直撃し倒れた。

「ッテエ……」

「近所迷惑だキャップ」

剣正の上に乗っていて大和に注意されたのは剣正と同じこの寮に住むバンダナを頭に巻いた少年、風間翔一。

「それに早く退いてあげないと」

翔一にハッ倒され乗られている剣正の様子を見ながら、大和に続いて言葉をかけたのはとある出来事から大和ラブな椎名京。

「あー、悪い。ちょい興奮しすぎた。そんなことより、よかったな猫無事だったよ」

「ホントか？ で、今はどうしてる？」

自分の痛みなど忘れ猫の事で頭がいつぱいになる剣正。

「とりあえず中に入ろう。本当に近所迷惑になる」

大和はそう言うと地面に転がる鞆を広い京に預け、剣正に起こす。

「悪いな」

「気にするな」

剣正が自分の部屋に入るとそこにはスヤスヤと眠る猫とそれに寄り添う二匹の子猫がいた。

「二時間くらい前まで居た獣医が治療を終えて帰ったんだ。あと『もう大丈夫。あとは飼い主が側で面倒を見ていてください』と伝えてくれと頼まれた」

剣正と共に部屋に入った三人のうちの一人である大和が猫について説明をする。

「よかったあ……お前らもよかったな」

子猫たちに話しかける剣正。少し涙目になっていたのは仕方ないだろう。

「お前もよく頑張った。偉いぞ」

剣正は最後に寝ている親猫の頭を優しく撫でた。

「あと三人もありがとな。わざわざそれを伝えるために起きていてくれたのか？」

三人への感謝の気持ちを告げる剣正。三人とは同じ寮生ということとで面識はあったが、ここまでの事をしてもらうほどの仲ではなかった。

「それもあつたけど俺がお前に用があつたんだ」

「なんの用だ風間？」

「俺の事はキャップと呼べ！ 大和、京、俺は決めたぜ。今日から浅井……いや剣正を風間ファミリーに迎え入れる！」

「……ええええええええ！？」

真夜中の島津寮に三人の声が響いた。

「なにやら楽しそうな声が聞こえてきますううう」

それとは別に涙を流す少女が一人いたことは剣正たちは知らない。

## 第9話：とある男の思惑（後書き）

この話はグダグダになってしまったことを後悔しながらも、めずらしく更新ラッシュ！

次回で第1章は終わります……おそろくw

愚痴というか悩みというか

恋愛書くの無理じゃね？と思った作者です…orz

さておなじみとなりつつありますが、

ご感想・ご意見・ご指摘など随時お待ちしております。

誤字脱字があれば報告していただけると嬉しいです。

## 第10話：決闘の代償と手に入れたモノ

決闘の日から数日後、すっかり怪我の具合もよくなった剣正はごく機嫌な様子で朝の通学路を歩いていた。

何故ご機嫌なのかというと、怪我をしている間はずっと大和が何かと世話をやいていたからだ。それ自体は善意からやってもらっていたことなので何ら問題はない。

だが、大和が剣正の世話をやいている時、必ずと言っていいほど突き刺すような視線が剣正へと向けられていたのだった。

もちろん視線の主は京。いつもなら一緒に過ごしていた時間であっても、大和が剣正の傍にいたために二人の時間が無くなってしまっていた。大和と過ごすことが至福の時間だった京からすれば剣正は邪魔者。

だからと言って直接言うと大和に何を言われるかわからず、結果剣正へと嫉妬などの邪念が籠められた視線が向けられていたのだ。

「直江には悪いけど、アレは勘弁だぜ……」

数日間に及ぶ自分を見ていたあの視線を思い出した剣正は少しどんよりといった表情を浮かべる。

そこに剣正の横を歩いていた猫が『にゃー』と声？をかけた。



「おっ、元気出せって言うてくれてるのか？」

「にゃー」

本当に会話が行なわれているのかは定かではないが、剣正の顔に笑みが戻ったのは間違いなかった。

「お前も元気になってよかったなあ」

剣正の隣を歩く猫は先日怪我を負った猫だったが、獣医の治療と剣正たちが看病したことで剣正同様すっかり元気を取り戻していた。

「お前も九鬼には礼を言わないとな」

「にゃー」

このあとも川神学園までの道のりを剣正と猫は会話？を楽しみながら歩いて行く。その光景を見ている者がいたが、剣正たちは気付くことはなかった。

学園に着き下駄箱にある上履きへと履き替えた剣正は手に持っていた鞆を肩に掛けると、足元に居た猫を抱えて教室へと向かう。

学園内に入ってから教室までの間に剣正へと向けられる様々な視線の数々。

（慣れてはきたけど、いい加減治まってくんねーかな）

この視線の原因は数日前に行われた決闘が原因だった。決闘自体は見慣れている生徒ばかりだったが、剣正の起こした行動が拙かった。

勝負がついたのにも関わらず怒りのあまり追い打ちをかけようとしたことで、決闘を見ていた生徒たちに『キレたら何をするかわからない』要するに危ない人物だと認識されてしまっていたのだ。

自分が蒔いた種<sup>ま</sup>だったので文句を言うにも言えず、ほとぼりが冷めるまでの間は我慢の日々を送らなければならなかった。

（俺だけが悪いってわけじゃねえのによー）

心の中で声に出せない叫びを上げ、溜息を吐く剣正。

「浅井くんじゃん。おはよー」

「なんだ小笠原か。おはようさん」

だが、剣正に向けられる視線や思いは、何も悪いものだけではなかった。こうして剣正に声をかけてくれる生徒もいるのだ。大半は剣正が属する2-Fの生徒たちだったが、それでも剣正は嬉しかった。

公にはなっていないが一年の時に起こした事件後、剣正は人付き合いを積極的に行わなくなっていた。

あることが原因だったのだが、二年に進級してもそれは変わらず表面上では仲良くしているようには見せていたが、本当の友達と呼べる者はたった一人を除いて居なかった。

「私じゃ不満な、アレ？ その猫って」

「あ？ ああ、コイツか。ようやく元気になったから九鬼に礼を言うために連れてきた」

「そーなんだあ。よかったね」

「おう」

自分では友達と思っていたいなかった人物から向けられる好意に、多  
少戸惑った剣正だったがようやく慣れ始めていた。

その後も次々と話しかけてきてくれるZ・Fの仲間たちに感謝し  
ながら剣正は決心した。

もう、臆病になるのはやめよう、と……………。

## 第10話：決闘の代償と手に入れたモノ（後書き）

第一章はコレにて終了です！

中途半端だと思いでしょう？

私もそうですw

ですが、一章で書きたかったのは心境の変化なのでコレでいいのですw

今回は番外編？みたいなものを1つやりたいと思います！

ご感想・ご意見・ご指摘など随時お待ちしております。

誤字脱字があれば報告していただけると嬉しいです。

## 第1話：一難去つてまた一難

二年F組の教室内はとあるの話題で持ちきりで仲の良い物通し話し合っている。話題の中心にあるのは転入生。

朝のHRホームルームの中で担任である小島梅子が伝達事項としてドイツにあるリューベックという場所から転入生が近々来ると話したのだ。

それを聞いた翔一は商売魂に火が点いたようで、『転入生の性別を当てる』という名目で賭けの胴元となり一儲けしようと企んだ。

その賭けには元々お祭り体質なF組生徒たちは次々と賭けに乗る。

直感でどちらかに賭ける者、こっちがいいという願望を乗せて賭ける者、情報を集めてから賭けようとする者などの三者に別れた。

賭けに参加しようと剣正はポケットに入れてある財布を取り出し残金を確認した。中には諭吉が一枚と小銭が少々。

賭け金は1000円単位と決められているため、参加するには諭吉を全額投資するか、割って使うという方法しかなく剣正はどうしようかと悩んでいた。

前回の給料日から結構経っていたため、剣正の手元にあるこの諭吉は全財産と言っても過言ではなく、もし負けなどしたらしばらくは貧相なご飯を食べる日々を送らなければならない。

そんな考えが頭をよぎった剣正は財布をポケットに戻した。

今回は見送る事にしたようだ。

「浅井は賭けないのか？」

賭けの胴元である翔一の手伝いから抜け出してきた大和が剣正に話しかけてきた。

「今回は止めとく。金がねーんだよ」

「代行のバイトで稼いでるんじゃないのか？」

「今月は色々使ったからこれが俺の全財産」

剣正はもう一度財布を取り出すと机の上へと乗せる。そして大和を見ながら口を開いた。

「お前も絡んでるんだから、どうせ上手いこと儲けようって腹だろ？」

「なんのことがわからない」

「へえ、そうかい」

うな垂れるように突っ伏した剣正はそのまま動かなくなりしばらくすると意識を手放し眠りに着いた。

授業中も気持ちよさそうに寝ていた剣正だったが、運悪くこの日入っていた小島の授業にて鞭を打たれ目覚めるとこととなった。

弁当を持参していない剣正は学食に向かっていた。四時限目が終わり授業担当だった教師に礼をするやいなや、まるで拳銃から弾き出された弾丸のように教室から飛び出した。

「まったく、あの先生話し長いんだよ」



どこの学校でも同じだと思うが、昼食時の学食という場所は紛争地帯となっている。育ち盛りである生徒たちは空腹を満たすために我先にと群がるのだ。

そのため出遅れたら待ちに待たされたあげく、余り物しか食べられなくなる。

だが諦める選択はなく、数%の希望に賭け学食へ向かう足を早める剣正。

そんな剣正の望みが叶うわけもなく、到着した頃には学食は食べ物に飢えた生徒でごった返していた。

「ですよねー」

券売機やカウンターへと群がる生徒たちを見て、悔やみながら肩を落としてボトボと列の最後尾へと並ぶ。

「間に合わなかったみたいだね」

剣正が最後の足掻きと神頼みしている所に、話しかけてきたのはクラスメイトである師岡卓也だった。

「せっかく全力で走ってきたのに無駄だったぜ」

「仕方ないよ。あの先生の話しはいつも長いからね」

「足も治って、前に約束した報酬もゲットしようと思ってたんだけどなあ」

「あれ覚えてくれてたんだ」

「当たり前だろ。できない約束はしない主義だ」

剣正と師岡が言っている約束というのはパソコンに詳しくない剣正が手伝ってもらったお礼にと『個数限定の学食』を奢るというものだった。（第4話参照）

「忘れてると思ってたか？」

「あんなことがあったしね」

少しバツが悪そうにしながら思っていることを素直に話す。

「アレはもう終わったことだ。猫も無事だったしな」

口には出さなかったが「気にするな」と言っているかのように剣正は師岡を見て笑う。

その後は午前中持ちきりだった転入生の話しをしながら人が減るのを待っていた。そしてようやく順番が回ってくる。

「やっぱりなあ……」

目の前にある券売機に並ぶ数多くの『売切れ』の三文字。剣正は目に見えて落ち込む。

「まあいいか。師岡は何食うんだ？」

「僕はうどんにしようかな」

「了解。じゃあ俺もそれにするか」

財布から小銭を取り出し券売機に飲み込ませる。ほとんどのモノは売切れだったが、師岡の言ったうどんはまだ残っていた。金額分が入れられるとボタンが光り、それを押す。

「嘘だろ……」

うどんのボタンに浮かぶ今一番見たくないもの『売切れ』の三文字が再び目の前に現われた。

「ほら、やるよ」ね」

手の中にあるうどんの食券を師岡に差し出しす剣正。

「いいの？」

「お礼だよ。この前、猫のために走ってくれただろ」

あの時、全力で走ってくれた師岡に剣正は感謝していた。学校で話すくらいの自分の頼みを聞いてくれ、関係ないにも関わらず全力で走ってくれた師岡に。

「じゃあ貰うね」

「おう！」

剣正の思いを酌んだのか師岡は受け取った。

「どうか適当に席取っといってくれ。パン買ってくるわ」

残っていた食券の中に食べたいものがなく、どうせ買っならパンの方がいいと思ったのだ。

だが、当然残っているのは人気のないもの。

しばらくして師岡の座る席を見つけた剣正の手にあったのはコッペパン。思っていた通りの余りものだったため落ち込んではいないが、明るくもない。

「結局これしかなかったぜ」

手に持つコッペパンとテーブルの上に置かれているこれまたコッペパンを差しながら剣正は苦笑いをした。

「ごめんね。僕が食券貰ったから」

「気にすんな」

そんな調子で剣正と師岡は他愛もない話しをしていると、学食に備え付けてあるスピーカーから声が聞こえてきた。

『今週もラジオ番組LOVEかわかみが始まるよー。パーソナリティは俺ハゲこと2年の井上準と……』

『人生、喧嘩上等諸行無常。3年の川神百代だ』

すると雑談などで騒がしかった声が静かになる。このラジオはさ

きほどスピーカーの向こう側で話していた二人が主体となり、毎回送られてくる（主に百代に）相談のメールに答えてきくというもので、生徒から人気があった。

「井上君も頑張るよね」

「毎回あんな終わり方してるのによくやるよ」

そんなことを話しながらも二人はラジオに耳を傾ける。

『準さん、百代さんこんにちは、はいこんにちはわー』

送られてきたメールの文面を読み、それに答える井上。

『よ。というか、前置きはいいから本分読めハゲ』

『好きな子ができました』

いつもの調子で進んでいくラジオ。聞いている者たちも『そろそろだな』と、思いつつも聞こえてくる声に耳を傾け続ける。

そしてやってきた。

百代の注意する声と共に聞こえてくるバキツという鈍い音。毎回途中で暴走する井上を咎める際に百代は殴ったりなどして気絶させてしまうのだ。

「やっぱりな……」

剣正が呟く。それはおそらくラジオを聞いている生徒たち全員が思っていることだった。

『……あ、気絶させてしまったな。まいい。曲流すぞ』

一人になってしまった百代がいつものように締め言葉を発表すると同時に、一度去った喧騒が食堂に戻り始める。

だが、この日はまだ終わらなかった。

『言い忘れてた。2年の浅井剣正を悪く言う奴らがいるらしいがお角違いだ。まあ、アイツも少しやり過ぎた面もあるが、護りたいもののために闘ったんだ。それを悪く言う奴は私が相手してやる』

「先輩……」

ポツリと漏れる眩き。

『剣正、足は治ったそうだが痛くなったら言えよ。次もお姫様抱っこしてやる。それじゃあ曲流すぞ』

百代の声と入れ替わるように人気のある曲が聞こえ出した。

「嘘だろ……」

本日二度目になる言葉が出てきた剣正。

悪く言う生徒は居なくなったものの、この日からしばらく剣正には百代のファンから妬みなどの視線が向けられることになった。



## 第1話：一難去ってまた一難（後書き）

前回あとがきに話しました番外編は延期しました orz  
とりあえず今は物語を進めようという理由からです。もし楽しみに  
していた方がいるのであればすみません……。  
いつか掲載しますので今しばらくお待ちを。

第二章は原作に沿いつつ剣正を介入させ、オリジナルをちよいちよ  
い挟んでいく予定です。……おそらく

私事ですがクリスの転入の話の構成は無事解決しました！w

第一章の間にコメントをくださった皆さん、お気に入り登録をして  
くださった皆さん、見てくださった読者の皆さん、第二章もよろし  
くお願いします！

でわでわ最後に……

ご感想・ご意見・ご指摘など随時お待ちしております。  
誤字脱字があれば報告していただけると嬉しいです。

## 第2話：ストレス発散

「あー、学校行きたくねえ……」

どんよりとした空気を身に纏いながら剣正は多馬川の傍を歩いていた。落ち込んでいる原因は言わずもがな、先日ラジオの最後に百代の発言。あのラジオの放送日以降、教室や廊下、あげくトイレでも突き刺さる嫉妬の視線にうんざりしていたのだ。

横を歩く猫も剣正の様子を見てどこか同情しているような表情にも見える。

そんな剣正の心情とは裏腹に後方から明るい声が聞こえてきた。

振り返った先にいたのは川神学園でもそこそこ有名な『風間ファミリー』。小さい頃からの仲の良い友人同士が集まった賑やかな集団で百代を抜いたメンバーは2-F組の生徒で構成されており、全員に少なからず面識があった。

「あいつらは気楽で羨ましいぜ」

明るく楽しそうにしている風間ファミリーを見た剣正は悲しい面持ちでボソツと言葉を漏らした。

「剣正じゃないか。おーい剣正！」

そこに後方から剣正を呼ぶ大きな声が聞こえてくる。声の主の正体は剣正が学園に行きたくない原因を作った張本人である百代。

(聞こえないフリ、聞こえないフリ)

しっかりと耳に百代の呼ぶ声が届いていたが、周囲に風間ファミリーがいるとはいえ一緒に登校している光景を他の生徒に見られ、今の状態がこれ以上悪化するのが嫌で無視をする剣正。

少しでも危険(自分が)に晒される可能性があるのであれば、全力で回避を試みるつもりのようなのだ。

「おーい剣正。聞こえているんだろう？」

尚も呼びかけてくる百代に剣正は心の中で願った。『頼むから諦めてくれ』と。

だが、そんな剣正の願いは儚く散ることになる。

無視をし続ける剣正に業を煮やした百代が走ってきたのだ。それに気付いた剣正は逃げようかとも思ったが逃げた後のことを考えたら、この瞬間を我慢したほうがいいと判断しその選択はせず諦める

ことにした。

「なんで無視するんだ？」

「なんのことかわからない」

追いつかれた百代に追及される剣正だったが、わざとらしく惚けこの場を乗り切ろうとする。

百代から離れようと早歩きで学園に向かおうとしたところに、風間ファミリーの面々が近づいてくる。

風間ファミリーのリーダーである風間翔一を筆頭に、剣正に挨拶をした。

剣正の心境を知らない翔一たちに悪意などあるわけもなく、それを理解している剣正はこの場から離れにくくなってしまふ。

唯一情報通である大和は剣正の置かれている状態を知っていたので、なんとなく察したようだが自由奔放な翔一を止められるわけがなかった。

「うーっす。おはようさん」

できるだけ明るく挨拶をしようとしたが、言葉に覇気はなく端々に「どこか元気がない」とわかる。

「どうした剣正。悩みがあるなら私に言ってみる」

『アンタのせいだよ!』と言いたい剣正だったが心の中で大きく叫ぶだけに留め、ハハハと苦笑いする。

その後は剣正の願いは届かず風間ファミリーと川神学園に向かうこととなり、たいして中身のない会話をしながら歩いて行く。

「お前が川神百代かあ？」

「そうだが」

「俺たちは」

雑談をしながら歩いてきた風間ファミリーと剣正に話しかけてきたのは、先日百代に絡んできた男たちの仲間らしく報復にやってきたと乱暴な言葉で話した。

「私を倒したいのか？」

百代は男たちを見て、にやりと笑う。だが、その笑いはいつもの礼儀知らずの獲物を狩る際の笑みではなく、何かをイタズラをする時の表情だった。

剣正は『今だ!』とばかりにこのチャンスを生かしてこの場から離れるため忍び足で去ろうとする。

「私とやりたいなら、その男を倒してからだ」

一斉に注がれる視線。その矛先は。

「……………え? 俺?」

剣正だった。コソコソと逃げ出そうとしていた剣正を見て百代は笑う。

「えーと……………冗談だよな」

「さっき私を無視したろう。罰だ」

言葉を失う剣正。何を言っても無駄だと悟ったのだ。助けを求めようと風間ファミリ―全員の顔を見たが、『ご愁傷様』と言いたげな表情を剣正に向けていた。例外はいたが、この状況を打破できそうな人物ではなかった。

「いやあ、無視してないって」

何とか言い逃れをしようと頑張る剣正だったが、激しく後悔していた。十分前の自分を殴り飛ばしたいと。あの時、返事をすればこっちはならなかったはずなんだと。

「ほら行ってこい！」

百代にバンと背中を叩かれた剣正は前のめりになりつつ一歩二歩と進み、男たちの前へと立ってしまふ。

「ハハハ、あの〜諦めて帰ってもらえないでしょうかねえ？」

半ばヤケクソ気味だったが、駄目もとても平和的に解決しようとする男たちに話しかける。

「何笑ってるんだテメエ！ 諦めるわけねーだろ！」

そんな剣正の言葉は一蹴される。できるだけ友好的にと笑いながら話しかけた剣正の姿が鼻に着いたようだ。

それでも諦めきれず、頭に思い浮かんだ言葉をそのまま口に出し

てしまう剣正。

「多分というか、絶対にあの人には敵わないって。怪我する前に帰った方……」

その言葉を引き金に百代へと敵意を向けていた男たちの標的は剣正へと移った。

「やんのかテメエ！」

「いや、俺は」

「ごちやごちやうるせえんだよ！」

先頭にいた男が飛びだし剣正へと拳を飛ばす。

次の瞬間、剣正を殴ろうとした男が感じたのは浮遊感だった。

剣正は体勢を低くし自分へと伸びる拳を下から跳ね上げ、腕を取り背負い投げのように投げた。

「ぐはあ……」

地面に背中から叩きつけられそのまま気を失う男。



「野郎お!!」

「つい……許してくれないかな、とか思ったり……」

「ふざけやがって！ おいやっちまうぞ」

「ああ、仕方ない。ストレス発散させてもらっぜ」

その後、多馬川の河原に十数人の男が倒れている姿が見られた。

## 第2話：ストレス発散（後書き）

なかなか話しが進まず……

ヒロインは未定でございます

フラグを立てるのは難しい。そして回収できるかも不安ですw

ご感想・ご意見・ご指摘など随時お待ちしております。

誤字脱字があれば報告していただけると嬉しいです。

### 第3話：ついに限界

浅井剣正は有名人となっていた。先日ラジヲの決闘騒動にLOVE川神、それに引き続き今朝の出来事。今や川神学園で浅井剣正を知らぬ者はいないと言っても過言ではない。

人伝いに広がる噂には、いつの間にか尾鱗が付き大げさに伝わったりする。

今朝の出来事も正確には剣正が巻き込まれただけに過ぎなかったのだが、生徒たちの間では『剣正が百代のために戦った』と実際とは異なったもので広がっていた。

挙げ句の果てに『百代と付き合っているのではないか』などといった疑念も生まれ、剣正からしたらなんとも迷惑な状態になっていた。

「勘弁してくれ……」

休み時間になるたびに、あれやこれやと質問される剣正。

昼になっても一向に止まる様子のない質問責めに完全に参っていた。

「どれもこれもあの先輩の……」

心の声が漏れ、つい呟いてしまう。

「私がどうかしたか？」

そこに現れたのは、剣正にとって今一番出会いたくない人物だった。

「うおっ！？」

驚きのあまり一歩二歩と後退ってしまい、後頭部をぶつけてしま  
う。

「ってえ……いきなり現れんなよ」

ぶつけた箇所を手で押さえながら文句を垂れる剣正。

「どこを歩こうと私の勝手だろ。それともお前には私の行動を制限  
できる立場なのか？」

一瞬無視を決め込もうとした剣正だったが、今朝の事もあったため断念し話を続ける。

「先輩のせいで、こっちは大変な目にあってるんだ。頼むから俺に関わらないでくれ」

「嫌だ」

真つ正面からたった一言で切り捨てられる。剣正の心からの願いは叶わなかった。

剣正の中で何かがキレた。

「いい加減にしろよ！ もう我慢の限界だ！」

百代と出会ってから今日までの間に剣正はありとあらゆる嫌がらせ（イタズラ）を受け続けてた。

今までは我慢をしていたが、些細な事でも積みもり積み重なれば大きなものになる。いつ爆発してもおかしくなかったのだが、今回のことでついにキレてしまったのだ。

この騒ぎを聞きつけ川神学園の生徒たちが集まり出す。元々人気のある百代と今や時の人である剣正の言い争い。それは注目されて

当然だった。瞬く間に廊下は野次馬で溢れかえり箱詰め状態になる。

そんな中でも剣正と百代を中心とし二メートル以内には誰も居なかった。いや、正しくは近付けずにいたのだ。互いが発する気に当てられ、一般人である生徒は体が本能的にこれ以上ね接近を許さずにいた。

周囲の様子が目に入らない剣正は、語気を強め百代にくっついてかか。もし見えていたとしても状況は変わらなかっただろう。

「一回だけだ」

剣正の言葉を聞いた百代の耳が僅かに動く。

「一回だけやってやる」

そう言うと剣正はワッペンを床に叩きつけた。奇しくもこれは剣正を有名人へとさせた決闘の議を申し込む行動。

それを見た百代はニヤリと笑うと、自身の持つワッペンを剣正のワッペンの上に重ねた。

剣正の申し込みが受理されたのだ。

百代からすれば願ったり叶ったりの状況。

これまで何を言っても戦いを拒まれていた相手から決闘を申し込まれたのだから。

「楽しみにしているぞ」

百代はそう言うところから立ち去っていく。歩いている百代の顔には笑みが浮かんでいた。

戦いに魅入られた狂気の笑みが……。

この話は生徒間で爆発的に広がり、川神学園で知らぬ人がいないくらいまでの注目を集めた。

剣正の武勇伝(?)にまた一つ刻まれた瞬間でもあった。

### 第3話：ついに限界（後書き）

お久しぶりです！

リアルが忙しく執筆する時間が中々とれず……

今回はいつにも増して短い話でしたがご容赦を orz

ご感想・ご意見・ご指摘など随時お待ちしております。  
誤字脱字があれば報告していただけると嬉しいです。



#### 第4話：たび重なる不幸

肉体を使つての戦闘、所謂決闘は職員会での許可が必要となる。大抵の場合はその日のうちに了承され、教師立ち会いのもとで行われる。

だが今回の決闘はその例には当てはまらず先延ばしにされた。決闘をする人物が常軌を逸しているため学園側に少なからず準備が必要となつたのが要因だつた。

決闘の申請があつた日から既に3日が経過し、そして4日目の朝になり学園内はお祭り騒ぎになつていた。遂にこの日、学園の全生徒と言つても過言ではないほどの注目を集めている決闘が執り行われるのだ。

広報部などは号外で新聞をバラまき更に騒ぎに拍車をかけた。見出しには大きく『川神学園で今最も話題の男【浅井剣正】川神学園で最大の人気を誇る【川神百代】遂に決着！』の文字、各ページにはオッズや下馬評が連ねられている。内容はやはり圧倒的に百代有利と予想され『一瞬か！？』とまで書かれていた。

そんな第三者の騒ぎを余所に剣正はトボトボと通学路を歩いていた。

「行きたくねえ……」

ここ数日同じような言葉を呟いている剣正。決闘の日が迫るにつれテンションが下がっていき、決闘当日にはどん底まで落ちていた。

先日百代に啖呵を切ったあと、ふと冷静になった時に剣正は後悔していた。『なんて事をしてしまったんだ』と……。

あれほど避けていた百代との闘いを、ストレスが溜まり我慢の限界という理由だけで自分からふっかけてしまったのだ。

どうにか中止にさせようと試みた剣正だったが、権限を握っている学長である鉄心に断られてしまい失敗に終わる。

それどころか鉄心に「孫（百代）を頼んだぞい」とまで言われてしまっていた。学長室から出た剣正は「何が頼むだあのクソじじい……」とボヤいていた。

「隕石でも降ってきてくれねえかな」

もはやこれまでかと、悲しい瞳をしながら叶わぬ願いを呟き重い足取りで歩む剣正。

「あっ、でも無駄か。あの人なら粉碎しそつだな……」

そんな相手と闘わなければならぬと思うと自然と頭を下がり肩を落としその場に立ち止まってしまふ剣正だった。

「いつそ逃げるか」

プライドより命と言わんばかりに、顔を上げた剣正は180度ターンし川神学園とは正反対の方向へと全力で駆けようとした。

「なんだあれ……」

振り返った剣正の視界に飛び込んできたのは見慣れないモノだった。

白く綺麗な毛を生やし、立派な足で地を踏みしめる四足歩行の動物。一瞬どこかから逃げ出したかと思った剣正だったが、その馬の背に跨る少女を見て間違った考えだと思い知らされる。

「おいおい……なんで……こっちに、向かってくるんだあ!？」

突然の事態に気が動転し思考が止まり、その場に立ち尽くしてしまふ剣正に馬とそれに跨る少女が軽快に接近してくる。

「もしかやアナタは川神学園の生徒か？」

剣正の目の前で停止した馬の背に跨る少女は問いかけた。

「金髪……」

だが剣正には届いておらず放心状態のまま少女の容姿を呟いていた。

「もう一度聞こう。アナタは川神学園の生徒か？」

そんな剣正の様子を見てもう一度問いかける少女。今度は先ほどより少し大きめの声で話しかける。

「あ、ああー応そっただけど……ってアンタも学園生なのか？」

質問に答え、ようやく思考が追いついてきた剣正は少女が着ている服が、自分の通っている川神学園の女子の制服という事に気付く。

「今日から世話になる」

「どつりで見かけた事がなかったのか」

「それで、アナタは何をしている？ もう始まる時間だぞ」

「今日は帰る。気が乗らねえどころか行きたくないんでね」

少女の問いに答えた剣正は手を上げると背を向け歩き出した。

「ちょっと待てっ！」

が、少女はそれを許そうとせず馬を器用に扱い回り込むと剣正の前に立ちふさがった。

「えーっと……お嬢さん。邪魔なんだけど」

「クリステイアーネ・フリードリヒだ」

「じゃあクリステイアーネさん、もう一度言うけど邪魔なんだけど……」

頭をポリポリと掻きながらクリステイアーネと名乗った少女を見ながら鬱陶しそうに話す剣正。

「クリスでいい。サボリは見過ごすことはできない」

ここで剣正はクリスを『融通の効かない子』と判断し、この場しのぎの言葉を考えた。

「わかった。ちゃんと間に合うように走って行くから先に行ってくれ」

「そうか」

剣正の言葉を聞いてクリスはようやく納得したのか、先ほどまでの少々きつめの口調は消え『うんうん』と頷いている。

そんなクリスの様子を見て心の中でガッツポーズをとる剣正。

「今から走っても間に合うとは思えん。よって連れて行く」

「へっ？」

馬に騎乗した状態のまま近付いたクリスは剣正の腕を取ると、太っていないとはいえな決して軽くないのにも関わらずグイッと軽々と引き上げた。

「……………」

あまりの出来事に剣正は再び放心状態になってしまふ。

「では行くぞ」

「……って、ちょっと待った!」

クリスの声で現実に戻され我に返る剣正。

「何か問題があるのか?」

「いやあ……そのー、馬も二人乗りじゃ辛いだろうから……」

「浜千鳥(乗っている馬の名前)はそんな柔じゃないぞ」

どうにか断ろうとした剣正だったが、返ってきた言葉は残念ながら剣正の求めていたものではなかった。

おまけとばかりに2人を乗せている馬・浜千鳥・が『甘く見るんじゃねえ』と言わんばかりに鼻を鳴らす。

(コノヤロー馬刺にしてやろうか)

と思った剣正だったが、馬も少女も悪くないとわかっているのだからすぐにその考えを捨て諦めることにした。

「では行くぞ!」

「お〜……」

クリスの元気な掛け声に力なく声を出す。

「行け浜千鳥っ!!」

「最近ついてねえなあ……」

馬の背に揺られながらここ数週間の自分の不運を呪う剣正だった。



#### 第4話：たび重なる不幸（後書き）

あれ？戦闘だと思っていたのに何故こうなったw  
次回こそ決闘のはず……たぶん！w

ご感想・ご意見・ご指摘など随時お待ちしております。  
誤字脱字があれば報告していただけると嬉しいです。

## 第5話：もうひとつの決闘

「まだ来てないぞ浅井のやつ」

剣正の所属する2-Fの教室内はざわざわとしていた。全校生徒が注目している決闘、その主役のうちの一人、浅井剣正がHR直前になってもまだ教室にはおるか学園にすら姿を露わしていなかった。

「大和、何か知ってるか？」

筋骨隆々の言葉が良く似合う男子生徒、島津岳人が剣正と同じ寮に住んでいる大和に質問する。

「いや、朝食の時は一緒だったけど、『先に行つといてくれ』って言われたから、そのあとは知らん」

「なんだよソレ。もしかして逃げたんじゃねーのか？」

「それは……」

大和は決闘が決まってからの剣正の様子を思い浮かべると、あなたがち岳人の言葉が間違っていないかもしれないという気持ちに駆ら

れる。

「ないとは言い切れないな」

「決闘もそうだけだよ、いよいよ今日だなあ」

「え？ ああ、転入生のことか」

「大和の仕入れた情報だと女子だったよな？」

「そうだけど、あんまり大きな声で言うなよ」

こうして大和と岳人が雑談を興じている間に、教室に備え付けられている壁掛け時計は8時50分を差していた。と、同時に2・F担任である小島梅子がガラツとドアを開き教室内に入ってくる。

直前までざわざわとしていた教室内の喧騒はピタリと止み、生徒たちは姿勢を正し着席していた。

「それでは、お待ちかね。転入生を紹介しよう」

馬の背に揺られながら剣正は1つの単語を息継ぎなしで繰り返して  
呟いていた。

「最悪だ最悪だ最悪だ最悪だ最悪だ……」

「ん、何か言ったか？」

「いや、何も……最悪だ最悪だ最悪だ……」

自分の前で手綱を器用に扱い馬を乗りこなしている少女の背を見  
る剣正の顔は実に恨めしそだった。だからと言って、善意おそらくでして  
いることなのだろう、と半ば無理やり納得すると動かしていた口  
をようやく止める。

「遅れ気味だ。少々揺れるが我慢してくれ」

「え？　なんだ、つつつ！！」

クリスの言葉を上手く聞き取れなかった剣正は聞き返そうとした  
が、突如として馬の速度が上がリその振動で舌を噛んでしまった。

この時になって剣正は先ほどのクリスが言った言葉がコレだったのかと理解したが、舌を噛んでしまった今では後の祭りだった。

普段使っている通学路を普段とは違った目線と状況で川神学園に向かうなか、剣正は痛む舌と別の意味で痛む頭に悩むも、1つの答えを出していた。

（腹括るしかねえか）

ようやく決断した剣正はある種の清々しい気分になり、気持ち身体が軽くなった気がした。だが、剣正は忘れていた。自分が置かれている状況のまま学園に行く意味を。1つ解決すればまた1つの問題が発生するのが、百代と出会ってからの剣正の日常だった。

場面を移して2 - F教室。

「グラウンドを見るがいい」

転入生であるクリスの父であるフランク・フリードリヒが、教室の窓を指し生徒たちの視線を外に促す。

「……？ げっ！？」

「どうした大和、何が見えるんだ？」

「女の子が学校に乗り込んできた。……あと」

「なんだそりゃ！！ あとなんだよ？」

担任の許可を得て2・Fの生徒がワラワラと窓に群がり始める。そして生徒たちの目に映り込んだのは、もちろん………

「クリステイアーネ・フリードリヒ！！ ドイツ・リューベックより推参！！ この寺子屋で今より世話になる！！」

「寺小屋って……」

白馬に跨り、綺麗な金色の髪の毛を風になびかせるクリスと、その後ろで身体を小さくして視線から逃れようとする剣正の姿だった。

その姿を見て2・Fの男子生徒は歓喜し、女子生徒は男ではなかったことに肩を落としていた。

「なんだあの男は！？ 何故クリスと一緒にいるのだ！！」

生徒とは別で最愛の娘であるクリスの後ろにいる剣正の姿を見て激怒するフランク。

「こっちはおれん！！」

そして何を思ったか教室から飛び出して行ってしまった。

小島先生に促され馬から降りたクリスと剣正は下駄箱でフランクに出会った。父のフランクに先に行くように言われたクリスは剣正を置いて教室に向かって行った。

「君の名は？」

「えっと、浅井剣正ですが」

「何故、クリスと共に来たのか答えたまえ」

有無も言わせないフランクの迫力にたじろいでしまう剣正。

「遅刻しそうな所に娘さんが通りかかり、目的地が一緒なら連れて行ってやると言われ、  
娘さんの善意を無下にするわけにもいかず」

「よくわかった。そこに余計な感情がなかったと誓えるか？」

「誓えます」

剣正の言葉を聞いたフランクはおもむろに右手を上げ、それを見た剣正は『ふう』と肩を撫でおろした。

「ようやく外れたか」

「気付いていたのかね？」

「さつきチラつと見えたので」

「狙撃手スナイパーがかね？」

「目が良いのだけが取り柄なので」

「さすがサムライの国だ。1000メートル以上も離れた位置にいる狙撃手スナイパーを事もなげに見破ってしまうとは」

「僕はこれで失礼します。それでも遅刻している身なので」

「うむ。君に1つ頼みがあるのだがいいかね？」



「僕、個人でできることなら」

「美しいクリスに近寄る害虫の駆除を頼みたい」

「できるかぎり善処します」

フランクの頼みを聞いた剣正は断わることもできたが、先ほどのこともありとりあえず受けることにした。もし断われればどんな目に遭うかがわからなかったからである。

「私はこの後、任務があるのでこれで失礼する。頼んだぞ浅井君」

剣正の返事を聞いたフランクは満足気な表情をしながら年を感じさせない足取りで、この場を後にした。

気がだるくなりそうな思いをしたあと剣正が2・Fの教室に着いた時に聞こえてきたのは川神一子の元気な声だった。

「クリス戦闘で勝負よ！」

「分かった。受けて立つー！！」

「待て、肉体を使用する決闘の場合は職員会での了承が必要だ」

「ほっほっ。小島先生。話は聞かせてもらったぞい」

いつの間にかどこからともなく現われた鉄心が、一子とクリスの決闘を了承する。幸いにも、この日は剣正と百代の決闘が行われる日だったため準備も行なわれていた。その前座試合という形になるが、心起きなく闘えるからだった。

「今すぐやんなさい」

「俺が来てるか見に来やがったな」

「なんのことかのう?」

「クソじじい……」

「よく逃げんかったの」

「はッ！ 逃げるわけねえだろ」

決して今朝の出来事を忘れていたわけではなかったが、鉄心の前ということで強気になる剣正。

「ではこの後の決闘が楽しみじゃ。頼んだぞい」

ほっほっほ、と笑いながら鉄心は2-Fを後にした。

第5話…もうひとつの決闘（後書き）

筆が安定しない……いつにもまして不安定 orz  
こんな日もあるぞ

今後この話は改正される可能性があります。

## 第6話：幕は落ちた

一子とクリスの決闘はすぐに校内放送で学園生徒全員に伝えられた。剣正と百代の決闘も予定されていたため決闘という言葉に敏感になっている生徒たちは、すぐさまグラウンドに移動を始め瞬く間に校庭は観客で埋め尽くされた。

剣正はというと今朝のクリスとの登校を見られたのを気にして、グラウンドを見渡せる屋上でもうすぐ始まる決闘を見物しようとしていた。

一子とクリスによる決闘の後は、全校生徒注目のメインイベントである『剣正』対『百代』の決闘が設けられていた。一度は腹を括った剣正だったが、直前になって気持ちが弱くなり今からでも逃げようかと往生際の悪い考えが頭の中をグルグルと回っていた。

「何だこんな所にいたのか」

剣正の背後から突然、女性の声が聞こえる。

「あ、ああ先輩か」

振り向いた先に居たのは対戦相手。だが、その姿は着ているはずの川神学園指定の制服ではなく、武道に席を置く者なら誰しも持つ

ている道着に袖を通した百代の姿だった。

「珍しく道着なんだな」

「今日まで楽しみにしていたんだ。制服で戦っちゃ対戦相手であるお前に失礼だろ」

「そんなもんかね（先輩が満足できる相手に出会っていない、か…）」

以前どこかで小耳にしたことのある噂が脳裏をよぎり、逃げ腰で揺らいでいた気持ちを持ち直した。

「なあ、先輩」

「なんだ？」

「今まで先輩のいる世界には俺はいなかった。踏み込んでやるよ、先輩が満足できるように」

縁をなぞるように置いていた腕の上にあつた頭を上げ、百代の方に体ごと向くと宣戦布告を行った。今回の決闘を決めた時の勢いに任せたものではなく、しっかりと冷静な精神状態での宣戦布告だった。

「……楽しみにしている」

そんな剣正の姿と言葉に少し驚いた百代は、一瞬戸惑うもしっかりと言葉を返した。本当に楽しみにしている表情をしながら。

「ま、本当に満足させられるか不安だけどな」

「そんなことないさ。私が興味を持った男なんだからな」

「あんまり過度な期待はしないでくれ。こうみえても俺はチキンなんだ、逃げたくなる」

「ハハハ、逃げたら今まで以上に追いかける。地獄の底までな」

「本当にそうしそつだから怖えよ」

そんな風に剣正と百代が雑談に興じながら、下で行われている決闘を見ていた。

「どうみる剣正？」

「わかんね。でも、もうすぐ勝敗が決するんじゃないかねえか？」

「何故そう思う？」

「ン、なんとなく」

剣正の言葉は次の瞬間真実の物となる。

猛攻を仕掛けていた一子が一度距離を置き、手に持っていた薙刀を高速で回転させ始めたのだ。

その後、一子の必勝の構えから撃ちだされた大技をクリスはギリギリではあったが、かわしきり必殺の技を出したために僅かだが硬直していた一子の身にクリスのレイピアが突き刺さり勝敗は決したのだった。

「終わったか」

「ああ、次は私たちの出番だ。行くぞ剣正！」

「おう！ って、どわあああああ！……！！！」

決闘を見届け終わった百代は剣正の首根っこを掴むとバンジーヤンプよろしく、グラウンドに向かって跳んだのだ。突如の事態と味わったことのない体験に叫び声を上げながら降下していく剣正だった。

決闘を終えたクリスは2・Fの生徒たちに歓迎されていた。クラスメイトである一子と真剣勝負をしたクリスは敵ではなく仲間となった。その証拠に決闘の最中でも付き合いの長い一子だけではなく、クリスに対しても声援が送られていた。

「なぜ皆、教室に戻らないんだ？」

周囲を見渡したクリスが疑問を口にした。決闘が終わったにも関わらず見に来ていた生徒たちから一向に戻る気配が感じられない。

「クリスは来たばかりだから知らないのか」

「お前は？」

「直江大和。同じクラスだ。よろしく」

「大和……日本国の異称、“大和”の字か」

「そうね。戦艦大和の大和」

「とても良い名前……大和と呼んでも？」



「うん。皆もそう呼んでるしね」

「では大和、よろしく」

「っと、脱線してしまったな。話を戻すけど、本来今日はもう一つ決闘が行われる予定なんだ」

その後、大和はクリスマスにわかりやすいよう簡潔に説明をした。

「でも、こういうお祭り騒ぎが好きな生徒が多いのは知っていたけど、決闘にこれだけの人数が集まったのは初めて見たよ」

「それだけ注目されているのだな。確か一人は川神百代」

先ほど大和に説明を受けたクリスマスはポツリと主役の名を呼ぶ。それに捕捉するように大和が付け加える。

「で、もう一人が浅井剣正。今朝クリスマスが馬に乗せてきた生徒でクラスメイト」

「こう言うって悪いが、一見した様子では正直強いとは思えなかったが……」

クリスが住むドイツまで川神百代の名は届いていたのだ。朝に出会った少年が、あの川神百代と張り合えるはずがないと思ったのだ

った。

「たしかに、普段の浅井からは想像できないから仕方ないか」

「もしかしてアイツはそんなに強いのか？」

「姉さん……川神先輩ほどではないと思うけど、強いはず。武道に  
関して、ほとんど素人の俺では信憑性に欠けるけどね」

最後に「あとは自分で見て確認してくれ」と言おうとした時、叫  
び声が聞こえてきた。それも大和たちがいる所へと近付いているの  
か、徐々に叫び声が大きくなっていった。

「上か」

誰かの声で一斉に頭上へと視線が集まる。目に飛び込んで来たの  
は、風を切りながら降下してくる百代と、首根っこを捕まれ情けな  
い声を出している剣正だった。

「姉さん!？」

「大和じゃないか」

「なんで空から……?」

「屋上でワン子たちの決闘を見てて終わったようだから降りて来た」

「それはわかったけど」

大和はそう言つと、百代の手にぶら下がっている剣正へと可哀そうなものを見る時と同じ視線を向けた。

「先輩、そろそろ離してくんねえかな。皆が見てる……注目されると逃げたくなる」

平常心を取り戻した剣正は自分に向けられる視線に気付き、気だるい気分になりながらも百代に離すように求めた。

「悪い悪い。でも逃げるんじゃないぞ」

「わかってるつて。場も結構、暖まっているみたいだな。逃げようもんなら大顰蹙だいひんしゆくを買っちまう」

一子とクリスの決闘を見た後ということもあり、興奮冷めやらぬ様子で今か今かと、決闘が始まる瞬間を待っていた。

「それでは、始めるかのう」

剣正たちの会話が終わり、ちょうどキリの良いところで決闘の見届け人である鉄心が話しかけてきた。

「「ああ」「

剣正と百代、二人の声が重なる。

「と、その前にじいさん。少し頼みがあるんだが」

「なんじゃ？」

「道着貸してくれねえかな？ 今、持っていないんだよ」

「お安い御用じゃ。ちと待っておれ」

鉄心はそう言つやいなや、疾風の如き速度でこの場から消え、一瞬で戻ってきた。その手には剣正に頼まれた道着が持たれている。

「ありがとうございます」

鉄心から道着を受け取り着替え終わった剣正はグラウンドの中心、主役が待つ場所へと歩みを進める。距離が近づくにつれ、ひしひしと緊迫している空気が伝わってきていた。

「なかなか似合っているじゃないか」

「久々に袖を通したけど、やっぱり良いもんだな道着ってやつは。気が引き締まる」

帯をしつかりと絞めた剣正は百代に視線を向ける。その表情は、この決闘から逃げようとしていた時の情けない剣正とはかけ離れたものだった。

「いい顔だ」

剣正を見た百代が口角を上げ、笑みを浮かべる。

「それではこれより川神学園の伝統、決闘の義を執り行う。審判はワシ、川神鉄心が責任を持って勤める。両者前へ出て名乗りを上げい」

「3年F組、川神百代」

「2年F組、浅井剣正」

「決闘中は勝負がつくまでは何があっても止めぬ。が、勝負がついたにも関わらず相手に攻撃を行おうとしたらワシが介入させてもらう。良いな？」

「あぁ」

自分と同じ領域に誰もいない孤高の強者、川神百代。

「わかってる」

その領域に足を踏み入れようとしている稀代の挑戦者、浅井剣正。

二人の武士もののふの

「いざ尋常に、はじめいっ……いっ……」

決闘の幕が切って落とされた!!

## 第6話・幕は落ちた（後書き）

えーと……まず謝っておきます。

決闘かと思っただけ読んでくれた皆さま、すみませんでしたー！  
何故か書いているうちにこんなことに……

戦闘は次回になりますので、見捨てずにいてください orz

申し訳ない気持ちではありますが、

ご感想・ご意見・ご指摘など随時お待ちしております。  
誤字脱字があれば報告していただけると嬉しいです。

## 第7話：剣正の覚悟と百代の覚悟【前篇】

剣正は体の側面に置いてあつた手を上げると構えを取つた。剣正が有名になつたあの決闘、本田戦と同じ構えを取り百代と対峙する。

今朝のビビっていた姿からは想像できないほど静かに、それでいて闘志を燃やす瞳で百代を見据え間合いを測っていた。

対して百代は剣正とは真逆にユラリとした自然体で立っている。どんな攻撃にも対応できるような姿だった。

闘争心の塊のような百代が先に動くかと思われていたが、先に動いたのは意外にも剣正。地に着けた足に力を入れ運動部顔負けの瞬発力で百代に向かって跳び出したのだ。

対峙してからすぐの出来事に観客の大多数は驚く。前回の決闘をギャラー見ていた生徒たちは何となくではあつたが、剣正の戦闘スタイルはカウンターや相手の力を利用したものだと思つていたので。

「はあっ！！」

瞬く間に接敵した剣正は地を這うような低姿勢の状態から、天に向かい伸びるように上昇し、掌底で百代の顎を跳ね上げに向かつた。

意表を突いた攻撃とはいえ相手は百代。そんな単純なことが通用するとは到底思えないが、結果は直撃。突き上げられた掌底は見事に標的を打ちぬき、百代の顔は鮮やか跳ね上がった。



これにはギャラリーはおろか、仕掛けた張本人である剣正自身も驚いたが、止まることはできない。手を休めてしまえば反撃を許してしまう可能性があったからだ。

これまで百代の戦闘を見たことのある剣正は百代の圧倒的な実力、戦闘力から生み出される破壊力を知っていた。だからこそ攻撃を受ける前に少しでもダメージを与えたい。できることなら倒してしまいたいという願望があった。

百代の懐、超至近距離から剣正ができる攻撃は限られていた。首を引っこ抜かれた形で突っ立っている百代の腕、手首付近を掴み取り自分の方向へと引きつけ肩を勢いよく衝突させ百代に強い衝撃を与えた。

「まだまだあー!!」

衝撃で後方に飛んだ百代に対し剣正は攻撃の手を緩めず接近し、頭部目掛け横から薙ぐように蹴りを放つ。その間も百代は無抵抗。されるがままに剣正の攻撃（蹴り）を受け頭部が弾けた。

「はあはあ……」

時間にすればわずか一分以内の出来事。剣正にとって攻撃しているとはいえ相手は百代。気を緩めるなんて自殺行為はできるはずがなく、精神を擦り減らしながらの攻撃だった。精神が削られれば、当然身体にも異変は起きる。結果、息切れを起こすことになった。

「……痛いな、やっぱ」

「チ、やっぱり駄目だったか」

剣正の攻撃は一切の手加減はない全力だった。武の経験がある剣正の攻撃はどれだけ小さく見積もっても平均男性を大きく上回るものだ。だが、その攻撃を受けた当の本人である百代はピンピンしていた。

「わざと受けただろ」

「ん？ お前に習ってやってみたんだが」

百代の言う剣正の行動とは、前回の決闘で剣正が見せたものを指していた。相手の攻撃を避けることも守るもせず、棒立ちのまま受けるというものだった。

「わかっていた事とはいえ……やはり痛いな」

決して、百代は悪ふざけや思いつきでしているわけではなかった。剣正と本田の決闘を見ていた時に百代は罪悪感を持たずにはいられなかったのだ。あの決闘の火種になった原因は本田という生徒にあった。だが、百代はそうとは考えていなかった。

「なんでだよ、先輩」

剣正が見せたあの行動は百代の脳裏だけではなく心の内にも大きく深く刻まれていた。百代の戦いは常に自分の欲求を満たす為の勝負であって、剣正のように何かの為に闘うようなものではない。

「これが私のケジメだ」

常に戦いを求めているバトルジャンキー戦闘狂と思われるがちなのだが、百代には決して揺らぐことのない信念と呼べるものがあつた。

決闘後、百代が謝つたところ剣正は『そんなことはない』『先輩が気にすることじゃない』と云っていたが、百代の中では解決してはいなかったのだ。だからこそ、百代はこうして剣正の取つた行動『自分が護れなかった猫の痛みを知る』に習い『自分の所為で剣正が負つた痛みを知る』を実行したのだ。

「気にすんな“って言ったのによ”」

「剣正！」

「なんだよ先輩」

「“気にするな”」

百代が決闘を望んでいたのは単純に戦いたいという欲求だけではなく、剣正とのケジメを付けたいというものもあったのだ。その思いはこうして果たし

「ハハハ。わかったよ、先輩」

剣正が笑い、百代が笑う

「それでいい」

「存分に死合おう！」

両者の意地・信念、全てをぶつけ合う本当の闘いが今、始まった。

## 第7話：剣正の覚悟と百代の覚悟【前篇】（後書き）

タイトルを見て「まさか！」と思われたことでしょうか  
はい、そうです。この決闘編は前後半にわけてお送りしますw 痛  
ッ！うわっ、何をするやめ（ry

真面目な話、この決闘はただの闘いというわけではなかったので、  
分量的には少ないですが、個人的には内容の薄いものではなく一度  
ここで切らせていただきました orz  
その辺り、ご理解いただけると幸いです！

次回更新は近いうち……一週間以内にしたと思いますので、どう  
かお待ちを！

ご感想・ご意見・ご指摘など随時お待ちしております。  
誤字脱字があれば報告していただけると嬉しいです。

第8話・剣正の覚悟と百代の覚悟【後篇】（前書き）

この話に出てくる武に関する技術や名称・表記は作者がネットで見たものを独自に解釈し書いた物であり、間違った知識や表記があるかもしれませんがお許しください orz

まさか、はじめての前書きがこんなだとは……気を取り直して、どうぞー！

## 第8話・剣正の覚悟と百代の覚悟【後篇】

(良い表情じゃ)

日頃から祖父として川神院総代として百代を見てきた鉄心は、百代の内に“闘争への飢え”という名の魔が住みついているのを危惧していた。

圧倒的な武の才、天賦の才を持って生まれた百代は強者として武の世界に君臨することになった。武神の名を我がモノとした鉄心さえも凌ぐ百代の実力は他者を寄せ付けないまでになり、孤独に身を置くことになる。

(強者ゆえの孤独……じゃが)

時は流れ百代を孤独から救う者が現われた。いや、救い出そうとする者が現われたのだ。

闘いに身を置く者として精神的に不安定だった百代の前に立つ男、浅井剣正。それは鉄心が、百代が待ち続けた男だった。

鉄心の前で闘っている二人は純粹に楽しんでいる者の表情をしていた。

「はあっ!!」

振る脚は、抜き身の刀。直撃すれば骨を容易く折るであろう破壊力を秘めた蹴り。撃ちだされる拳は、銃の弾丸。掠りでもすれば身を抉り取るであろう威力を持ったパンチ。

気で強化された百代の力と剣正との力には大きな差があったが、持ち前の目の良さと自身のバックボーンの一つとなつている武術を駆使し剣正は凌いでいた。回避が間に合うものは避け、不可能なもの上手く捌き受け流す。

が、防ぐだけではギリ貧。徐々に回避が間に合わず受け流すシーンが増え、剣正の額には汗が浮かぶ。

腕や足を器用に使い受け流してはいるが、回避とは違い一歩間違えれば致命傷を負ってしまう。回避と比べれば明らかにリスクが大きいのだ。それは実際に攻撃を受けている剣正がよくわかっていた。

「これで！」

剣正は百代の突きに合わせ腕を伸す。手を鶴の頭部を模した形である鶴頭かくとうにし、自身に迫る百代の拳を跳ね上げた。

拳を跳ね上げられた百代の上半身は無防備に晒される。その瞬間を狙い作つた剣正は前に出した脚を軸に回転し遠心力を加えた肘を鳩尾に打ち込む。



「がはっ……！」

直撃した肘による一撃による衝撃は、呼吸するために必要な筋肉のうちの一つ、横隔膜を刺激し動きを瞬間的に止まらせた。それによって酸素を供給できず百代の反撃に移れず動きが僅かに鈍ることになる。

それを剣正が見逃すはずもなく、百代の側頭部に蹴りを放とうと脚を振り上げた。

その時、剣正の思いがけない出来事が起きた。

「嘘だろ……！」

動きが鈍っていたはずの百代が、一瞬にして回復し動いたのだ。剣正は知らなかった。これまで川神百代が負けなかつた理由<sup>わけ</sup>を。

いくら最強と謳われようと所詮は人間。例え小さな傷でも蓄積されれば、大きなダメージとなり戦闘を持続するには大きな障害となる。剣正はそう考えのもと闘っていた。

だが、天が百代に与えた唯一無二の才【瞬間回復】が剣正の考え

を真正面から裏切る。

先に蹴りを繰り出している剣正。やや遅れ気味のタイミングで蹴りを放つ百代。

もはや止めることができず、振りぬくことを決めた剣正が脚に全神経を集中し百代に蹴り叩きこむ。しかし、それを大きく上回る速度で百代が剣正の腹部に蹴り込んだ。

「ぐふっ……!!」

直撃した百代の蹴りは剣正を吹き飛ばし、肋骨をへし折り、その衝撃は内臓にまで達し、剣正は酷い吐き気を催した。食道を胃液が遡ってくる。生物としての生理現象に意思を預けようとした。

体を支える脚から力が抜け、膝が崩れ落ちる。

尚も込み上げてくる胃液と消化途中の食物。

その時、剣正は一陣の風を感じる。

そして、ふと顔を上げ 見た

今にも倒れそうな自分へと迫る百代の姿を……。

(そうだ……俺は)

思い出す

決断を

決意を

闘っている相手を

(先輩を……川神百代を孤独から救うと誓ったんだ！)

吐き出す寸前まで来ていた嘔吐物を半泣きになりながらも飲み込み、涙目で霞む視界で何とか百代の拳を捉える。

今からでは躲すことはもちろん、先ほどまでのように捌くこともできない。だからこそ剣正は倒れることを選択する。

もともと力を抜いていた体は重力に従って地面に落ちていく。百代の迫るのを目視しながら、拳が進むであろう軌道から逸れるように上半身を捻り地面を転がり回避を試みたのだ。

その選択は功を奏した。剣正の頭があつた位置を撃ち抜くように百代の拳が通過していく。だが、百代の突きは剣正の考えていた以上の速さで迫っていた為、剣正の髪を掠り僅かばかりだが焦がした。

九死に一生を得た剣正は、地面を転がり続け百代との距離を取り素早く立ち上がり、すぐさま構えを取った。

「良く避けたな」

「ギリギリだったよ」

「それにしても厄介な目だ」

「先輩の回復力ほどじゃないさ」

互いに認め合い、間合いを測りつつジリジリと距離を詰める両者。

「だが、眼が良いからと言って反応できなければ、意味がない！」

「言うだけなら誰にだって言えるぜ」

百代の言うことは理に適っていた。剣正の目は一般人を遙かに凌ぐ静止視力と動体視力を有し、その動体視力は普通では捉えられない百代の動きを完璧に捉えていた。それ故に実力差のあるこの決闘を成立させていたのだ。

そして百代は闘いの中で感じていた。全てを視られていると。

武術家としての本能が囁く。

『より速く。より加速しろ』

その本能に従うがまま百代は加速する。

人体の仕様を無視した速度まで、人間の限界を超える速度まで加速し、剣正に接近する。

対して剣正は目に全神経を集中し気を張り巡らせ……そして剣正も限界を超える。剣正の視界に映るもの全てが減速する。相対する百代の身体の動き出し“起こり”を捉え身構える。

前半は攻めていた剣正だったが、本来の戦闘スタイルは相手の出方を見てから動き出す所謂【後の先】だった。【守主攻従しゅしゅうこうじゆう】とも呼ばれる、その特徴は完全なる防御を行なった後に反撃するということもであり、剣正の特性である視力とは絶妙の組み合わせなのだ。

一般人では決して見ることでできない。武道・武術を興ずる者の中でも一握りの存在が目を凝らしたうえでやっと見える百代の動きを、まるでスローモーションのように捉えた剣正は、右足を前に出した半身から左足を前に出した逆半身に構えを入れ替え百代を待った。

この動きは先ほど折れた肋骨の状態を考えてのことだった。

超高速で近づく百代は元々、一撃必殺の威力を持つ拳に全体重、速度を加えて剣正に打ち出す。

神速という言葉が似合う突きを剣正は完璧に見切り直線的に進む拳の軌道を僅かにずらし、前方に沈みながら腕を取り体の向きを反転させる。そして肘関節を極め鋭角に投げた。これは剣正と百代が始めて相対した時に百代が剣正に使った技だった。

が、一つだけ違うことがあった。今回、剣正は関節を極めている。そして極めた腕を折りつつ投げたのだ。

百代に受けていたダメージは剣正の運動能力を著しく低下させていたが、精神が傷ついた肉体の限界を超えた力を引き出し、生まれてから現在までの中で、最も速く・最も鋭く・最も呼吸の合った、自身最高の投げだった。

「なっ……」

剣正の感じたのは骨を折った確かな手ごたえとそれを否定するかのような軽さ。

「よお、剣正」

百代は地面に落ちずに剣正の正面へと立っていた。だが、片腕は

ダラリ力なく下がっていて、剣正に折られたことが目に見えてわかる。確かに百代は折られ、投げられていた。

が、それは百代の掌の上での出来事。

腕を折らせ、地面を離れる瞬間に自ら跳んだのだ。そして空中で身を翻し剣正の前へと降りた。

「お前には驚かされてばかりだ」

残る腕を瞬時に引くと、真つすぐに剣正へと叩きつけた。剣正もそれを見て回避を試みようとしたが、百代がそれを許さない。瞬間回復によって息を吹き返した腕で剣正の身体を掴んでいた。

剣正の抵抗空しく百代の拳が剣正の身体へと突き刺さった。

「楽しかったぞ」

百代の突きをまともに食らった剣正は、百代の言葉を聞く前に凄まじい速度で飛ばされた。さながら銃から飛び出した弾丸のよう滑空し地面についてからも転がり続ける。そして舞い上がる砂埃の中に消えて行った。

両者の闘いを見守っていた観客からは一切の音が聞こえてこず、辺りは風や草木が奏でる音と剣正が舞いあげた砂が落ちる音だけだった。

やがて砂埃は晴れ

「ハハツ、参ったな……」

百代の視線の先には

「まだ……終われねえよ、な……」

口から血を垂らしながらも立つ男。道着は所々破れ、全身至る所に砂を被り汚れている剣正の姿だった。

「本当に剣正、お前には驚かされてばかりだよ」

百代がしっかりと地を踏みしめながら歩みを進め、呟く

「言っただろ？ ……『俺が先輩の世界に行つてやる』って」

剣正がふらふらになりながらも足を進め、囁く



「最高だよ。お前は」

「強えなあ。ホント強えよ、先輩」

やがて二人は手の届く範囲まで接近する。

そして

「はあああああッッッ!」

「くッ……!」

剛の拳と柔の拳が交差する。

なあ剣正……本当はお前、もう見えてないんだろっ？

私が放った拳が剣正の身体に直撃する

もう、倒れてもいいんだぞ？

ほんの少し前まで攻撃を捌いていた剣正は、そこにはいない

なんで倒れない？

撃ちだされる拳からは威力が感じられない  
繰り出される蹴りからは驚異が感じられない

なのに……何で、こんなにも痛いんだ……

そんなにもボロボロなのに、なぜ立っている

「そんな……悲しい顔すんな」

「!？」

何も見えていないはずなのに

「先輩の拳から伝わってくるんだよ」

「なんで……」

「さっきも言ったろ？」

そうか…… 剣正が幾度となく言う台詞

「俺が先輩のいる世界に行つてやる””つて」  
“お前が私のいる世界に来てくれる” だろ？」

私が待っていたのは

「行くぜ、先輩」

「来い、剣正」

私が本当に待ち望んでいたのは

精神力のみで動いていた剣正の身体が起こした奇跡。

空っぽだったはず肉体に宿る一発限りの力。

剣正は最後の力に、全てを拳に乗せて突き出した。

「剣正、お前の拳（想い）は私に届いたぞ」

体から力を失い崩れ落ちていく剣正の身体を百代は受け止める。

「そこまで！ 勝者！！ 川神百代！！！」

鉄心の声が響き渡る。いつしか周囲は静かになっていた。

始めは騒いでいた観客たちだったが、剣正と百代の決闘を見ている間に口数が減り、やがて無口になり見入っていたのだった。

パチ！

パチパチ！！

パチパチパチパチ！！！！！！

一つの拍手が二つの拍手を生み、二つの拍手が四つの拍手を起す。それはやがて大きくなり、剣正たちを取り囲んでいた観客たち全てから拍手や労いの言葉が送られていた。

（剣正、聞こえるか？ 闘っただけの私たちに、これだけの人間が声援を送ってくれている）

百代が背中に担ぐ剣正の顔は、本田戦の後に浮かべていた悔しさの表情とは違い、たしかな笑みを溢していた。

「私たちが運ぼう」

気を失っている剣正を医務室に連れて行こうとタンカを持った教師陣が近づいてきた。

「いや、私が運ぶ。それにコイツにはタンカは似合わない。なあ

」

第8話：剣正の覚悟と百代の覚悟【後篇】（後書き）

前書きにも書かせていただきましたが、間違った解釈による誤った知識や表記があると思います。ココは直した方が良いという箇所がありましたらご指摘ください！

さてここからはずっと私のターン！

いやあ、もう『次の話で完結してもいい流れじゃね？』とっています

半分冗談で半分本気だったりもしますw w

それにしてもいつにもましてオ ニー小説だなと感じた今回……w

本日、執筆していて思ったこと

『気付けば百代がヒロインっぽい』

なぜこうなった！？

では、いつものごとくですが

ご感想、ご意見、ご指摘など随時お待ちしております。

誤字脱字があれば報告お願いします。



## 第9話：敗北のあとに

「また先輩の世話になるとはな……」

決闘を終えた剣正は気を失い医務室に寝かされていた。肉体のダメージは気による治療を施し自然治癒能力を高めてくれたおかげで、目立った外傷はほとんど治っていた。

「回復したとはいえ、まだ目が見えてないんだろ？」

「まあな」

百代に引かれるようにして歩いている剣正の瞳には光がなかった。

「明日にでも治ってるさ。きっと」

目が見えていないことに恐れるでもなく、焦るでもなく、普段通りの剣正がそこにはいた。

「それってアレの代償か？」

剣正は生まれ持った才である視力の良さに加え、眼に全神経を集

中し気を張り巡らせることで一時的に能力を向上させ限界を超えた視力を得られる。だが、それは諸刃の剣で限界を越えた力を無理やり引きだしているに過ぎず、使用後は『数時間〜数日間』視力が低下し目が見えなくなってしまうのだった。

「バシてたか。あの時の先輩の動きを捉えるには、奥の手使うしかなかったんだよ。それでも勝てないんだから強すぎるぜ」

「それでもお前は来てくれる」

「ああ、そう約束したからな。でもあんまり期待しないでくれよ。」

「『逃げたくなる』だろ？」

次にくる言葉を予想し笑いながら先に言う百代。

「よくわかっていらっしやる」

そんな百代につられ剣正の顔にも笑みが浮かぶ。

「さあ、川神院に着いたぞ」

「悪いな」

「麗子さんには連絡してある。自分の家だと思って寛いでくれ」

治療によりダメージから回復してきているとはいえ、剣正は怪我人。今日は大事を取って川神院で様子を見ることになっていた。

「おかえりなさい」

「ただいま、妹よ」

「その声は……川神か」

川神院へと入ったところには百代の妹である一子が薙刀を持って鍛錬に励んでいた。クラスメイトということもあり、一子と剣正は何度か話したことがあるため、目が見えなくとも声で判断できた。

「名前と呼んでくれていいわよ。川神じゃ誰だかわかんないし」

「そついえばそつだな」

「何かあったら言ってね」

「ああ、その時は頼りにするよ。ありがとな」

「うん」

「それじゃ俺は行くわ」

剣正はそう言つと百代に手を引かれ家の中に入つていった。

「ん……朝か」

翌日、いつもと違う部屋で目を覚ました剣正の目には光が宿っていた。だが本調子まで回復してはおらず、多少ボヤけていて見えていた。

川神院で朝食を頂いた剣正は、世話になつた人たちに礼を言つた。め院内を歩きまわっていた。

「改めて見ると、やっぱりデケエな」

川神市に住みだしてから川神院の前を何度か通つたことのある剣正だったが、中に入ったのは今回が初めてで、川神院の規模の大

まさに驚いていた。

「やあ、浅井くん。もう調子は良いのかい？」

そんな剣正に話しかけてきたのは、ルー・イー。川神院の師範代で、剣正の通う川神学園の教師でもあった。

「目はほとんど見えてるよ。体はまだちょっと痛いけど、生活する分には支障はないかな」

「おお、それはよかったネ！」

「ルー先生もありがとな」

昨日医務室でボロボロだった自分を治療してくれたうちの一人であるルーに礼を言う剣正。

「なになに、あれもワタシの仕事だからネ。一つ質問していいかな？」

「どうぞ、俺に答えられることなら答えるぜ」

「終盤、百代に飛ばされてからの君の体は限界を迎えていた。なにどうして動けたのか。聞かせてくれないか」

「んー……意地だな。それに限界なんてものは勝手に決めたものだから？ 無理やりでも動く限り動かすんだよ。後悔しないようにな」

「ははは、意地か。確かに後悔しないようにすることは悪くない。でも無理のしすぎは体を壊す原因になりかねない。気をつけないといけないヨ」

「そうならないように、鍛錬に励むさ」

「困ったことがあったら何でも言いなさい。力になるヨ」

「そんな時は頼むわ」

その後、ルーとの会話を終えた剣正は鉄心たちに礼を言うと川神院を出て島津寮へと向かった。

「なんだ……こりゃ……」

寮にある部屋に戻った剣正の目の前には、最後に部屋を出た時にはなかった物が鎮座していた。

「……………これって」

決して広くはない部屋に堂々と置かれているそれは、横長な箱に大小様々なつまみが付いており、なにやらメーターのような針などが付いた機器。戦争映画などで軍隊が仕様しているソレ。

「どう見ても通信機だよな。ん？」

とりあえず中に入った剣正は確認しようと通信機(?)に近づいた。そこで通信機(?)の上に置いてある手紙らしきものを発見した。

「眼鏡はっど……………」

視力が回復していないため、こんな時のために置いてあった眼鏡をかけた。

「えーと、何々 『君がコレを読んでいるということとは、もう設置してあるのだろう。そこにある物は通信機だ。君に娘のことを任せたのはいいが、私は職業柄、世界を飛び回っているため連絡するのに手間がかかる。そのために設置させてもたつた。何かあったらこれで連絡するがいい。フランク・フリードリヒ』…………… どんだけッ親馬鹿なんだよッッッ！！！」

読み終わった剣正は手紙を床に叩きつけ、ドイツのある方向たがひに向かって突っ込んだ。

「アホらし……………寝るか」

まだ決闘の疲れが抜けきっていないため、回復に専念しようと思つて寝転がり意識を手放した。

その日の夜、島津寮のメンバーと川神姉妹によって、寮生になつ



たクリスを歓迎する焼き肉パーティーが開かれることになっていたらしく、剣正もそれに参加することになった。

同じ寮に住みながらも、これまであまり交流のなかった剣正は最初遠慮していたが、翔一たちが生みだす雰囲気の後押しされ、最後には自分からも会話に入り仲を深めた。

「んじゃ俺もバイトあるんで。夜の引越し」

「具体的に内容を聞くのが怖いな。行ってらっしゃい」

「同感だな。行ってら〜」

怪しいバイトへと向う翔一を送り出した剣正と大和は、男の相談をしていた。

「浅井、行けると思つか？」

「行ける。たぶん」

「姉さんもいるからなあ」

「いくらなんでも、そこまではわからんだろ。盛り上がってるみたいだし」

二人が話しているのは、寮の二階にある女子風呂を覗きに行くか

否か、という正直どうでもいい内容のものだった。

結果、覗きに行くという思春期の男子なら当然の選択をした剣正と大和は二階へと向かった。

「安心しろ。俺はステルス剣正と呼ばれたことがあるんだぜ」

大和の不安を払拭するために親指を立てる剣正。

「おい、剣正。大和。お前たちも入るかー？」

「……バレてるじゃん。ステルス剣正」

「……その名で呼ぶな」

## 第9話：敗北のあとに（後書き）

急ぎ足でゴールデンウィークまでお送りする予定ですので、多少無理のある文に見えますがお許しを！

本日、執筆していて気付いたこと

『風間ファミリー入りするか否かの話を書き忘れてた』  
ん、サラッと重要な事を言っただって？……キニシナーイ！

## 第10話：新たな友人と風間ファミリー

「自分から言つた事とはいえ、疲れるぜ」

手に持つ鉄製の破片や木材の切れ端など仕分けしながらを袋に詰める。剣正の周囲には同じような大きさの破片が四散していた。

昨夜、覗きを決行しようとした剣正と大和だったが、目的地である風呂場にたどり着くまでにバテてしまい、あえなく断念した。

自分の部屋に戻つた剣正は、まだ痛みが抜けきっていない体を休めようと布団に入った。そして剣正が就寝に着いた数分後、島津寮を大きな音と揺れが襲つた。

その正体は、今、剣正がかき集めている破片がまだ形を成していた時の物、風呂を沸かすために必要な風呂釜が破壊された際に生じたものだった。

「ふう。とりあえず、こんなもんか」

額に浮かんだ汗を、首に掛けてあつたタオルで拭う剣正。側には、大小様々だが集めた破片が袋に詰められ積み上げてある。

後のことは、専門の人間に任せるしかないなく、両手に袋を持ち玄関へと向かい邪魔にならないところに置くと、何度か二階の風呂場と玄関を往復し作業を終えた。

その後、掻いた汗を流すために入浴し、居間で寛いでいた。

「腹減ったなあ」

テレビを見ていた剣正の胃が空腹を訴えるように音を出す。

ふと顔を上げた剣正の見つめる先にある壁掛け時計は正午を回っていた。

土日、祝日といった休日は寮生が自炊することになっているため、待つについても何も出でこず、無駄に時間を浪費するだけになる。

だが、残念ながら剣正の自炊スキル0。

買い置きしてあったカップラーメンやインスタント食品などは先週尽きてしまい、買い出しに行くのも忘れていた。

「ああー、ううー。腹減ったあ……」

うつ伏せになり奇妙な声を発しながら、うなだれる剣正。

「あ、あのつつつ!」

そんな端から見たら変人と思われかねない剣正に話しかけてくる声<sub>こゑ</sub>が聞こえる。

その声に反応した剣正は、空腹のため残り少ない体力を総動員し、声の主の方向へと顔を向ける。

「んあ? えーっと、たしか……薫さん?」

「は、はい!!!」

情けない姿の剣正へと話しかけてきたのはまゆみ ゆきえ薫由紀江。剣正たちと同じく島津寮の住み、寮生の中で唯一の一年生。

「それで何か用か?」

「あの……よろしければ、わた、私が昼食を作りますでしょうか?」

「ほんとかツ!?!」

いきなりガバツと立ち上がった剣正は、由紀江へと近づき方を掴んだ。その顔はいつになく真剣なものだった。

「私も昼食を取ろうとしていたので」

「頼むッ!」

昼食を作り到下へと降りてきた由紀江だったが、居間で腹を鳴らして「腹減った」と言って倒れている剣正を見て、話しかけてきたのだった。

「では今から作りますので、少々お待ちください」

「了解!」

剣正の返事を聞いた由紀江は、キッチンに向かい冷蔵庫の中にある食材を確認しだした。

「何か嫌いな食べ物や、苦手な食べ物ってありますか浅井先輩?」

「特にないかな。基本的に何でも食べれる」

「わかりました」

「何か手伝えることあったら言ってくれ。調理以外の事なら何でもやるぜ」

「では、大きなお皿と小さなお皿、あとお茶碗を二人分用意しても

らっていいですか」

「よっしゃ、お任せあれー」

由紀江は、数種類の野菜と肉などを取り出しフライパンを使って調理しだした。その間に剣正はテーブルを拭き、頼まれていた皿などを用意する。

「ご馳走様でしたッ!」



「お粗末様です」

食べ終わった剣正と由紀江は、両手を合わせる。

「んじゃ、洗い物は俺がするから黛さんはゆっくりしといてくれ」

「い、いえ私がしますよ」

「これくらいは俺にさせてくれ。料理はできねえけど、片付けとかなら得意だから」

「では、お願いします」

「任された」

食器を流し台に持って行った剣正は、テキパキと洗い物をこなし、フライパンなどの調理器具は次に使用する人物が使いやすいように片付けていく。

「こんな所だろ。黛さん何か飲むか？」

「浅井先輩と同じ物をお願いします」

「了解。あと浅井先輩じゃなくて、下の名前で呼んでくれ」

「いいんですか……？」

恐る恐る剣正の顔を見ながら聞く由紀江。

「いいも何も、同じ釜の飯を食ったんだし、もう友達だ。友達なら名前で呼ぶのが普通だろ？」

「……友……達……」

「もしかして、迷惑だったか？」

「い、いえっ！！ 光栄ですっ！！！！」

「うおっ！？ そ、それなら良かった。剣正ってんだ。よろしくな」

「はいっ！ 私の事も名前で呼んでもらえますか？」

「いいのか？」

「その……お、お友達ですから」

「そうだったな」

「由紀江っていいいます」

「これから仲良くしてくれよな、由紀江ちゃん」

「私こそよろしくお願ひします、剣正さん」

この日、川神市に来てから一人目の友達が由紀江にできた。

その後、剣正と話している時の由紀江の顔は、いつもの人を威圧してしまugiこちない笑顔（？）ではなく、自然にこみ上げてくる良い笑みを浮かべていた。

剣正も、そんな由紀江を見て楽しそうに話していた。

今まであまり友人を作らなかった剣正だったが、激動の数週間の中で確かに変わっていた。

その日の晩、昨日食べた焼き肉のお礼にと由紀江が、寮生と川神姉妹、岳人、卓也に出身地である石川県の特産物を使った手料理を振る舞った。

食後、勇気を振り絞って、風間ファミリーに入りたいと言った由紀江の願いは叶い、それを見て剣正は返事をしていなかった風間ファミリー入りを表明した。

新たな仲間を得た風間ファミリーは互いに自己紹介をし、友好を深めた。

そして何気ない一言で女子メンバーの反感を買い、女子側への捕虜となった大和を救うべく男子メンバーで奪還作戦を行ったが、結果は男子の惨敗。

剣正も奪還作戦に入っていたので、それを相手すべく、高みの見物を決め込もうとしていた百代が参加したことが原因だった。

## 第10話：新たな友人と風間ファミリー（後書き）

皆さん、一週間とちよつとぶり作者の忍です！

今回は久々のまゆつち登場です。（一章、第9話の最後に少しだけ登場しました）

そして剣正の風間ファミリー入り表明。本当はもう少しあとにしたかったのですが、この際さり気なく入れましたww

本日、執筆し終わって思ったこと

『松風、スマン』

書いているうちに出すタイミングを失った orz

あと数話で第二章も終了です！

しつこいんだよ！と思われるかもしれませんが恒例の……

ご感想、ご意見、ご指摘など随時お待ちしております。

誤字脱字があれば報告お願いします。

第11話・日常と非日常（前書き）

お久しぶりです！

## 第11話：日常と非日常

休日の昼下がりに、剣正は全国チェーン店であるファミレスで好物のパフェを頬張りながら、目の前で繰り広げられる不毛な口論をしている二人を眺めていた。

「どう見てもナンパを急いだガクトが悪い」

「モロがお子様クリームソーダ食ってるせいだな」

「違うね、クリームソーダに罪はないね」

口ゲンカをしているのは、先日入ることになった風間ファミリーのメンバーである島津岳人と師岡卓也。口論の始まりは岳人が店員の女性をナンパしたことが原因だった。

「で、いつもこんな感じなのか？」

ほどよくして言い合いを止めた二人を見て、パフェを食べるのに使っていたスプーンを口に咥えながら質問をする剣正。

「そうだね。ガクトがナンパして失敗。それで僕が迷惑を被る」

「なんだと？ 筋肉もねえ貧弱のモロのクセに生意気だ」

「筋肉は関係ないでしょうが！」

沸点が低いのか、また言い争いを始めようとする二人。

「ナンパねえ……」

「なんだ？ ケンも俺様が悪いって言いたいのか？」

風間ファミリーに入り、友好を深めたことで剣正は苗字の《浅井》ではなく、名前で呼ばれるようになっていた。

岳人と、ここにはいない翔一は剣正のことを《ケン》の愛称で呼んでいた。

「そんなこと誰も言ってねえだろ……あ、モロが言ってたか」

「じゃあ、何だよ？」

「ナンパで引つかかる女は、余所でも引つかかるに決まってる。そんな女がいいのか？」

「遊ぶだけならいいじゃねえか」

「それなら文句はないさ。好きにやってくれ」



「いちいちお前に言われなくても」

剣正はそれ以上の追及はせず、口に啜えっぱなしになっていたスプーンをパフェの入っていた器に戻すと、店員を呼ぶボタンに手を伸ばす。

店内に呼び鈴のような音が鳴り響き、しばらくするとウェイトレスが嫌そうな表情をしながら注文を取りにやってきた。

「これ1つ。以上で」

手に持ったメニュー表のデザート覧にある、さきほど食べたものとは違うパフェを頼む剣正。ウェイトレスは注文を確認すると、空いた器などを持ち、軽く頭を下げると厨房の中へと消えていった。

「まだ食べるの？」

「甘いものはどれだけでも入る」

「女みてえなヤツだな」

「別にいいだろ？ 好きなんだから」

「女つて言えば、ケンはどんな子がタイプなんだ？」

「僕も気になるな」

仲の良い岳人や卓也は互いのタイプの女性を知っていたが、最近よく話すようになった剣正のことはあまり知らなかった。

「なんでいきなりそんなこと聞くんだよ」

「さっきガクトに『ナンパについてくるような女がいいのか』とか聞いてたから、なんとなくね」

卓也の催促の言葉を聞いた剣正は「うーん」と考えだし、グラスに入った水を口に含み考えだした。

「守ってあげたくなくなるような子だな。あとはわからん」

「わからないって……じゃあファミリーで言うなら誰？」

「いない気がするけど、強いて言うなら由紀江ちゃんかなあ？ というかファミリーの女子は守られるより、守る側っぽいけどな」

「同感だ。モモ先輩はともかく、他の女子にはパワーじゃ負けないのに、真剣勝負ってなると勝てる気しなくなるし」

「確かにみんな強いもんね」

「ということ、ファミリーの中にはいないさ。話はこれで終わりッ！ 俺はこれを食べることに専念する」

剣正たちが話している間に注文していたパフェが運ばれてきていた。店員の声がなかったため、いつからテーブルにあったのかはわからないが、少し中に入っているアイスが溶けていた。それを二つ目とは思えない速さで口の中へと放り込んでいく剣正。

数十分後、剣正たちがいた席のテーブルの上には、空になった容器が1つポツンと置いてあった。

ファミレスを後にした剣正は、ナンパをすると気合の入った岳人、それを傍らで見守る卓也と一緒に行動する予定だったが別行動を取っていた。

岳人たちについて行かなかったのは、先ほどのファミレス店内で耳に挟んだ少年たちの会話が原因だった。

普段なら人の会話など気にしないのだが、今回は内容が内容だっ

たために確かめずにはいられず、とある場所を目指して足を進める  
剣正。

向かっている間、剣正の頭の中では繰り返されてきた会話がグ  
ルグルと回っていた。

しばらくして剣正が歩いていたのは親不孝通り。この辺りは川神  
院に通じる仲見世通りなどの人が賑わう場所とは違って暗く、どこ  
となく怖い印象を受ける場所だった。そこを慣れた様子で歩く剣正  
すれ違う人間に声をかけ話しをしたりしていた。

「浅井じゃねえか。こんなところで何してやがる？」

「ゲンちゃんか……丁度いい。少し話しを聞いてくれ」

親不孝通りに入ってから数人目となる人間との会話を終えた剣正  
に話しかけてきたのは源忠勝。剣正がしている代行業のバイト、宇  
佐美代行センターの後継ぎとして現代表である宇佐美巨人から仕事  
のイロハを教え込まれたりしている。いわゆる仕事の先輩であった  
が、クラスメートということもあり普通に話す仲だった。

剣正はファミレスで聞いた話をそのまま忠勝に話し始める。

「とうわけなんだ。宇佐美さんに聞きに行こうかと思ってた所にゲンちゃん came。何か知ってるか？」

「たしかに最近怪しい新しい薬が出回ってるのは知っていたが……何にせよ調べといてやるよ」

「ありがと。危険が及ぶようなら、手伝うから言ってくれよな」

「別にお前の為にやってるわけじゃねえ。俺が気になるからだ。勘違いすんじゃねえ！」

「はいはい。とにかく頼むぜ」

「まったく……俺はこれから仕事だから行く」

「いってらっしゃーい」

忠勝と別れた剣正は代行センターの事務所に向かい、宇佐美に話を聞こうとしていた。だが着いて早々、剣正は宇佐美に仕事を押しつけられてしまい労働に勤しんでいた。

「宇佐美さん、終わったぜ……」

「御苦労さん。その辺に置いといてくれ」

剣正は自分に課せられた物の完成品をダンボールの中に入れ綺麗に梱包し、部屋の隅に積み上げていく。

「じゃあ俺は帰るわ」

最後の一箱を積んだ剣正は疲れ切った表情のままドアを開け、一声かけて出て行く。

時刻は夜の9時を回っており、昼と比べると一層暗くなり一般人を寄せ付けない雰囲気を放っている親不孝通りを剣正は島津寮を指し歩いていた。

「あ、クスリのこと聞くの忘れてた」

通りの半分に差し掛かった所で事務所に向かった理由を忘れていたことに気付いた剣正。

「まあ、今度でいいや……」

「アオオオーツ！！！！」

突然剣正の耳に入ってきたのは男性の悲鳴のような声。

「なんだ！？ ……とりあえず行ってみるか」

剣正は悲鳴が聞こえてきた方向に走り出して行き、到着した場所には数人の男が倒れていた。

声だけでは詳しい場所が特定できなかったこともあり、到着した頃には男たちを倒した相手が見つからず、警察と救急車を呼ぶだけ終わってしまった。

## 第11話：日常と非日常（後書き）

見ていたアニメが最終回を迎え、少し気が落ちている忍でござい  
ます。

今回の話は、後日書きなおすかもです orz

いつものことながら、

ご感想、ご意見、ご指摘など随時お待ちしております。  
誤字脱字があれば報告お願いします。



## 第12話：情報の代償

剣正は親不孝通りで遭遇した事件の翌日、川神学園に辿り着いてすぐに宇佐美の下へと向かうため、廊下を走っていた。基本的にはギリギリに登校してくる剣正だったが、この日はかりは通常より早めに登校してきていた。

職員室の前で宇佐美を見つけた剣正は話しかける。

内容はもちろん聞き忘れていたクスリの件と昨夜遭遇した暴行事件のこと。

「おはよう宇佐美さん。ちょっといいか？」

「おはようさん。これから小島先生に話しかけようとしてたんだが……」

「悪い。今は諦めてくれ」

「仕方ない」

「恩に着る」

剣正の様子に気付いたのか、宇佐美からは先ほどまでの駄目なオッサンという雰囲気は消え、仕事に専念する時の表情になる。

それを確認した剣正は、クスリのこと昨夜の事件のことについて話し、宇佐美の知っていることを聞きだしていく。

「何か知ってるか？」

「オジサンの知っているかぎり、クスリに関しては最近出回りだしたモノで、どんな作用があるのかはわかってない。今度調べといてやる」

「ゲンちゃんと同じか……。悪いけど頼むわ。俺じゃ裏世界の情報は調べられねえからな」

「忠勝にも聞いたのか。わかったらアイツからお前に伝えるように言っただいてやる」

「俺も仕事なんて選ばず何でもやるんだった」

剣正は今になって悔んでいた。部屋の掃除から借金の取り立ての何でも代行する“宇佐美代行センター”でバイトとして働くようになったのは、社員の一人が剣正をスカウトしたのが始まりだった。

最初は『面倒だ』と言って渋っていた剣正だったが、『簡単（安全）な仕事だったら請け負う』という条件付きで働きたのだ。それを今の今まで貫いてきた剣正は危険が伴う仕事をしたことがなく、裏の情報を手に入れるコネなどがなかったのだ。

「悔やんでも何にもならないぞ。大事なのはこれからだ」

「ああ。これからは何でもやるから言ってくれ」

「どんな心境の変化だ？ 前は頼んでも『嫌だ。俺は平和に暮らしたい』と言ってたろ」

「……守るものができたからな」

宇佐美の質問に、剣正の頭の中に浮かんだのは風間ファミリーのメンバー一人ひとりの顔だった。仲良くなつたのは最近であっても自分が変わるようになったきっかけをくれたのは、他ならぬ彼らや彼女らであつたのだから。

「ご立派、男の鑑<sup>かがみ</sup>」

「茶化すなよ」

「男の顔だねえ。今度何か奢ってやるよ」

「しっかりと奢ってもらうから覚悟しとけよな。あ、暴行事件の事は何か知ってるか？」

「一度で覚える？」

宇佐美は親不孝通りで住んでおり、近所で起きた事件だったこともあったため、昨夜の騒ぎ（パトカーや救急車のサイレン）を聞きつけ早い段階で情報を集め出していたのだ。

ちなみに親不孝通りに住んでいるのは、裏の情報を知るのに都合の良いことや、治安の問題で家賃が他に比べ安いことが理由だった。

「『加害者は黒のタンクトップを来た大男』『被害者はクスリを売っていた人間たち』か……了解。しかしいつもの事ながらよく知ってるな」

「情報は金になるってこと。本来なら金で情報を流す」

「それをタダで情報が貰えるなんて、働いていてよかったぜ」

「これで昨日の手伝いの分の給料はチャラ」

「ってオイ！ それはねえだろ宇佐美さん……」

「世の中ギブアンドテイクってことだ」

「さっきまでは良い人だっと思ってたのによ」

「良い勉強になったな浅井。ほら職員会議が始まるから行け」

「『立派、教師の鑑……』」

宇佐美の真似をし溜息を吐くと、教室に向かって歩いていく剣正。その後ろ姿からは疲れが見えてとれた。

「そうそう、優からの伝言だ。『明日戻るから、放課後河原に来るよつに!』だとさ」

「りょうか〜い」

剣正は宇佐美の言葉に生返事をして、その場からトボトボと消えて行った。

その日の夜、人気の無くなった川神学園の中に複数の人影が確認できた。その影とは風間ファミリーであり、その中には剣正の姿もあった。

「で、なんで呼び出されたんだ？」

放課後、制服から私服に着替えた剣正は情報を求め親不孝通りを駆けずり回っていた。だが知っている以上の情報を得ることができず途方に暮れていたところに、風間ファミリーのリーダーである風間翔一から電話で『今すぐ川神学園に集合、異論は認めん!』と招集を掛けられたのだ。

「キヤップ説明してなかったのか」

「忘れてたぜ。わりいわりい」

「はあ……いつものことだけど、しっかりと伝えてくれ」

キヤップと呼ばれる翔一に変わり、大和が今回呼び出した理由を話します。

「“依頼”って知ってるよな？」

「頼みを請け負うアレだろ？」

川神学園には“依頼”と呼ばれるものが存在していて、学園内の問題、つまり教師や生徒からの頼み、内容は部活の助っ人から彼氏や彼女のフリだったり様々なモノを、食券を報酬で受け取り、それをこなすというものだった。

依頼は毎回、空き教室を使ってセリにかけられより安く提示したものが請け負うというシステムになっていて、今回は『窓を割っている犯人を叩き伏せる』という内容のもので、翔一がセリ落としていたのだ。

「俺、その犯人知ってるかも」

「ほんとか？」

「昨日ファミレスでそんな会話を聞いた覚えがある」

「で、どんなやつだった？」

「たしか中学生くらいの子で二人組だった」

「俺たちが手に入れた情報だと3・4人で車をだつたから、最低でももう1人はいるな」

「あまり役に立てなくてスマンな」

風間ファミリーの面々は作戦会議を始め、各階に二人ずつ別れるツーマンセルという形をとることになり、剣正は目が良いという理由から、弓道部に所属している椎名京と共に屋上という配置に着くことになった。

「京ちゃん、敵さんが来たぜ」

屋上から正門の方向を見ていた剣正が窓割りの犯人が来たことを知らせるように口を開いた。

「何も見えないけど……」

「紺の軽自動車に四人。えーと……運転手は大柄な南米系の男、あとは中学生くらいの子供だ」

「もしかして冗談じゃなくて、見えてるの？」

「ああ、昔から目が良いんだ」

「目が良いってレベルじゃないと思うよ」

そんな会話から少しあと剣正の言った通り、紺の軽自動車に乗った四人組の男が川神学園の敷地内に入ってきた。

「ところで俺はなにをすればいいんだ？」

剣正の質問に京は「見てるだけでいい」と言うと、傍に置いてあった弓を左手に、矢を右手に構えると、乗る者のいなくなった軽自動車のタイヤ目掛け放った。京の手から四本の矢がなくなる頃には、前輪後輪を合わせた四本のタイヤからは空気が失われることになった。

「ほえ、見事！ って言葉が似合う腕前で」

「まあまあだね」

「慢心しないとはご立派、武士の鑑」



ほどよくして校内から逃げ出してきた犯人の一人は、車がパンクしていることに気付くと振り返りナイフを片手に一子に立ち向かっていったが敢え無く返り討ちに遭い、お縄に着くことになった。

「最近、ヒ……宇佐美さんがつつつてきたかも……なんか憂鬱だな」

## 第12話：情報の代償（後書き）

暑くなってきた脳味噌がとろけてきている忍ですw  
久々に連日更新できてよかったw

ではまた次回お会いしましょう。  
感想やお気に入り登録に感謝！

### 第13話：帰還！宇佐美の娘？

窓割り犯人撃退の翌日の放課後、剣正は多馬川の河原に座り込み、  
とある人物を待っていた。ホームルームHRが終わって、すぐ教室を飛び出し急  
いで走って来たこともあり、額には汗が浮かんでいた。

待ち合わせをしている人物はまだ来ていないらしく、座った状態  
のまま忙しく周囲をキョロキョロと見渡している。

「普通に歩いて来ればよかったよ」

立ちあがった剣正は見晴らしの良い所へ移動し一通り見てみたも  
の、期待していた人物を見つけることはできず、急いできたのが  
馬鹿らしく思ったのか大きく溜息を吐く。

この河原は数ヶ月前から避け続けていた相手である百代と初めて  
争った場所であった。百代の吐いた嘘が原因で、その言葉を真に受  
けた剣正は込み上げた黒い感情に身を任せ、拳を握り怒りのままに  
振るい続けた。

最終的には途中で止めに入った大和に、百代の言葉が偽りだった  
事を告げられ落ち着くことができたのだった。

勘違いから拳を握ったうえに百代に投げ落とされ負けたという苦  
い思い出があるが、変わるきっかけを得た場所でもあり剣正は大切  
に思っていた。

「お待たせー。ゴメンね、事務所に寄ってたら遅くなっちゃった」

「お疲れさん。いいよ、気にしないでくれ」

感慨かんがいに浸っていた剣正に話しかけてきたのは赤い髪を短く切った女性だった。身長は剣正より10センチほど小さいが、その身をスーツに包んでいて、どこかカッコイイ印象を覚える。

「とりあえず、ただいま」

「おかえり宇佐美さん」

「その呼び方は、仕事以外では禁止って言ってるでしょ？」

「あー、おかえりユウ姉ねえ。恥ずかしいから苦手なだけだな」

「そんなこと知らないわよ。私が良ければ、それでいいの」

望んでいた愛称で呼ばれたことで、不満そうだった表情から笑顔に変わった彼女。川神学園の教師の宇佐美巨人の娘で、名前は「宇佐美 優」さみ ゆう。

だが血は繋がっておらず、十数年前に親を亡くした優は、親不孝通りで半死の状態で倒れている所を宇佐美に保護され、以降、宇佐美の下で育てられることになった。

何の関係もない自分の面倒を見てくれた宇佐美に感謝し、姓を『宇佐美』に変え、代行業を手伝っている。交渉事などの仕事を主に担当している。

一年程前に担当していた仕事で相手方が突如逆上し、襲いかかられたところを偶然通りかかった剣正に助けられ、その際「気に入った」と言つてスカウトしたのだったが、仕事人としての建前上、強さを買つたという理由で宇佐美代行センターにスカウトした経緯があつた。

「なんだか納得できねえけど、まあいいか」

「剣ちゃんのそういう所好きよ」

「へえへえ」

剣正を気に入った優は、自分のことを『ユウ姉』と呼ばせるようにしていた。そして剣正のことを弟のように可愛がる関係は百代と大和に似ている。違ふところといえば、過ごした時間だったが、この2人にはそんなこと関係なかった。

「そうそう、アンタ百代に負けたんだって？ それも完膚無きまでに」

「げっ……なんで知ってんだよ」

「情報は持っているだけで損はしないの。あと言い忘れてたわね、

私って川神学園の卒業生なの。それで3年の時に私を口説いてきた子がいたの」

「あー、わたった。それが先輩なんだろう？」

登校時に女子生徒の取り巻きの中にいる姿や、街中で年上の女性を口説きに行っている人物を見たことのある剣正は、答えに行きつき軽く頭を押さえる。

「ご名答。付け加えるなら当時のモモちゃんは一年生」

「それでどうしたの？」

「もちろん適当に相手したわ。話してみると面白い子だったから仲良くなっただけだね。それでこの前、モモちゃんからメールもらったのよ。『面白い奴がいる』って……話しを聞いているうちに剣ちゃんって気付いたわけ」

「初めて知ったよ。ってことはユウ姉の卒業と入れ替わりに俺が入学したのか」

「言っただけだからね。私のこと何歳だったと思ってたの？」

「先輩と同じくらいかなと」

「そっつい気遣いはいいの。ほら、正直に言ってみなさい」

「……20代の半ばくらいと思ってました」

この場所に来る時に掻いた汗とは違う汗が剣正の背中を伝う。

「よろしい。やっぱり長いこと大人の相手をしてると老けて見えるのかな。仕方ないとは言え、ちよつと憂鬱」

「申し訳ない。ってか何でバレたんだよ」

「別にいいんだけどね。剣ちゃんのクセ」

「クセ？」

「嘘を吐く時、微妙な敬語っていうか丁寧語になってるのよ」

「ほえー、言われてみればそうかも……」

優は幼い頃から宇佐美の仕事を傍で見ていた。もともと秀でいた観察眼は成長と共に養われていき、高校生になるころには、大人顔負けの洞察力を得ていた。

「で、どうやって負けたのか話してみなさい」

「それは」

その後、剣正は決闘の始まりから、倒れる瞬間までの経緯を覚えていたかぎり説明をする。決闘からあまり時間は経っていなかったため、思い出すのは容易だった。

「それは剣ちゃんアンタが悪い」

「だって、あの回復力、何て言ったらつけかな……そう“瞬間回復”だ。あんなのあると思わなかったんだよ」

「川神鉄心の孫娘で川神院の次期総代候補なのよ？ それくらいはあるかもしれないって考えないのが駄目」

「えー、だけどよお」

「常識に囚われないの。人間なんて体のポテンシャルを半分も使えてないんだから。でも中には使えてない部分を引きだす人もいるってこと。そもそも剣ちゃんの目だってそうでしょう？」

『自分が悪い』ということに納得できていなかった剣正だったが、引き合いに出された自分の目のことを言われ何も言えなくなってしまう。

たしかに剣正の目は常識からは考えられない能力を持っており、高速で移動する物体も集中すればスローモーションのように捉える



ことができた。

百代との決闘まで学園では隠していた剣正だったが、代行の仕事で優の手伝いなどをしたことがあったので、目の存在を知られていたのであった。

「考えが甘かった。これからは気をつける」

「よろしい。自分の欠点を見つめるいい機会になったね」

「ゆっくりと克服していくさ」

「それでこそ私の弟」

「ハハ、敵わないなユウ姉には」

合わなかった時間を埋めるように言葉を交わし、笑顔を見せる二人は本当の姉弟のように見えた。

### 第13話：帰還！宇佐美の娘？（後書き）

新キャラ登場回でした！

剣正を書く前に考えていたオリ主の予定だったキャラで、本来は男のはずだったのでですが女性化で登場させることにw

なんとなくか趣味全開って感じですが、上手いこと話しに絡ませて行きたいと思います！

容姿に関しては剣正と同じく皆さまのイメージにお任せですw

今回は風間ファミリーに属するなら避けて通れない、あの金曜集会ですが何とか纏めてみせます！w

では毎度恒例の……

ご感想、ご意見、ご指摘など随時お待ちしております。  
誤字脱字があれば報告お願いします。

## お知らせとお詫び

いつも【真剣で俺が愛するもの！】を読んでいただきありがとうございます。

この度は読者の方にお知らせとお詫びがあり、このような文章を載せることになりました。

本作品を小説を執筆する際、PCを使用し原作をプレイしながら執筆を行っているのですが、先日PCが故障してしまい買い替えなければならぬことになりました。

携帯でも執筆は可能なのですが、原作が見れないとなると矛盾や誤表記などが起こりうる可能性があるため作品のクオリティダウンを防ぐ意味合いもあり、PCを買うまで更新を一時的にストップさせていただきます。

8月中には再び連載を開始する予定ですので、ご了承ください。

お詫びになるかはわかりませんが、次回更新までの間は現在までで掲載したものを、見直し手を加え質を上げる作業をいたします。話の流れや場面を入れ替えるのではなく、より良い描写をしたいと思いますので、アドバイス等がございましたら感想板・メッセージに気軽にお書き下さい。

各話の改正が出来次第、あらすじの最後にてご連絡いたします。

身勝手な理由でご迷惑をおかけし申し訳ございません。

必ず完結させますので、応援よろしくお願いします。

作者の忍でした。

第14話：変化した弟（前書き）

皆さんお久しぶりです！

待っていてくださった方、すみませんでした

o r z

## 第14話：変化した弟

久々に再会を果たした剣正と宇佐美優は会話もそこそこに移動していた。行き先は優の大好物である久寿餅を売っている和菓子屋がある仲見世通り。

「相変わらず人が多いわね」

「観光客に限らず、地元の間人も菓子とか買いに来たりするからな」

そう話しながら歩く二人の視界には数多くの人間が映っていた。特色のある土産物を物色する外国人から、優と同じように自分の好物を食べに来ている若者や老人、様々な人々が仲見世通りにいる。

歩けないほどの人がいるわけではなかったが、ぶつからないようにして歩くのは少々困難だったのか、優はこんなことを言い出した。

「剣ちゃん手繋いでー」

外見とのギャップを感じられずにはいられない一言。

「いやいや、子供じゃねえんだから。はぐれても店は知ってるし、

そこで合流すれば」

「そんなこという剣ちゃんは嫌い」

「……………」

「はい、決定！」

そう言つと半ば強引に剣正の手を取つた優は自分の手を重ねた。

「ンフ」

「あいな……………はあ」

文句の一つでも言つてやろうかと思つた剣正だったが、満面の笑みを零し隣を歩く優に毒気を抜かれ諦める事にした。行く行く和菓子屋を知っている剣正は諦めたのと同時に心の中で切に願う。

（頼むから居ませんように……………！）

ここ数週間の運を考えればわかつていた事だったが、結果を言えば剣正の願いは無情にも叶うことはなかった。

最悪とまではいかずとも運は微妙のままである剣正は、いつになつたら自分の運気は上昇するのか、と考えながら手にある久寿餅を

口に運んでいた。

「それじゃ優さんが前に言ってた弟って」

「そう劍ちゃん。仲良くしてあげてね」

隣で優と話しているのは劍正のクラスメイトである小笠原千花。

今時の女子高生という容姿や言動をとる彼女だが、実家の和菓子屋を誇りを持ち手伝っているという実はしっかり者なのかもしれない。

すぐ傍でキャツキヤと話す二人を後目に、お代は私が持つから好きなだけ食べていいと優に言われた劍正は久寿餅をこれでもかと言っくらい頬張り続ける。

(女三人寄ればっていうけど、二人でも十分ウルセエよ。ここに…いや、考えるのはよそう)

ここに先輩がいたら、なんて事を一瞬頭を過ぎった劍正だったが、綺麗さっぱりと忘れることにした。

ことごとく願望の叶わない劍正だったが今回の願いは天に届いたらしく、その後も百代が現れることなく、勘弁してほしい状況ながらも久寿餅の味を大事に噛みしめた。

十数分後、頼みまくった久寿餅を平らげた劍正は少し張ったお腹



を押さえながら、携帯電話と睨めっこしていた。受信ボックスに入っていたメールを開き読み終わると、何やらポチポチと打ち込みだした。

「誰かにメール？　もしかして彼女！？　そんな剣ちゃんに……」

「ウルサイな！　キャ……男“友達”だよ」

ディスプレイに表示されているメールの宛先には『風間翔一』。風間ファミリーのメンバーからはキャップと慕われ、剣正もキャップと呼ぶように言われていたが、今更恥ずかしく未だになかなか呼べていなかったりする。

「男友達かぁ。ふーん……」

「何か言いたいことでもあるのかよ」

出会ってから一年が経つが、剣正の口から“友達”という言葉が聞いた事がなかった優は、不満げな表情を浮かべながら話す剣正を見て微笑んだ。

「いえ、何も無いわ」

「そうかい。それじゃ俺はこれから行くところあるけど、ユウ姉はどうする？」

「あら、私を放置してどこに行くの？」

「人聞きの悪いこと言わないでくれ……さっきの友達から、廃ビルに来るようになって言われてるだよ。何か見せたい物があるらしい」

「もしかして、その友達って風間ファミリーの誰かじゃない？」

「そうだけど、何か知ってるのか？」

百代と仲の良い優は、由紀恵やクリスを除く風間ファミリーとの面識があり、ファミリーのメンバーとも仲が良く、剣正が呼び出された廃ビルにも行った事があったのだ。

「何度か遊んだ事があるのよ。へえ……それなら私は先に帰る事にするわね」

「埋め合わせはまたするから」

「その言葉覚えておくから。私を放置したこと後悔させてやる」

「勘弁してくれ」

「ふふっ、冗談よ。ほら早く行きなさい」

「ああ、行ってくる」

優に別れの言葉を告げると剣正は走り出して行った。

「よかったね剣ちゃん……」

そう呟いた優の遠ざかっていく剣正の背を見る目からは優しさが感じられた。

「それじゃ、私も残ってる仕事でも片付けに行きますか」

呼び出されていた廃ビルに着いた剣正は、走ったことで火照った体を風にさらして冷ましながら翔一を待っていた。

「最近走ってばっかな気がするぜ」

しばらくすると汗は引いてき、元の体温に戻った頃、遠くの方からかすかに音が聞こえてきた。段々と近付いてくるエキゾーストノートは翔一が跨る原付バイクから出す音だった。

「悪い、待たせたみたいだな」

「俺もさっき着いたばかりだし、気にすんな」

本日二度目となる待ち合わせ特有の会話を交わした剣正と翔一。

「ここにいっても何だから、さっさと案内するぜ」

「案内って、もしかしてこの中をか？」

「ああ、とりあえず着いて来い！」

案内すると言ったにも関わらず、説明をほとんどせず走り出し廃ビルの中に消えていった翔一の背を追い、抜き忘れられていたバ

イクのキーを引っこ抜くと剣正も廃ビルの中へと入っていった。

中に入ると上の階へと繋がる階段の前で翔一が待っており、後から来た剣正を見て先に行ってしまったことを謝った。

「いやあ、皆に早く言いたい事があって先に行っちゃってた」

「風間はそういう奴なんだって最近わかってきたから、気にしてない」

「怒るなよー」

「別に怒ってないさ。さあ、行こつぜ。それに早く言いたい事があるんだろ？」

剣正は駄々をこねる子供のように口を尖らせる翔一を見て、笑いながら案内をしてくれと頼んだ。

その後、翔一の後を歩き廃ビルの中を数階上がると一つのドアの元へと案内された。

「ここに何かあるのか？」

剣正の質問に得意げな表情を浮かべながら翔一はガツとドアを開け放つ。

「見て驚け！　ここが俺たち風間ファミリーの……ってあれ？　なんだこの空気？」

ドアの向こうには剣正、翔一を抜いた風間ファミリーのメンバーが集結していたのだが、明らかに気まずい空気が部屋の中を支配していた。

剣正たちが来たことで幾分か緩和された雰囲気の中、大和が翔一にこの状況が生まれた事情を説明する。

「なんだもう解決してるじゃん」

説明を聞き終わった翔一は一言で締めた。その後は機嫌の直っていない京を大和に任せ、翔一は懐からとある券をテーブル上へと出した。

「それ何のチケット？」

「よくぞ聞いてくれた！　商店街の福引きで旅行券が当たった。場所は箱根で二泊三日だ！」

それを聞いたファミリーのメンバーからは賛辞の声が上がり、翔一は満足した表情を浮かべる。

先ほどまでの気まずい雰囲気は彼方へと吹っ飛んでしまっていた。意識してなのか無意識なのか、一瞬で場の空気を変えた翔一を見て剣正は素直に感心していた。

「それっていつ行くんだったキャップ？ 準備とか必要だろうし」

「有効期限はと…… G・Wだな。皆は予定は大丈夫か？」

翔一の問いに頷く質問した大和たちが頷く。

「ああ悪い。G・Wは仕事があって参加できない」

剣正を除いて……。

「ヒゲに頼んでどうにかならねえのか？」

「んー、どうだろうな。こればかりは会社の信用に関わるから無理だと思っ」

岳人の質問に答えた剣正は、残念そうな顔を浮かべる翔一たちに笑いながら続けて話した。

「行けないのは残念だが、お土産は期待してる！できるだけ食べ物がいい」

「わかったぜ！各自、剣正に食べ物を買ってくるんだ、わかったな？」

「おー！と返事をしたメンバーは、どんな食べ物が好きなのかなどを剣正に聞いたりして、その後の時間を過ごした。」



## 第14話：変化した弟（後書き）

ようやくPCが手に入り、執筆を開始することができました。今回の更新までの間にメッセージをくださった方や見てくれた方、ありがとうございます！

そしてこれからも【真剣で俺が愛するもの！】と忍をよろしく願います！

帰ってきて早々ですが、ご感想、ご意見、ご指摘など随時お待ちしております。

誤字脱字があれば報告お願いします。

## 第14・5話：優（前書き）

本来は14話で使いたかった話なのですが、金曜集会の所でキリが良かったため切らせていただきました。

諦めることができず、短いですが14・5話という形で掲載することに……

ではごっごぞー！

## 第14・5話：優

剣正と別れた優は宇佐美代行センターに仕事の報告書を書きに着ていた。剣正と会う前に一度来たのだが顔を見せに行った程度だったので、まだ仕事が残っていたのだ。

事務所には誰も居ず鍵が掛かっていたのだが、優は代行センターの従業員全員に配られているキーを使い中へと入った。先ほどまで誰かいたのか、事務所内にはクーラーの冷気が残っており、ここまで歩いてきた優は心地良く感じた。

優はグラスに紅茶を注ぎ綺麗に整頓されている自分のデスクへと向うと、紙を数十枚も取り出し一枚一枚に記載漏れや誤字脱字がないかをチェックし始める。

紅茶を飲みながらも作業する速度は中々のもので次々に修正箇所を見つけ、書き足しや書き直しをしていく。作業中の優は剣正と会っていた時の表情とは打って変わり真面目なものだった。

30分もすると粗方の作業は終わり、あとは書き終えた報告書を専用のファイルに挟むだけとなり、重要な資料などが補完されている棚から未使用のファイルを取り纏めた物を挟んだ。最後の仕上げにファイルの帯に簡単な概要を書く元あった棚に収納し一息吐くことになった。

「帰ってきてても仕事って悲しいわね」

キャスター付きのイスの背に両腕を上にも伸ばしながら体を預けるとギィと音が上がる。

伸びを終えた優は「うーん」と声を漏らすとへたつと前のめりに机へとへたり込んだ。

優の脳裏には先ほどまで会っていた剣正の言葉が再生されていた。

「友達」か……あの剣ちゃんがねえ」

初めて出会った時から、優は剣正の口から友達という言葉聞いたことがなかった。学校での様子を代行センターの代表であり川神学園教師でもある宇佐美巨人に尋ねると、話す相手はいるみたいだが、友達と呼べる存在は少なそうだとの答えが返ってきたりした。

いつのことかは忘れたが優は剣正に尋ねたことがあった。

ねえ剣ちゃんって友達作らないの？

普段は何か答える剣正だったが、「ハハッ」と苦笑いを浮かべただけで、明確な答えは返ってこなかった。その時の剣正の表情を優は今でもハッキリと覚えている。

その後、優は剣正が特定の友達を作らない理由を宇佐美から聞いた。だからこそ剣正から「男」友達だよ」という言葉を聞いた時、優は涙を流しそうになった。

「本当によかったね」

起き上がった優は机の上にある写真立てを手に撮ると、一緒に写っている写真を撮られることに慣れていないのか微妙な表情を浮かべている剣正を見て微笑んだ。

## 第14・5話：優（後書き）

ここで一つ裏話を。

実は優の登場はもう少し先だったのですが、例の金曜集会をどうしようかと考えた時「あ、優出して剣正を足止めすればいいじゃん」という短絡的な考えが浮かびましたw

原作キャラが言いたいことは全部言っていたし、個人的には原作キャラのセリフを取りたくないということで、剣正に出番なんてなかったのですw

ご感想、ご意見、ご指摘など随時お待ちしております。  
誤字脱字があれば報告お願いします。

## 第15話：ハプニングは突然に

剣正はすっかり静かになった島津寮の中を眠気眼を摩りながら歩いていた。居間にある壁掛け時計は10時20分を指していた。本来なら学校がある時間なのだが今日はG・W<sup>ゴールデン・ウィーク</sup>。学生に限らず一部の社会人を除き全国的に休みなのだ。

「今頃、アイツらは電車の中か」

冷蔵庫にあったお茶を飲み、喉を潤わした剣正から呟きが漏れる。そう、風間ファミリーの面々は翔一の当てた旅行券を使って箱根旅行に出かけていた。普段は騒がしい島津寮に静けさが訪れているのは、騒ぐ張本人たちが居ないからだだった。

剣正も誘われていたのだが、先日の金曜集会（毎週金曜日に秘密基地に集まる風間ファミリーのイベント）でも言っていたが宇佐美代行センターでのアルバイトが入っていた為に、参加できず不本意ながら留守番ということになっていた。

風間ファミリーが旅行に出かけた今日、G・W初日は剣正もアルバイトがなく暇を持て余していた。

「ゲンちゃんもいねえし、クッキーはメンテナンスに九鬼の所に行ってるし……部屋の掃除でもするか」

部屋に移動した剣正は早速掃除を諦めようと思った。百代との決闘後、治療の為に川神院で一夜を過ごしている間、クリスの父であるフランク・フリードリヒが剣正の承諾もなく置いていった無線機が原因だった。

元は家屋だったものを改装して作られた島津寮。当然各部屋は和室であり、部屋の隅に追いやっているとはいえ完全に浮いてしまっている無線機は圧倒的な存在感と異質を出している。

「捨ててしまいたい」と思っている剣正だったが、会った際にフランクの危険性を感じてしまっていた為、捨てれないという状況に陥っていた。もし捨てるにしてもどうすればいいのかもわからないこともあり、完全にお手上げ状態の剣正。

「大串なら喜ぶんだろうけどな……」

剣正の口から出てきた人物の名は【大串スグル】。川神学園の21Fの生徒で一言で表すのなら、生粋のオタク。ジャンルはアニメなどのオタクの代名詞から軍関係のマニアックなものまで幅広くこよなく愛しており、二年に進級した際に行われた一泊二日のオリエンテーションで話したことがあった。その時の大串は第一印象の暗い奴というものを木っ端微塵に壊すかの如く、熱く語っていたのが印象に残っていた。

たしかに大串ならタダで実際使われている無線機を貰えるという状況に立てば大喜びしていたころだろう。だが、クドイようだが残念ながら無線機があるのは剣正の部屋。



「ん、そーいやコレってどう使うんだ？」

「うんうん」と頭を悩ませていた剣正は、ふと顔を上げると無線機に視線をやった。この部屋に無線機が置かれてから、ただの一度も使ったことがなかったのだ。

無線機の上に乗せられていた一通の封筒を引き出しから取り出した剣正は、一度クシャクシャになったことで読みづらくなった文面に目を通していく。

一枚目は読み返しても親馬鹿としか言いようのない内容だったが、実は封筒の中にはもう一つ同封されていたものがあつた。中から出てきたのは一冊の本。表紙には日本語でこう書かれていた。

『猿にでも分かる無線機の使い方・入門編』

「……………とりあえず、色々とツッコミたくはあるが」

少々おかしなタイトルの本ではあつたが内容はしっかりとしたも

ので、読了した頃には二時間ないし、一時間半ほど時間が経過していた。読んでいくうちに集中してしまっていた剣正は苦笑いを溢す。だが、すっかり基本的な無線機の使い方は身につけていた。

「おそるべし」猿にでもわかる無線機の使い方・入門編」

手紙や封筒を元あった引き出しに戻すと、剣正はカップ麺を持って部屋を出て行ってしまった。部屋を掃除するという目的はどこへやら、完全に忘れてしまっていた。

再びキッチンへと移動した剣正は買い置きしていたカップ麺にお湯を注ぐ為ヤカンに水を入れるとガスコンロに火を点けた後、冷蔵庫に残っていた白ご飯をレンジへと放り込んだ。起きてからお茶以

外のものを口にしておらず、お腹の減り具合はMAXに達していた。

レンジが暖め終わったことを知らせる音を出す頃、丁度ヤカンからも沸いたぞとヤカン独特の音を上げる。剣正は瞬時に火を止めると流れるような動作で、あらかじめ蓋を開けていたカップ麺にお湯を注いだ。非常に手馴れた手つきであり、普段から自炊をしていることがわかる姿だった。

「今すぐにも食べてえけど、コレは4分待つのが一番美味しく食べれる」

人によってカップ麺の待ち時間は人によって異なるが、剣正の食べようとしているカップ麺の待ち時間の目安は5分と記載されていた。剣正は少し硬いくらいの麺が好きであり通常より少し短い時間でいつも食べだすのだ。

お湯を注ぎ終わり仕上げに蓋を閉じた直後、島津寮に嘗て聞いたことのない音が響いた。

ビービービー！　ビービービー！

突然のことに剣正は驚いて手に持っていたカップ麺を床に落としそうになったが、なんとかバランスを保ち大切な食料を台無しにするという悲惨を回避することに成功しテーブルの上に置くと、音の聞こえてくる方へ向けて歩き出す。

音の発信源は剣正の部屋からだった。恐る恐る戸を開いた剣正は室内に顔だけを通り込み、中を確かめる。

「ってコレかよ……驚かさないでくれ」

音の正体は先ほど使い方を覚えたばかりの無線機から出ているものだった。

剣正は溜息を吐きつつも無線機の前まで歩いていくと、真新しいマイク付きのヘッドホンを頭に装着し、数あるボタンの中から一つを選び迷わず押した。

『聞こえるかね浅井君』

ヘッドホンから聞こえてきたのは、この無線機を置いていった張本人であるフランクの声。声に混じって銃声らしき音や何かが崩れ落ちるような音が聞こえてくるが、剣正は気にせず返事をする。

「問題なく聞こえますよ」

『それはよかった。では手短かに用件を話す。一度で覚えたまえ』

「はい？」

『今から島津寮に迎えを寄越す。時間にして60秒で、そちらに車』

に乗った私の部下が到着する。君はそれに乗るのだ。尚、詳しい説明は部下に聞きたまえ。以上で交信を終了する』

プツンつと短く音が鳴ると、ヘッドホンからは何も聞こえなくなり無線機も元の鉄塊に戻ってしまっていた。

「……………」

あまりの唐突さに言葉をなくす剣正。何が起こったのかと混乱している脳は思考するのを拒絶し、一時的に放心状態になってしまう。その間に無常にも一秒、二秒と進んでいく。

剣正を正気に戻したのは来客を知らせるチャイムだった。玄関に出てみると、そこには軍服を来た人間。一目でフランクの部下だとわかる人物は、顔を出した少年を視野に捉えると口を開いた。

「ご命令により浅井剣正殿をお迎えにあがりました。失礼ですが、貴方が浅井殿でよろしかつたでしょうか」

「は、はあ……………俺が浅井剣正だけど……………」

フランクの部下は少年を剣正と確認するやいなや、剣正の腕を掴むとドアの方へと力任せに引っ張っていく。

「よかった。では参りましょう。時間が押しております」

「ちょ、ちょっと待ってくれ！ まだ昼飯が、ラーメンが、ご飯が  
ッ！」

剣正は力の限り抵抗を試みるが、相手は現役の軍人。力で勝てるわけもなくズルズルと引き摺られていってしまう。

「残念ですが、諦めてください」

「い・や・だ！ 俺は昼飯を食べるん、だッ！」

火事場のクソ力とでも言うのか食べ物への執着心なのか引き摺られていた状況から一遍、寮の中へ、正確にはカップ麺などを置いたままのキッチンの方を目指して少しずつ前進していく。

「仕方ありませんね」

軍人はそう言うと言っていた手を離れた。いきなり引つ張られていた力が無くなったことで、剣正は前のめりに倒れこんでいき音を立てて床に激突してしまう。

「……………いつてえ……………って、え？」

剣正が感じたのは顔を床に叩きつけた痛みと背中に硬い何かを押さえつけられた感触。

「失礼ながら、強攻策に出させていただきます」

「なッ……!?!」

声が聞こえた直後、カチっという音と共に剣正の全身に電流が走った。

「ご安心を。一時的に麻痺しているだけで30分ほど経過すれば元に戻ります」

スタンガンを使った軍人は、力の入っていない剣正を担ぎ上げ玄関から出て行き、車の助手席に剣正を放り込みシートベルトを装着させると自身も乗り込み車を発進させる。

「俺の昼飯いいいいいい!」

剣正の悲痛な叫びは車内から漏れていたがG・Wということもあり、近隣の住人はどこかに出かけており気付く人はいなかった。

その日の晩、仕事から帰った忠勝はキッチンに残されていた作られたはいいが、手の付けられていないカップ麺とレンジに入れたっぱなしになっていたご飯を見つけると、文句を言いつつも片付けていた。



## 第15話：ハプニングは突然に（後書き）

公式HPでフランクさんのプロフィールを見ていて、とある項目に目を奪われました

武器：軍そのもの

武器ってアレですよ？

百代なら拳、ワン子なら薙刀と最も自分の力を引き出し上手く扱えるアレ。

ええい、ドイツの中将はバケモノか……！

ハイ、言いたかっただけですw

とまあ、そんな感じで驚いていた私ですが、今回は以前出てきた無線機を使った話でした

フランクさんが剣正を拉致った理由は言わずもがな。もう気付いている方はいると思いますが、今回の更新まで気付いていないフリをしていたけると嬉しいですw

それでは次回のあとがきでお会いしましょう！

ご感想、ご意見、ご指摘など随時お待ちしております。

誤字脱字があれば報告お願いします。

## キャラ紹介（前書き）

今回は地の分がない台本形式でお送りします

尚この話は本編の物語とは関係がないため興味のない方は、スパッ

！と飛ばしてくださいませ

## キャラ紹介

百代「さあ！ 剣正と優さんの容姿を言うんだ」

大和「唐突だな」

百代「読者の方から要望があつたんだ。ということ、これまでに  
出た剣正の容姿に関する情報を集めてもらった。モロ口頼んだ」

モロ「任せて。えーっと

・ 中途半端に伸びた黒髪（一章・第5話参照）

・ 悪くない顔（一章・第9話参照）

・ 太っていないはいない。が、軽くもない（二章・第4話参照）

僕が調べたかぎりだと、これくらいかな。もしかすると見逃している所があるかもしれないけど、それは作者のせいだね」

大和「こう見ると案外少ないな」

百代「だから要望が来たんだろ？ ここだけの話、要望を見た作者はギクツてしたらしいぞ」

モロ「サボってたんだねえ」

大和「それはそうと上の三つを見るだけだと、モロ……どこにでもいる人みたいだな」

剣正「本音が出てるぜ大和」

百代「剣正も来たみたいだから、ファミリーのメンバーに一人づつ  
剣正に関するコメントをもらおう」

キャップ「そうだなあ、制服のボタンは開けっ放しだ」

京「私と一緒に気だるそうな表情を浮かべてる」

ガクト「俺様と比べると細いが筋肉はあるぜ」

クリス「だらしないイメージ」

まゆっち「島津寮で見かける時は、カジュアルな服装をしていらっ  
しゃいますね」

松風「剣」

百代「大体こんな感じか」

松風「つて、オーイ！ オラを無視す」

百代「うるさいッ！」

松風「あう……」

剣正「俺が言うのも何だけど、あまり考えられてないな」

モロ「何かのゲームや漫画のキャラに例えるとわかりやすいかも」

剣正「俺、あんまりゲームとかしねえからわからん」

大和「困ったな……」

剣正「閃いた！」

百代「ハイ、剣正」

剣正「俺の姿は皆の心の中にあるー！」

「……………」

剣正「何だよこの空気……」

百代「バカは放っておいて、以上のことをふまえて読者の方の想像にお任せする」

剣正「……………orz」

百代「引き続きいて優さんの容姿についてだが、これは作者に任せてある。そしてこれが纏められたものだ」

- ・基本的にスーツを着用
- ・赤い髪を短く切り揃えている
- ・端整な顔立ちをしており、可愛いより綺麗より
- ・メリハリのある体つきではなくスレンダー
- ・ぶつちやけ F a e のバ ットさんがモデル（容姿のみ）

剣正「最後のつて……」

百代「面倒になったらしいな」

剣正「そんなんでいいのか？」

百代「最後に剣正と優さんのプロフィールを載せてお別れだ。本編  
で会おう」

剣正「あ、そっぴや俺連れ去られているんだ……」

浅井 剣正

身長：174?

体重：62?

血液型：B型

誕生日：1月3日（ひとみの日）

一人称：俺

あだ名：ケン 剣ちゃん

武器：拳

職業：川神学園2-F 寮住まい（1階）

好きな食べ物：甘いもの

好きな飲み物：炭酸以外なら何でも

趣味：猫とじゃれる

特技：視力を使うものなら何でも

大切なもの：猫

苦手なもの：イレギュラーな事

尊敬する人：特になし

宇佐美 優

身長：163?

体重：ヒミツ

血液型：AB型

誕生日：11月1日（紅茶記念日）

一人称：私

あだ名：ゆう姉、

武器：拳（護身術程度）

職業：宇佐美代行センター

好きな食べ物：甘いもの

好きな飲み物：紅茶

趣味：人間観察、剣正弄り

特技：声マネ、変装

大切なもの：お金

苦手なもの：運で左右されるもの

尊敬する人：宇佐美巨人



## キャラ紹介（後書き）

開始から終了まで寒いやり取りに付き合せてしまい申し訳ないです

o r z

剣正ってどんなイメージを持たれているのでしょうか？  
書いていて、ふと疑問に思いましたw

第16話：誘拐のち空（前書き）

お気に入り登録、感想に感謝を……

## 第16話：誘拐のち空

「なあ、そろそろ説明してくれねえかな？」

連れ去られた直後は騒いでいた剣正も、疲れなのか、諦めたのか今ではすっかり落ち着いた様子で助手席に座っている剣正は、運転席で仏頂面をしてハンドルを握り車を走らせている大男に声を掛けた。

「中尉殿から事前に連絡があつたはずですが」

「連絡もなにも、俺は『島津寮に向かえを寄越す』としか聞いてない」

剣正は誘拐前にクリスの父であるフランク・フリードリヒから無線で言われたことを、要約して話した。それを聞いた大男は納得した表情を浮かべると、説明をし出した。勿論その間も前から視線を逸らしたりはしない。

「わかつたけど、わかりたくねえ……」

説明を受けた剣正から出た言葉である。これまでにないほど憔悴しきつた顔で、声からは絶望にも似た心情が感じられた。

「中尉殿もお忙しい身なのです」

「……………」

「どうかご理解いただきたい」

「……………」

「浅井殿？」

「わかった！ わかったから！ 頼むから左手に持つてる物を片付けてくれ」

一向に「YES」と返事をしない剣正に、大男は先ほど使ったスタンガンをちらつかせていたのだ。おそらく大男は拳銃も持っていると思えるが相手が「どうせ撃ちっこない」とタカを括る可能性もあり、一度味わったことのあるスタンガンの方が脅すには効果的なのだ。

実際その通り、剣正は怯えていた。

誰しも、一度喰らった痛みなど味わいたくないのである。

「それで、俺はこれからどこに行くわけ？ ええと」

「ルーカスです。浅井殿は空港に準備されている小型ジェット機で

中尉殿の居る紛争地帯付近へと行ってもらいます」

「ルーカスさん、それって……結構……危険じゃない？」

「護衛の者も同行致しますので」

「いや、そうじゃなくて」

「これは申し訳ない。防弾チョッキも用意させてあるのでご安心を」

「危険なんだな……」

剣正は「危険はない」という言葉を欲したのだが、現実主義である大男は決して剣正の望んでいる答えを返さなかった。

二年に進級してからというもの、ほとんどロクな目に遭っていない剣正。それに拍車を掻けるように今回の誘拐。汚職に塗れた政治家よろしく剣正の目は濁りきっていた。

そんな剣正の様子を特別気にするわけでもなく、車は着々と目的地へと向かう。

数十分後

空港に予め準備されていた小型ジェット機内に剣正の姿はあった。

「あれ？ ルーカスさんは来ないの？」

「私はこれから任務がありますので」

「そうなんだ。何するか知らねえけど、頑張ってる」

「ありがとうございます。では御武運を……！」

「は？」

剣正が聞き返そうとした瞬間、外と機内を繋いでいたドアがバタンと大きな音を立てて閉じられてしまう。

「御武運だって……？ ふざけんなチキショー……！」

車で誘拐された時と同じように、機内に虚しく剣正の悲痛の叫び声が響く。理不尽なことに連続して遭遇している剣正の叫びは今まで以上に大きなものだった。

嵐のように荒んでいる剣正の心。それとは裏腹に窓から見える外の景色は雲ひとつなく晴れ渡っている。島津寮に帰りたい気持ちでいっぱいだったが、そんなこと今更できるわけもない。

剣正は行き先の分からない不安など、様々なものが押し寄せせてきていることに、どうしようもない感情に苛まれていた。

ぐう………

「あー、ちょっとお願いがあるんだけど」

「はい」

「何か、食べるものある？」

「暫しお待ちを」

一時間以上続く沈黙を破ったのは剣正のお腹の音。それもそのはず剣正は昨夜の晩御飯以降、何も口にしていなかった。

剣正は座っている席の後方にいた、同行してくれるという軍人に食料を求めた。

剣正の願いを聞いた軍人は、席を立つと前方に置いてあったバッグの中から食べられる物を持ってきて、剣正へと手渡した。

「ありがとう」

剣正の手の中にあつたのは、二つの缶詰とパン、スプーンとフォーク。軍隊が軍事行動中に配給される食糧であるコンバット・レーション 日本語でなら野戦糧食、戦闘糧食 だった。

お世辞にも美味しいと言える代物ではなかったが、相手が軍人ということもあり出てくるものを予想していた剣正は文句の一つも言わず一心不乱に食べ続ける。

「い」馳走さま



食べ終わった剣正は日本人らしく合掌して食事を終えた。

空腹から解放されたことで、少し眠たくなっていた剣正は、その後は特にすることがあるわけでもなかった為、意識を手放した。

「浅井殿起きてください」

「んあ？ 晩飯か？」

「いえ、夜食ではございません。そろそろ降りるので準備の方をお願いします」

「準備って……俺、何も持ってきてないぜ？」

「そうでしたな。ではコチラへ」

「まだ空の上だろ？ 着陸するまで座ってた方がいいんじゃない？」

「ですから先ほど言ったように、”降りる”のです」

「降りる？ って、まさか……」

寝起きでボケていた剣正の思考が一気にクリアになる。現在、剣正たちを乗せている小型ジェット機は遙か上空を飛行中で、一向に下降する気配を見せていない。その状況に、軍人の言った『降りる』という言葉を踏まえた結果導き出される答えは……

「そこから飛び降りるなんてことは……ないよな？」

剣正の指がさす方向の先には、鉄製の扉。それは剣正が乗り込む、もとい無理やり押し込まれた時に通った扉。

「はい。本来着陸する予定だった場所が、戦闘により破壊され現在使用することができないとの連絡が入りましたので」

「嫌だ」

「時間がありません。速やかに準備してもらいます」

「おい！ 人の話を……いや、何でもないです、ハイ」

剣正の目に映ったのは、天敵スタンガン。

自分を今の窮地に追い込んだ憎き武器であり、見るだけで与えられた痛みと痺れを思い出させられる代物。

死んだような目をしたまま突っ立っている剣正に、軍人は馴れた手つきで器具を付けていく。剣正が前、軍人が後ろという格好で器具を連結させ終えると、扉を開け放ちカウントをとり始めた。

「フンフ  
funf」

最近、何でもこつも不幸なんだよ

「ファイア  
V i e r  
」

あの無線機、絶対に叩き潰して捨ててやる

「ドライ  
d r e i  
」

でも、何より先に飯だな

「ツヴァイ  
z w e i  
」

とりあえず無事に帰ろう

「アイン  
e i n s  
」

剣正がそんなことを考えている間に、無常にもカウントは進んでいき

「ヌル  
n u l l  
」

ダラリとしている剣正を気にすることなく軍人は外へと飛び出した。

その日、剣正は初めてスカイダイビングを体験した。行き先は死地……！

## 第16話：誘拐のち空（後書き）

皆さんお久しぶりです！

短い内容でスミマセン orz

次回は早めに更新したいと思しますので、どうかご容赦を……

ご感想、ご意見、ご指摘など随時お待ちしております。  
誤字脱字があれば報告お願いします。

第17話：獵犬との出会い（前書き）

久々の戦闘回でございますw

## 第17話：獵犬との出会い

剣正が感じるのは背後からの僅かな温かさ、ゴツゴツした感触。そして恐怖以外の何物でもない。

以前、百代に首根っこを掴まれ川神学園の屋上からダイブした経験があったが、今回のコレは以前のソレとは次元が違う。

体験したことのない高度から下を覗くだけでも脚が竦むというのに、その高さから飛び降りただ。恐怖を感じないわけがない。

「……………」

恐怖を感じると悲鳴を上げたりするが、剣正からは何も声が発せられていない。

まだ余裕があるのかと思うが、そうではなかった。  
あまりの恐怖に声が出ないのだ。

「パラシュートを開くので、衝撃に備えてください」

「……………」

背後から軍人が注意を促したが、返事はない。

剣正は必死に戦っていた。

よく漫画やアニメなどで見る光景。

今まで味わったことのない恐怖に出会った時の人間の行動。

恐怖により、その場へたり込み、声が出ない。声の代わりにとばかりに出てくるのは水。それも下半身から。

これまで学園生徒の前で醜態を晒してきた剣正でも、それだけは成人を前にした男としてしてはいけない。有るのか無いのかわからないようなプライドがソレを許さない。

剣正が出来ることは、断固たる決意と決して断金の意思をもって下半身から飛び出そうとしている水分を押さえ込むことだけ。

意識を散らしてしまえば、すぐにダムは決壊し大災害が巻き起こってしまう。主に剣正の下半身に集中にだが……。

もし意識を手放そうものなら、気を失う前になくしてしまうものがある。それは男としての尊厳。

それだけは守ってみせると剣正は心に誓い、日本からも地上からも遠く離れた場所から落ちていく。

数分後



無事地上に降り立った剣正は、生きていることへの喜びと恐怖から抜け出た安堵感から少し涙していたのは仕方ないだろう。

そして普通の精神状態に戻ると同時に、我慢していた尿意を発散すべく、軍人に伝え少し離れた場所へと向かった。

帰ってきた剣正の顔は晴れやかだった。

その後、待機していた軍用車に乗せられた剣正は、目的地である駐屯地までの道程を硬いシートの上で過ごした。

「よく来てくれたね。歓迎しよう」

そう言って剣正を出迎えたのは、剣正の誘拐を企てた張本人であるフランク・フリードリヒ。

「来たというか……無理やり連れて来られたというか……」

「フム、こちらへ来たまえ」

剣正のげんなりした様子を見てフランクは疲れているのだと判断し、キャンプの中へと剣正を案内した。

軍用ヘリや戦車、小型銃器に対人・対戦車用無反動砲などの軍用兵器を物珍しそうに見る剣正にフランクは、その都度立ち止まり軽く説明などをしながらキャンプ内を歩いていた。

「中将殿ここに居られましたか」

フランクが剣正に120? 迫撃砲の説明をしている所にやってきたのは赤い髪長く伸ばし、片目を眼帯で隠した女性の軍人だった。

「浅井君紹介しよう。彼女はマルギッテ・エーベルバッハ。我が軍の若きエースであり私の信頼する部下だ」

「浅井剣正です。よろしく」

「マルギッテ・エーベルバッハです」

軽くお辞儀をした剣正に対し、軍人らしくピシッとした態度で挨拶を返すマルギッテ。

挨拶を済ませたマルギッテはフランクへと戦果と被害を伝達する。

「ご苦労だった。本日はこれで作戦行動を終える。明日からの作戦に備え各自準備と休息を怠らないように伝えてくれ」

「ハッ！」

フランクの命令にマルギッテは敬礼し、この場を離れて行く。

そしてマルギッテは一部始終をカヤの外から見ていた剣正とすれ違う時に、一瞬だけではあったが視線を移していたが、剣正はそれに気付くことはなかった。

日も暮れ月が暗い夜の空を照らす頃、大勢の軍人に囲まれるようにして剣正は立っていた。

「あのー……なんで俺に何か用でしょうか？」

「私は誇り高き軍人だ」

「それはわかってるけど」

「だがその前に武人でもある」

剣正はようやくやく自分がこの場にいる理由がわかった。

” 武人 ” それは剣正が最も苦手とする人種であり、目指さなければならぬもの。

己の強さを求め、強き者を求める人種。それが剣正の知っている ” 武人 ” だった。

「もしかして、戦わなくちゃダメ？」

「私と拳を交えること光栄に思いなさい」

「なんで俺が戦わないといけないんだ？」

「川神百代と戦ったそうですね」

「まあ、負けちまったけどな」

「それが理由です」

「だから負けたって言ってるじゃん！」

「川神百代の強さは、世界でも有名です。その武人と素晴らしい戦いをしたとクリスお嬢様から話を聞きました」

剣正と百代の決闘を見ていたクリスは、剣正にとっての優、大和にとっての百代のように慕う姉貴分であるマルギツテに話していたのだ。

それを聞いたマルギツテにとって、今回の剣正来訪は僥倖だった。

「本当はボコボコにされただけなんだけどな……」

「謙遜はよしなさい」

「まあ、いいさ。こんだけ期待されてちゃ逃げるに逃げらんねえしな。でもこれだけは約束してくれ」

「一応聞いておきましょう」

剣正がマルギッテの勝負を受けたことに周囲の軍人たちから歓喜の聲が上がる。

軍律に厳しく、普段は寡黙な彼らも、こついつた騒ぎが大好きなのだ。

「これつきりにしてくれよ。戦闘は苦手なんだ」

「善処しましょう」

「そう言ってくれるだけでも嬉しいよ」

剣正の頭に浮かんだのは百代。何度断っても「戦え」と言っただけで聞かず、あげく半分は自分のせいとはいえ全校生徒の前で戦わせられたのだ。

マルギッテのように少しでも自分の話を聞いてくれる人間と出会えてよかったと感動している剣正。

ここ一ヶ月ほどで感動する水準が下がっている剣正だった。

数多くの戦場を駆け抜けてきたマルギツテ・エーベルバツハ。出撃するたびに戦果を挙げ、一度食らいついたら相手の命が尽き果てるまで離さぬその姿から付いた名は「獵犬」。

尋常ではない殺気にも似た闘気を全身から放つマルギツテの猛攻を、剣正は手足を使い次々に受け流していく。決して反撃はせず防御に徹する。そんなやり取りが五分間続いていた。

矢継ぎ早に放たれる攻撃を見切り外側へと受け流す剣正。マルギツテは受け流された拳の変わりにと砂塵を巻き上げながら蹴りを放つ。

それを後方に下がる事で難なく避ける剣正。かわされる事を予測していたのかマルギツテは舞い上がった砂埃の中を身を低くし剣正へと肉薄していく。

接近したマルギツテは低い体制から跳び膝蹴りを繰り出したが、これもヒラリと避けられてしまう。着地と同時に地面を転がり距離を取るマルギツテ。動作の大きな攻撃は放つ前後に致命的な隙を生

んでしまい、それを狙われない為の当然の動作だった。

だが剣正は避けた場所から一步も動かずマルギツテへと視線を向けていた。

「何故反撃してこない。答えなさい」

立ち上がったマルギツテは、その鋭い目つきで剣正を睨みながら淡々と言葉を紡いだ。

「俺の専門は防御なんだ。気にすることなくかかって来なよ」

射殺すような視線を気にすることなく剣正は返事をする、いつもの構えをすると手首を返しクイッと動かした。

そんな剣正の舐めた態度と口調に少しばかりマルギツテに熱が入りだす。

「……Hasen」

これまで素手だったマルギツテの両手にはどこから出したのか木で作られたトンファーが握られる。

「Jaag」

剣正には意味のわからない言葉だったが、なんとなくわかることがあった。

それはマルギツテが怒っていること。

先ほどまでも怒涛のような攻撃だったが、それとは比にならないほど攻撃速度と威力が上がっていた。

持ち前の視力の良さを生かして素手なら大抵の攻撃なら受け流せる剣正だったが、トンファーなどの武具を持ち出されると難易度は格段に上がりヘタをすれば大怪我をしてしまう。

何か剣正も武器があれば良いのだが、いかんせん剣正は武具の扱いに関しては素人並で、付け焼刃にもならない。

百代との戦闘以降、気による肉体強化をできるようになっていた剣正だが、硬質な鈍器や鋭利な刃物を無効化できるまでには至っておらず、ただひたすら避けるしか選択はない。

両手に握られたトンファーによる攻撃の継ぎ目を狙って接近するも、すぐに蹴りが飛んでくることもあり、思うように接近できない。

(仕方ないか……あまりこれは使いたくねえが)

腹部を狙った突きを難なく避けた剣正は集中する。

そう、百代戦で見せた視力を無理やり向上させる技だった。

見るから見るへ昇華する剣正の視力に捉えられないものはない。

はじめからこの技を使えばいいと思うが、この技には欠点があった。



爆発的に人外と思わざる得ない視力を得られるが、時間制限という枷があるのだ。

おいそれと使って勝負を決めきれなければ、剣正に待っているのは敗北の二文字。

そして剣正が最も危惧しているのは使用後の代償。

無理やり向上させられた視力は、目に大きな負荷を掛けてしまう。結果、数時間から数日間の視力低下、場合によっては一時的にはあるが目が見えなくなってしまう。最悪のケースは失明という可能性も考えなくてはならない。

だからといって、剣正はこれを絶対に使わないとは言わない。

なぜなら

目の前にぶつかってくる人間が武人がいる  
手を抜くなんて失礼な真似は絶対に許さない

そう、学んだから。

引き上げられた動体視力は、マルギツテの暴風の如き攻撃を微風のように捉え、本来なら継ぎ目の見えないトンファアの連撃から、起死回生の突破口を見つける。

そして飛び込む。死地へと……その先にある台風の目に向かって。

「クッ……!!」

結果から言うと、マルギツテは剣正の接近を許した。

剣正の速度が上がったわけでもない。

マルギツテの速度が落ちたわけでもない。

ただ剣正がマルギツテの予想を超え無風地帯へと飛び込んだのだ。

剣正の取った行動は、高速で回る大型タービンへ向かってダイブするのと同じ行為。

一歩間違えれば大怪我や最悪死を向かえる行動。

だが、剣正はやり遂げた。

そして剣正に待っているのは、待望の瞬間。

技量と勇気を持ってして得られる最高の瞬間。

「もらったあああああ!」

超至近距離まで詰めた剣正が繰り出すのは下方から突き上げるようにしてブチかます肘打ち。

マルギツテが接近した敵を引き剥がすように放った膝蹴りよりも一瞬だけ早く、剣正の肘がマルギツテの体に突き刺さる。

「ッ………！」

さらに剣正は手を緩めず追撃をかける。

地上から数センチ浮いたマルギツテの腕を取り投げた。

ドンと鈍い音を立ててマルギツテの体は地面に叩き付けられ、肺から強制的に排出させられた空気が口から漏れ出る。

「ハアハア、これでどうだ………」

普通の人間なら一撃目の痛みで戦闘意欲をなくし、二撃目の衝撃で意識を失くす。

「………Hasen Jagd」

マルギツテは立った。

そう、剣正が戦っているのは通常の人間ではない。

「流石です……貴方の實力認めてあげましょう」

彼女は武人。

剣正が目指す川神百代と同じ人種。

「やっぱり駄目か……攻撃力不足は否めないね」

「久し振りに両目で世界を見るのもよいでしょう」

スルリとマルギツテの顔から眼帯が外される。

「ようやく本気になったか」

「私に本気を出させたこと誇りに思いなさい」

周囲にいる軍人からの歓声は鳴り止み、辺りには静けさ広がる。

そして静けさに呼応するように、マルギツテを中心に闘気が膨れ上がっていく。

先ほどまでの荒々しい気とは違い、今マルギツテから発せられているのは冷酷で鋭利に研ぎ澄まされた刃物のような闘気。

「そここなくちゃ、俺が奥の手を使った意味がねえ」

そう言う、剣正の片目は閉じられていた。  
時間制限という枷から逃れるには、片目ずつ解放するしかなかったのだ。

視界は半分になり戦闘を続行するには困難を極める状況ながらも、  
剣正は笑っていた。

いつの間にか剣正も”武人”になっていたのだ。  
いや、昔の姿に戻ったと言ったほうが正しい。

「その目」

「片目さえ使えれば十分さ。間違っても手加減なんてしないでくれ  
よ。」

「愚問です」

「それならいい」

剣正が……  
マルギツテが……

同時に一歩踏み出し、接近していく。

そして互いの闘志に巻き込まれるようにして、戦いが再開される。

本気を出したマルギツテの攻撃は剣正の体を掠り始めだす。

剣正の額からは汗が吹き出て、苦悶の表情を浮かべるようになる。

いくら視力が良いからといっても、やはり片目しか見えていない状態では攻撃を見切るのは不可能に近い。

それでも避け続けるのは剣正の武人としての意地と、低下してなお光る類稀なる視力のおかげだろう。

剣正とマルギツテによる戦いも終幕を迎えようとしていた。

「これが最後だな」

「久々に楽しめた。感謝してあげても」

「それは戦いが終わってから言ってくれ」

マルギツテの言葉を遮って、剣正が話しかける。それを聞いてマルギツテの顔に笑みが浮かぶ。

「それじゃあ、いくぜ」

再び剣正の目に奇跡の力が宿る。

片目だけとはいえ目に映る全てのものの動きをスローで捉える視力は、相手からすれば脅威以外の何物でもない。

マルギッテも、それをわかっていて攻撃を繰り返す。

見切れるものなら見切ってみる

そして反撃できるならしてみせる

と言わんばかりに……。

そして剣正の目に映ったのは、そんなマルギッテの姿

では、なかった。

ソレは遠く離れた地点に光るモノ。

光を反射して光ってしまったスコープだった。

「危ねえっ!!」

剣正は飛び出した。

一撃必殺の威力を秘めたトンファーを常人では決して見切ることのできない速度で乱撃を見舞うマルギツテに向かってダイブする。

タッチの差だった。

トンファーを身に受けながらもマルギツテの体を突き飛ばした剣正と、ライフルから飛び出た弾丸がマルギツテの居た位置を通過するのは……。

「チィ、よくも私の戦いを穢してくれたな……万死に値する」

マルギツテの顔には怒りの表情が浮かぶ。  
部下に聖戦を穢した者を直ちに殺せと命じる。

「よかった……間に合ったみたいだな……」

マルギツテの無事を薄れ行く意識の中で剣正は確認すると目を閉じた。



## 第17話：獵犬との出会い（後書き）

マルさんやつと出せてよかった。

いつにも増してブレを感じる文でしたがお許しを……orz

何気に今回が一話の文量が最も多かった回でしたw

決着はアレです……ドロー的な感じのアレですw

え？ あのままやってたらどうなったかって？

それは皆さんの想像にお任せしますw

私はマルさんの勝ちに一票！

主人公だからって勝てるという甘い考えはさせませんw

それでは恒例の……

ご感想、ご意見、ご指摘など随時お待ちしております。

誤字脱字があれば報告お願いします。

## 第18話：贈り物と送られるもの

「ん、ここは……」

目を覚ました剣正が見たのは知らない天井。

「よつやく目を覚ましたか。ここはテントの中だ。調子はどうだね？」

覚醒しきっていない剣正の耳に届いたのはフランクの声だった。何の調子を聞かれているのかわかっていない剣正だったが、徐々に意識がはつきりしていき、何故自分が寝ていたのか、そして何を問われているのかを理解した。

「大丈夫です。あ、何か飲み物をくれると嬉しいかな」

「わかった。すぐに持って来させよう」

フランクは携帯していた小型無線機を使い、部下に飲料物を持ってくるように伝えると、用事があると言い残り剣正が眠っていたテントから出て行った。

「はあ……あの人がいると息が詰まるぜ」

フランクが出た入り口も見ながらため息を吐く剣正。そして1分ほどベットで寝転がっていると、見知った人物がたずねてきた。

「無事だったみたいだな」

「感謝します。調子は？」

訪ねて来た人物とは剣正が倒れる間際まで戦っていたマルギツテ。手には先ほど頼んだ飲み物が入ったペットボトルが持たれており、剣正に体の調子を質問した時は、普段の凛々しいものではなく、申し訳なさそうな少女のような表情を浮かべていた。

「片目がボヤけて見えること以外何の問題もないさ。あと飲み物ありかと」

「まさか銃弾に!?!」

「違う違う。戦ってる時アンタの攻撃見切る為に本気だったからだ。何時かはわからねえけど治るから気にすんなよ?」

バツの悪そうな顔を浮かべているマルギツテに、剣正は笑顔で伝える。

「楽しかった。ありがとう」

「私もです。機会があるならばもう一度戦いたい」

「納得のいく決着じゃなかったからな……いいぜ、やろう！でもまた今度な」

戦う。

それは1ヶ月前の戦うことを嫌い、戦うことから逃げ、戦いを否定していた剣正からは絶対に出てくることになかった言葉。

それを理解している剣正はつい笑ってしまう。

先ほどまで浮かべていた笑みとは違う表情で笑う剣正を見て、マルギツテは突然なんだといったような表情になる。

「あー、これはだな……思い出し笑いというなんというか」

マルギツテの表情に気付いた剣正は、いきなり笑い出した自分の行動を恥ずかしく思ったのか取り乱してしまう。

そして恥ずかしいのを誤魔化そうと立ち上がったのが拙かった。

急に立ち上がったことで立ち眩みに襲われてしまったのだ。一瞬だけ真っ白になる意識、それにより前へと倒れていく剣正。どうに

か堪えようとした剣正だったが、体制が悪かったことが災しどうにもならなかった。

倒れていく最中見えた棒のようなものに捕まろうとしていたのだが、片目しかほとんど見えておらず、手を滑らせてしまう。

結果、無様に倒れた剣正は地面を転げ回ることになった。

「ふふふッ。大丈夫ですか？」

「あ、ああ大丈夫……。でも、ようやく笑ったな」

マルギツテは軍人として誇りを持ち、普段からビシッとして凛々しく振舞っており、笑うことは少ない。そして今回は剣正に怪我を負わせてしまったことへの罪悪感から、申し訳なさそうな表情しか浮かべていなかった。

合つてからずっと決して良い表情をしなかったマルギツテが笑ったのだ。

偶然に起きてしまったとはいえ自分の行動で笑ってくれたのが剣正は嬉しかった。

剣正が一番好きなのは『笑顔でいること』で、それは自分ではなく他人であっても同じ。

笑顔を見れば、少し幸せな気分になり嬉しい。

素もとが美人であるマルギツテの笑顔を見たので、それは尚更だった。

「……そんなことより、やはり片目がボヤけているのは危険なのでは？」

剣正の言葉で、毅然として振舞っていた自分が笑ったことに気が付き咳払いをするマルギツテ。

「普段が視力よすぎるから少し面倒だな」

「ではこれを」

「これって」

「私が使っているものです。嫌であれば捨ててくれて結構」

「ありがと、使わせてもらっよ。それにしてもよかったのか？」

「戻ればスぺアがあるので」

剣正に手渡されたのはマルギツテがいつも装着している眼帯だった。片目だけボヤけている剣正の身を按じてくれたのだ。

「でもこれってどうやって着けるんだ？」

「貸しなさい」

そう言ってマルギツテは、横着している剣正から眼帯を取り上げると、服に腕を通すかのように慣れた手付きで素早く着けてくれる。

「おー、ありがとう！ どうだ似合うか？」

ナルシストではないが、悩んで買った新しい服の感想を友人に聞くときのように訪ねる剣正。

「……似合ってます」

「なんだよその間はッ！？ いいよ、どうせ似合わねえさ」

そんなやり取りをして過こしてしていると、剣正たちのいるテントへフランクが戻ってきた。

「おや」

「あーいいです。似合ってないですから」

「ん、私はマルギツテが笑っているのが珍しかったただけのだが」

「中将殿ッ！」

「はっはっは、話してもいいが時間だ。浅井くん準備したまえ」

「準備？」

フランクから伝えられる『準備』という言葉に、嫌な予感がする  
剣正。

「時間がない。マルギツテ、彼を例の場所へと連れてくるように」

「ハッ！」

フランクはマルギツテに命令すると、テントか急ぎ足で出て行く。そして残されたのは剣正とマルギツテ。だがそこには先ほどまでのマルギツテはいなかった。いるのは軍人としてのマルギツテ。

「あのさ……また俺どっか連れてかれるの？」

「大人しくしていなさい」

「いや、だから！」

「言うことが聞けませんか？」

「ハイ……」



不安から噛み付いた剣正だったが、マルギツテにキツとひと睨みされると萎縮してしまいされるがまま縄で取り押さえられてしまう。

そして軍人とはいえ、女性のマルギツテに抱えられ剣正はテントの中から連れて行かれてしまうのだった。

剣正が強制的に連れて来られたのは、ここに来る際に乗ったものと同型のジェット機の中だった。それを見たとき剣正は家に帰れると心の中で小躍りしたのだったが、現実はそんなに甘くない。否、剣正に甘いはずがない。

「箱根に向かう」

「へ？」

フランクの言葉に間抜けな声を上げてしまう剣正。

「箱根って日本の？」

「そこ以外にどこがある。クリスが旅行中なのでな。年頃の男女が一緒なのだ、親としては心配して当然だろう。もし万が一クリスに何かあった場合は……」

今にも人を殺しそうな目で腰に備え付けてある拳銃を見つめるフランク。剣正はゴクリと息を呑んだ。

「あった場合は？」

「八つ裂きにした上でM G 4で蜂の巣にしてくれる！」

予想以上にひどかった。

筋金入りの親バカだと思っていた剣正だったが、これを聞いてフランクに対する評価がさらに下降、そして危険度レベルはレッドゾーンを振り切っている。

フランクが剣正の絶対に怒らせてはいけない人間リストに入った瞬間だった。

「大丈夫だと思いますよ？」

「思うのでは駄目だ！ 大丈夫でなくては！！」

「……で、何で俺が連れて行かれるのでしょうか？」

興奮していることは気にせず、剣正は思っていたことを尋ねる。

「スマナイね、柄にもなく取り乱してしまっていたようだ。浅井君にも旅行に参加してもらおうかと思ってね」

「お嬢さんの監視役ということですか？」

「それもお願いしたいが、本音を言つと御礼とお詫びだよ」

そうこれはフランクから剣正への急に連れ去つたことへのお詫びと、部下のマルギツテを助けてくれたことに対する御礼の気持ちだったのだ。

「でも俺バイトがあるんだけど」

「気にすることはない。君を迎えに言つた部下が君の代わりに働くことになっている」

「ルーカスさんが？」

剣正は自分が代行するはずだった仕事内容を思い出していた。剣正がゴールデンウィーク中に請け負っていた仕事は

- ・デパートの屋上にて着ぐるみで子供の相手をする
- ・最近誘拐事件が多発している地区にある保育園のガードマン

・そして合コン

上記の三つだった。

「何か問題があるのかね？」

「いえ特に」

「それでは向かうぞ」

「了解」

心の中で剣正は「がんばれルーカスさん！」とエールを送る。

これから人生二度目の恐怖を味わうとは知らずにのんきな剣正だった。

## 第18話：贈り物と送られるもの（後書き）

口調に問題がある気がしますがお許しを orz  
助けてもらったのだから、少しくらい丁寧に話してもいいじゃない！  
という考えのもと書いていたのでw w

そにしてもようやく次回箱根旅行へと移れますw  
長かった……でもまだ原作でいうところのOPはまだというw

それではいつものお目汚しを……  
ご感想、ご意見、ご指摘など随時お待ちしております。  
誤字脱字があれば報告お願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4828r/>

---

真剣で俺が愛するもの！

2011年10月21日03時06分発行